# 『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (13)
# ―『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1265 ～ 1287 年）

中沢敦夫，宮野裕，今村栄一

富山大学人文学部紀要第 73 号抜刷
２０２０年８月

# 『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (13) ―『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（1265 ～ 1287 年）

中沢敦夫，宮野裕，今村栄一

6773〔1265〕年

**【明るい彗星の出現について：1264 年 7 月】**

尻尾のある星〔彗星〕が東に現れた[1]。恐るべきしるしだった。それ自身から強い光線が発していた。この星は「毛のある」(власатая) と呼ばれている。この星を見たことで, すべての人々は恐れと恐怖にとらわれた。物知りたちはこれを見てこう言った。「地上に大いなる騒乱が起こるだろうが，神は自らの御心によって救われるだろう」。そして，何も起こらなかった。

**【ヴァシリコの妃が逝去する：1264 年後半】**

その年，エレーナ (Олена) という名のヴァシリコ公 [I112] の公妃[2] が逝去した。かの女の遺体はヴラジミル主教座の聖なる聖母教会[3] に安置された。

---

1）これは，歴史上でも特別明るい大彗星と呼ばれるもので，1264 年 7 月から 9 月にかけて東西を問わず世界各地で観測されている。近日点は 7 月 19 日。最初は東に現れ次第に西へ移動した。「東に現れた」となっているので 7 月頃のことだろう（[Святский 2007: C.190-191; C. 225, Прим. 89] 参照）。なお，『グスティンスカヤ年代記』では 6772(1264) 年の項に「恐るべき星が出現した。3 ヶ月の間輝いていた。光線は昼間でも発していた」[ПСРЛ T. 40, 2003: C. 123] と他の資料も参照したのだろう, 別様の書き方がされている。

2）この「公妃」(княгнѣ) はヴァシリコ公 [I112] の妻を指している。6737(1229) 年の記事で，ヴァシリコはユーリイ・フセヴォロドヴィチ [K3] の娘を妻としていたことが分かるが [ イパーチイ年代記 (10): 317 頁，注 486, 487]，この妃は 1244-46 年頃に死去している。その後，ヴァシリコはマゾフシェ公コンラート一世の娘（ウクライナ語訳注はレシェク白公の娘としている）と再婚しており，これが本記事の「エレーナ」（Олена は Елена (Helena) の東スラブ語綴り）であり，かの女はヴァシリコの息子ウラジーミル [I1121] と娘オリガ（[ イパーチイ年代記 (12): 注 323] 参照）の母親であると推察される（[Домбровский 2015: C. 329] 参照）。ただし，この女性については，教皇イノケンチウス四世の 1247 年 12 月付けの勅書では「ドゥブロフカ」(Dubrawka) と呼ばれており，名前が符合しない [Kronika halicko-wołyńska: s. 220, przyp. 1407]。これについては，ヴァシリコとの結婚の後に，かの女についてはキリスト教の洗礼名が使われるようになったと解するべきだろう。

3）ヴラジミルの内城から 1km ほど北にある聖母就寝首座教会 (Успенская соборная церковь) のこと [Раппопорт 1982: C. 105-106]。ヴラジミルの中心的な教会で，ムスチスラフ [I1] = ロマン [I11] 一族の菩提寺のような役割を果たしており，1170 年 8 月に没したヴァシリコの祖父ムスチスラフ・イジャスラヴィチ [I1] もここに埋葬されている（[ イパーチイ年代記 (7)：175 頁，注 32] 参照）。また，1269 年に没したヴァシリコ自身もここに安置された（下注 61 参照）。

6774〔1266〕年

**【タタール人の内争について：1264 年頃】**

タタール人自身のあいだで大いなる騒乱があった。かれら自身が，まるで海の砂のごとく数え切れぬほど多数の[4]人を互いに殺し合った[5]。

6775〔1267〕年

**【*864*】**平静だった。

6776〔1268〕年

**【ヴァイシュヴィルカスはシヴァルンの部隊とともにマウォポルスカ地方を掠奪する：1265 年[6]】**

ヴァイシュヴィルカス (Войшелк) が，さらにシヴァルン [S5] もリトアニアを公支配していたとき[7], リトアニア人はポーランド人のところに掠奪のために, ボレスワフ公[8]を討つべく進軍した。かれらはドロギチン[9](Дорогичинъ) を経由して進軍した。シヴァルン [S5] の配下の者

---

4)「海の砂のごとく数え切れぬほど多数の」(бе-щисленное множество, акь пѣсокъ морьскы) は，『士師記』7:12 の語句「らくだの数も海辺の砂のように多く，数え切れなかった」(велблюдом их не бяше числа, но бяху яко песок на краи морстем множеством) のパラフレーズ表現。

5) このタタール人の間の「大いなる騒乱」(мятежь великъ) については記述が短く何を指しているか特定し難いが，時期的に見れば，皇帝（大ハーン）のモンケが，1259 年に南宋への遠征中に戦死して皇帝位が空位になったことで，その二人の実弟クビライとアリク・ブケが帝位を争って対立した，1260 ～ 1264 年の皇帝位継承戦争を指すと思われる。これは，トルイ一族の内戦だったが，マムルーク朝を支援するジョチ一族の宗主（ハン）ベルケと，ビザンツ帝国を支援するフレグ（イルハン国の創始者）の間で 1263 ～ 1265 年に代理戦争のかたちで波及して，モンゴルの王族の間に大きな混乱をもたらした（[ 杉山 1996：150-180 頁 ] を参照）。

6) この年代はフルシェフスキイによる [Грушевський-Хронологія: С.365-366]

7) 当時，ヴァイシュヴィルカスはノヴォグルードクを拠点としてリトアニアを支配しており，1264 年のテルトヴァ，ナリシア地方への遠征には，シヴァルン [S5] も援軍として参加している（[ イパーチイ年代記 (12)：注 422] 参照）。シヴァルンのリトアニアの「公支配」(княжити) というのは，かれがそのままノヴォグルードクのヴァイシュヴィルカス（かれの岳父にあたる）のもとに滞在してかれを補佐していたことを指しているだろう。本文の表現から見ても，シヴァルンの支配における役割は副次的なものだった。

8) マウォポルスカ公のボレスワフ五世純潔公 (Bolesław V Wstydliwy) のこと。

9)「ドロギチン」(Дорогичинъ) はリトアニア，ルーシ（ヴォルィニ公領），ポーランドのそれぞれにとっての境界に位置する場所だった。ここでは，ヴァイシュヴィルカスの遠征のための拠点地として言及されているのだろう。

たちもかれら〔ヴァイシュヴィルカスの遠征軍〕とともに進軍し，スカリシェフ[10] (Скаришев) の近郊で，ヴィズロジャ[11](Визълъжа; Визлъ) とトルジョク[12](Торьжък) の近郊で掠奪を行った。そして，多くの捕虜を獲得した[13]。

**【ボレスワフ五世（純潔公）はシヴァルンに使者を遣り掠奪を非難する：1265 年末】**

その時，ボレスワフ公はひどく病んでいた。その後，ボレスワフは健康を回復し，自分の使者をシヴァルン [S5] のもとに遣った。その時まさにシヴァルン [S5] はノヴォグルードク (Новъгородеч; Новъгородц) にいた。

〔ボレスワフは〕こう言った。「わしに何の科（とが）もないのに，そなたは何故にわし〔の領地〕を掠奪するのか，わしの地を奪うのか」。シヴァルン [S5] は〔この非難を〕否定して，かれ〔ボレスワフ〕にこう言った。「わしはそなたを掠奪してはいない[14]。リトアニア人がそなたを掠奪したのだ」。〔ボレスワフ公の〕使者はシヴァルン [S5] に言った。「ボレスワフ公はあなたに対してこう言いました。『わしはリトアニア人がわしを掠奪したことを非難しているのではない。〔リトアニア人は〕わしの味方ではなく，〔だから〕あのように酷く掠奪したのだ。しかし，そなたに対しては非難することがある。どうか，神が公正であり，われらの間のことを裁かれますように[15]』」。

---

10）「スカリシェフ」(Скаришев) は，ウクライナ語訳注によれば，マウォポルスカ地方の城市で，現在のポーランド，マゾフシェ県ラドム郡スカリシェフ市 (Skaryszew) に相当し，ドロギチン（ドロヒチン (Drohiczyn)）からなら南西方向に 153km も進んだ場所になる。

11）「ヴィズロジャ」(Визълъжа; Визлъ) は，ウクライナ語訳注によれば，イウジャンカ川 (Iłżanka) 河岸の砦で，現在のイウジャ市 (Iłża) に相当する，前注のスカリシェフからだと南へ 16km ほど下ったところにある。

12）「トルジョク」(Торьжък) は，ウクライナ語訳注によれば，ヴィスワ川左岸の城砦で現在のポーランド中南部のシフィエントクジスキエ県のトゥルスコ･マウエ村 (Tursko Małe) に相当する。前注のイウジャからは，さらに 80km ほど南下した場所にある。ドロギチンからだと，234km ほども離れており，ヴァイシュヴィルカスとシヴァルンの掠奪部隊は長路の遠征を行ったことになる。

13）ヤン・ドゥウゴシュの『ポーランドの歴史』(Historiae Polonicae libri xii ) の 1265 年の項では，シヴァルンが各地から動員したルーシの大軍がボレスワフ公のサンドミェシュの地に侵入し，数日間掠奪を行ったが，サンドミェシュの貴族たちが住民とともに反撃して，掠奪品を取り戻し，大勝利を得たと記されている [Długosz ks.7/8, 1974: S. 180]。勝敗の評価は正反対なものの，全体の状況，ボレスワフ公が（おそらく病気のために）反撃に関与していないこと，上注 6 のような年代の一致などからみて，この記事の事件に相当しているだろう。

14）シヴァルンはヴァイシュヴィルカスの遠征に家来 (слуги) を参加させたが，自分自身は加わっていないことを言っている。

15）この一文は，戦争を一種の神判とみなす当時の考えが反映した，宣戦布告の定型表現である。

**【ボレスワフ五世は報復遠征を行いホルム付近を掠奪する：1265 年末～ 1266 年初め】**

そして，この時から，〔ボレスワフは〕戦争を始めた。そして，ポーランド人はホルムの近郊で掠奪を始めた。かれら〔ポーランド人〕とともにいた軍司令官には，シグネフ[16] (Сигнѣвъ)，ヴォルシ[17] (Воржь; Вьржъ)，スールコ[18] (Сулко)，ネヴォストゥープ[19] (Невъступъ) がいた。〔しかしポーランド人は〕何も〔捕虜を〕奪えなかった。〔土地の者たちは〕すでに城市〔ホルム〕へと逃げ込んでいたからである。すでに境界に住むポーランド人たち[20] が，かれら〔土地の者たち〕に〔ポーランド人来襲について〕の報せを与えていたのだった。

**【シヴァルンとヴァシリコ父子は対抗の掠奪遠征をルブリン付近で行う：1266 年冬～春】**

それから，シヴァルン [S5] はノヴォグルードクから〔ホルムへ〕速やかにやって来て，**【*865*】**自分の軍勢を集合させ始めた。ヴァシリコ公 [I112] とその息子ウラジーミル [I1121] も集合して，ポーランド人を掠奪すべく進軍を始めた。

シヴァルン [S5] はルブリン (Люблин) 付近で掠奪を始めた。ウラジーミル [I1121] はベーラヤ[21] (Бѣлая; Белое) 付近で〔掠奪を始めた〕。〔かれらは〕多数の捕虜を獲り，それから帰郷した。

---

16）このポーランド人軍司令官「シグネフ」(Сигнѣв) は，1248/49 年冬に，ダニールとヴァシリコがヤトヴャグ人を攻めるにあたって，ボレスワフ公から援軍として受け入れていた軍司令官シグネフと同一人物だろう（[ イパーチイ年代記 (12)：注 8] 参照）。

17）この軍司令官「ヴォルシ」(Воржь; Вьржъ) は，ポーランド史料によれば，ラヴィトフ (Rawitów) 一族出身者で，1259–1262 年にルブリンの城主 (kasztelan) で，1268-69 年にはサンドミェシュの軍司令官をつとめていた「ヴァルシャ」(Warsza) に比定することができるという。[Kronika halicko-wołyńska: s. 221, przyp. 1418]。なお，かれについては，1245 年の城市ヤロスラフ攻囲戦で，ロスチスラフ [G411] の側についていたポーランド人軍司令官 Воршь と同一人物の可能性もある（[ イパーチイ年代記 (11)：253 頁，注 420] 参照）。

18）この「スールコ」(Сулко) は，ポーランド訳注によれば，トポルチコフ (Toporczyków) 一族出身のアブラハムの息子スウカ (Sułka) に比定することができる。かれは，1260–1264 年にクラクフの軍司令官をつとめ，1268 年にはクラクフの城主 (kasztelan) となっている [Kronika halicko-wołyńska: s. 221, przyp. 1419]。

19）「ネヴォストゥープ」(Невъступъ) については，ポーランド史料で，1271 年にサンドミェシュの城主に任じられ，1274–1278 年にクラクフの軍司令官に就いた宮廷官の可能性がある [Kronika halicko-wołyńska: s. 221, przyp. 1420]。

20）「境界に住むポーランド人たち」の原文は ляхове-украинянѣ で，ホルムからルブリンにいたる境界地帯の住民は，ダニール＝ヴァシリコ一族の統治に好意的だったことを示唆している。

21）「ベーラヤ」(Бѣлая) は，現在のルブリン県ヤノウ・リュベルスキイ (Janów Lubelski) 区のビャラ村 (Biała Główna, Biała Druga) に相当する。ルブリンからだと南へ 60km ほど離れている。1243/44 年冬にダニールとヴァシリコはボレスワフ五世を攻める遠征を行った時，ヴァシリコがここを掠奪を行っている（[ イパーチイ年代記 (11)：注 378]）。

すなわち, シヴァルンはホルムへと出発した。ウラジーミル [I1121] はチェルヴェン[22] (Червьн; Чръвън) へと〔出発した〕。そこにかれの父ヴァシリコ [I112] がいたのである。〔そして〕チェルヴェンから (И-Щервена; ис Чръвна) ヴラジミルへと向かった。

かれら〔ヴァシリコ [I112] とウラジーミル [I1121]〕が〔ヴラジミルの〕家に到着すると, その後, 同じ週には，ポーランド人がチェルヴェン付近を掠奪し始めた。〔しかしポーランド人は〕何も奪うものはないまま，引き返し始めた。

**【ボレスワフ五世は和議のための会合をヴァシリコに提案し，テルナヴァでの会合で合意する】**

その後，ボレスワフ公は自らの使者として，ルブリンの教会主席 (пробощ) グリゴーリイ[23](Григорь; Григории) をヴァシリコ [I112] のもとへ派遣して, こう言った。「姻戚の御方[24]よ，会合を持とうではないか[25]」。ヴァシリコ [I112] は〔答えて〕言った。「わしは，喜んで〔会おう〕」。そして,〔ボレスワフ公とヴァシリコ公は〕テルナヴァ[26](Тернава) での会合を取り決めた。

**【ヴァシリコはテルナヴァに向かうが，ボレスワフ側はチェルヴェンを攻撃，ヴァシリコに撃退され撤退する：1266 年 6 月】**

それから，ヴァシリコ [I112] は会合のためにテルナヴァへ向けて出発した。かれ〔ヴァシリ

---

22）ヴラジミル近郊の付属城市「チェルヴェン」については, [ イパーチイ年代記 (10)：246 頁, 注 81] を参照。

23）ルブリンの教会主席 (пробощ: propst, probst)（司教に次ぐ教会組織の地位）であったグリゴーリイについては，すでに，6770(1262) 年の記事で，ヴァイシュヴィルカスを修道士として教導した人物として言及されている [ イパーチイ年代記 (12)：注 403 参照 ]。

24）ボレスワフ五世純潔公の, ヴァシリコ [I112] に対する「姻戚の方よ」(свояче)（姻戚 (свояк) の呼格形）の呼びかけは，ボレスワフ公の母グリミスラワが，ダニール [I111] の従兄弟叔父（イングヴァル [I22]）の娘にあたるという関係（[ イパーチイ年代記 (10)：245 頁，注 71] 参照）を指しているのではないか。ただし，ウクライナ語訳注は，ボレスワフ公とレフ [S2]（ヴァシリコの甥）は，ハンガリー王ベーラ四世の二人の娘を妻としており，その女系による関係を指して「姻戚」と呼称したとしている。いずれの場合でも，関係はかなり遠縁であり，ボレスワフにとって「姻戚」という呼びかけは和議のために強いて姻戚関係を求めようとする苦肉の策ではなかったか。

25）ボレスワフ五世は，境界地帯の相互の掠奪遠征による混乱を収めて，利害を調整するための和議の会合を提案したのである。

26）「テルナヴァ」(Тернава)（現在のルブリン県ビオウライ郡 (Biłgoraj) トゥロビン市域 (gmina Turobin) のタルナヴァ村 (Tarnawa Mała, Tarnawa Duża) に比定）は，ヴァシリコの根拠地ヴラジミル＝ヴォルィンスキイから西へ 116km ほど進んだ地点にあり，1262 年にボレスワフ公とダニール，レフ，シヴァルンの会合が行われた場所でもあった（[ イパーチイ年代記 (12)：注 390] 参照）。

コ〕がグラボヴェツ[27] (Грабовьц) まで行ったとき，かれのもとに報告がもたらされた。ポーランド人が計略によって，会合へ向かっておらず，〔テルナヴァを〕迂回して〈門〉[28] へと向かっているというのである。そして，〔ポーランド人は〕ベルズ[29] (Белз) へ向けて出発し，掠奪をしたり，村を焼いたりしていると。ヴァシリコ [I1121] はすぐに，シヴァルン [S5] および自分の息子ウラジーミル [I1121] とともに，グラボヴェツを出発した。そして，チェルヴェン[30] (ко Червьну; къ Чръмну) へとやって来ると，村々が燃えて，ポーランド人が掠奪しているのを見た。ヴァシリコ [I112]【***866***】はかれらに対して集中攻撃を仕掛けた。そこは，ポーランド人が〔土地の者たちを〕追い立てて，村々を掠奪し，かれらの多くを撃ち殺し，他の者を捕虜に獲った場所だった。ポーランド人は恐れをなして，帰国し始めた[31]。

**【シヴァルンの追討部隊は攻撃を焦ってポーランド人に撃退され敗北する：1266 年 6 月 19 日[32]】**

ヴァシリコ [I112] は，かれら〔ポーランド人〕を追って，自分の甥シヴァルン [S5] と自分の息子ウラジーミル [I1121] を〔追討のために〕派遣したが，〔ヴァシリコは〕あらかじめ二人に指示して，こう言っていた。「そなたたちは〔ベルズから〕近いところでかれら〔ポーラン

---

27）「グラボヴェツ」(Грабовец) は，ポーランド東部ルブリン県ザモシチ郡のグラボビエツ (Grabowiec) 村に相当し，ホルム（ヘウム）(Chełm) から南へ約 36km 離れたヴォルィニ公領内の砦。ヴラジミル⇒ホルム⇒ザヴィホストへとポーランド国境に向かう街道上に位置していた。ホルムからテルナヴァへは南西方向になる（上注 26）ので方向としてはずれている。ヴァシリコはいったん拠点の砦で会合の準備をするために南へ向かったということだろうか。

28）この〈門〉は，「城門」を意味する語 ворота が，峡谷の狭い通り道の意味に転用されて，特定の地形に対して使われたもの。ブーニンの論文を参照したコトリャールによれば，テルナヴァ（上注 26）から東へ 16km ほど進んだところからおよそ 28km にわたって北から南方向へ連山の地形が続くという [Котляр 2005: C.329]。なお，本年代記の以下の記述によればこの〈門〉＝峡谷は国境地帯のルーシ側にあったようである（下注 34 参照）。

29）「ベルズ」(Белз) は，ヴォルィニ地方の城市で，ブク川支流ソロキヤ川 (Солокия) 河岸に位置している。現在のウクライナ，リヴィウ州ソカリスキイ区のベルズ (Белз) に相当する。シヴァルンの拠点城市ホルム（ヘウム）とレフの拠点城市リヴォフ（リヴィウ）の間のほぼ中間に位置している。

30）ここはイパーチイ写本「チェルヴェン」(Червьнъ) とフレーブニコフ写本「チェルムノ」(Чръмно) で地名表記が異なっている。チェルヴェンは，現在のポーランドのザモイスキイ郡 (Zamojskie) チェルムノ村 (Czermno) に相当することから（上注 22），フレーブニコフ写本の「チェルムノ」は，書写の過程で，新しい（当時の）地名表記に書き改めたものではないか。

31）このポーランド人の掠奪攻撃については，ドゥウゴシュの『歴史』(Historiae... xii ) の 1266 年の項の記事で詳細に述べられている。そこでは，ボレスワフ公とシヴァルンの戦いが 1266 年 6 月 19 日に行われ，ボレスワフ公にとっては従兄弟のシェモヴィトの殺害（[ イパーチイ年代記 (12)：注 368] 参照）に対する報復攻撃であったとしている [Długosz ks.7/8, 1974: S. 195-196][Котляр 2005: C. 329]。

32）ポーランド軍とシヴァルン軍の決戦の時期については上注 31 を参照。

ド人〕と戦ってはならない。かれらを自分の土地へと行かせよ。そして，かれらが進軍して分散したときに，かれらと戦え」。

こうして，シヴァルン [S5] はウラジーミル [I1121] とともに，かれら〔ポーランド人〕を追って大軍を率いて軍を進め始めた。その部隊はあたかも大きな松林のように[33]見えた。シヴァルン [S5] は前方で自分の部隊とともに進み，ウラジーミルは後方で自分の部隊とともに進んだ。ポーランド人たちはまだ自分の土地へ入ってはいなかった。ようやく，〈門〉を過ぎたところだった。そこは，〔守りのためには〕堅牢な場所だった。なぜなら，そこを避けて通ることはできなかったのだから。それゆえ，〈門〉と呼ばれているのは狭い〔谷間だ〕からだった[34]。

そこで，シヴァルン [S5] は自分の部隊とともに前方を進みながら，かれら〔ポーランド人〕を追い詰めていった。そして，自分の叔父〔ヴァシリコ [I112]〕の言葉を忘れ，自分の兄弟〔従兄弟〕ウラジーミル [I1121] の部隊を待つこともせずに，戦闘に突進して行った。双方は白兵戦を戦い，シヴァルンの部隊は打ち砕かれた。場所が狭かったために，どこからも他の援軍の部隊が〔駆けつける〕ことはできなかったのである。**【*867*】**

こうして，ポーランド人がルーシ人に勝利して，かれら〔ルーシ人〕は，貴族であれ，庶民であれその多くが殺された。そのとき，千人長[35]の二人の息子，ラヴレンチイ (Лаврентѣи) とアンドレイ (Андрѣи) が殺された。二人は自らの大いなる雄壮ぶりを示して，お互い兄弟から〔離れて〕逃げ出すことなかったが，その場で手にしたのは名誉の戦死だった。

**【ボレスワフ五世とヴァシリコ＝シヴァルンは和を結ぶ：1266 ～ 67 年】**

その後，ポーランド人はルーシ人と和を結んだ。すなわち，ボレスワフ〔五世・純潔公〕はヴァシリコ [I112] およびシヴァルン [S5] と〔和を結び〕，〔かれらは〕大いなる親愛を持ち始

33）軍隊の偉容を「大きな松林のように」(акы боровѣ велицѣи) と喩える表現は，『キエフ年代記』『原初年代記』にも用いられている修辞である（[ イパーチイ年代記 (8)：210 頁，注 169] 参照）。

34）この戦闘の場となった〈門〉(ворота) については上注 28 を参照。この場所で決戦が行われてシヴァルンの部隊は決定的な敗北を喫するのだが，ドゥウゴシュの『歴史』(Historiae... xii ) の 1266 年の項の記事では，戦闘の場として Pieta（他の史料では Petra, Porta）という地名が言及されている。また，「シヴァルンはルーシ人とタタール人の大軍を一緒に率いていた」とあるが，当時のダニール公 [I111] 一族のタタールとの同盟関係（[ イパーチイ年代記 (12)：注 325] 参照）やのちのレフ [S2] によるモンケ・テムル＝ハンへの援軍要請（下注 80）などを見ると，一族とタタール人との関係は緊密であり，ここでもタタール人が援軍として参加していた可能性は高い（[Długosz ks.7/8, 1974: S. 195-196] [Котляр 2005: C.329] 参照）。

35）この「千人長」(тысячкий) は，1253,1255 年の記事で言及されているヴァシリコ配下の千人長「ユーリイ」を指すと考えられる [ イパーチイ年代記 (12)：注 255] 。

めた[36]。

**【ヴァイシュヴィルカスは修道士に戻ってウグロフスクに住み，シヴァルンはリトアニア統治を始める：1267 年】**

その後，ヴァイシュヴィルカスは，自分の義理の兄弟[37] シヴァルン [S5] に公領を与え，自身は再び修道士の位階を受けることを望んだ[38]。シヴァルン [S5] はかれ〔ヴァイシュヴィルカス〕に，どうか自分とともにリトアニアで公支配をしてほしいと，強く懇願した。しかし，ヴァイシュヴィルカスはそれを望まず，こう言った。「わしは神と人間たちの前で多くの罪を犯してきた。そなたが公として支配せよ，そうすれば〔リトアニアの〕地はそなたにとって安全である」。

シヴァルン [S5] はかれ〔ヴァイシュヴィルカス〕を説得することができず，リトアニアで公支配を始めた。

他方，ヴァイシュヴィルカスはウグロフスク[39] (Угровьск) まで，聖なるダニール (святой Данильи: Данилии) の修道院[40] へ行った。そして修道士の衣を身に付け，修道院に住み始めて，こう言った。「見よ，ここならばわしの近くにわしの〔義理の〕息子シヴァルン [S5] と，さらには主人でわしの父のヴァシリコ公 [I112] がいる[41]。二人のおかげでわしは慰めを得ることができる」。

---

36）「大いなる親愛を持つ」(быти в любви велицѣ) は緊密な同盟関係になること。1266 年 6 月のシヴァルン部隊の敗北を受けて，ヴァシリコ側は先に成立しなかったボレスワフ陣営との会合（上注 25 参照）を行い，そこで領土，捕虜，掠奪品について譲歩的な条件を受け容れたと考えられる。

37）シヴァルンがヴァイシュヴィルカスの姉妹と 1254 年に結婚しており，「義理の兄弟」(зять свой) にあたることについては [ イパーチイ年代記 (12)：注 182, 397] を参照。

38）本年代記にはヴァイシュヴィルカスが『ノヴゴロド第一年代記』6773(1265) 年の項に「自分の父が殺害された後で，(…) かれは神のお告げにより法衣を脱いだ。かれは神に 3 年後に法衣を着ると約束し，修道規定は守っていた」[НПЛ: С. 85, 314] とあることから，ヴァイシュヴィルカスは，父ミンダウガスが殺害（1263 年）された 3 年後，すなわち 1266 年に再び修道士に戻ったことが推定される。

39）「ウグロフスク」(Угровьск) は，ヴォルィニ地方，ブク川中流域支流ウゲル川 (Угер) の河口に位置する城市。現在のポーランドのウフルスク村 (Uhrusk) に相当する（[ イパーチイ年代記 (10)：246 頁，注 77] 参照）。

40）「聖なるダニールの修道院」(в манастырѣ ко святому Данилью) については，1247 年 8 月 27 日付の教皇イノケンチウス四世の勅書に «Gr [egorius] de Monte Sancti Danielis»（聖ダニエルの山〔修道院〕のグレゴリウス）の句が記されており，おそらくダニール公が自らの守護聖人に献じて創建した修道院と考えられる（[Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 223, przyp. 1443] 参照）。

41）ウグロフスク（上注 39）はシヴァルンの拠点地ホルムへは南へ 20km ほどと近い。また，ヴァシリコの拠点ヴラジミル＝ヴォルィンスキイへも，南東方向へ 70km ほどで達することができる。

ポロニナ (Полониньскый)〔修道院〕のグリゴーリイ [42] (Григорѣй; Григорий) は，まだ存命で，かれ〔ヴァイシュヴィルカス〕の教導者であった [43]。ヴァイシュヴィルカスはかれ〔グリゴーリイ〕が存命であることを問い合わせて〔知ると〕，喜んで，かれを呼び寄せるための使者を遣ってこう言った。**【*868*】**「父なるご主人様，ここへ来て下さい」。かれ〔グリゴーリイ〕はかれ〔ヴァイシュヴィルカス〕のもとへ来て，修道士の修行についてかれを教え導いた。

**【レフはヴァイシュヴィルカスを殺害する：1267 年 4 月】**

その頃，レフ [44] [S2] はヴァシリコ [I112] のもとに使者を遣って，こう言った。「あなたとの会合を望みます。その場にヴァイシュヴィルカスも加わるようにして下さい」。ヴァシリコ [I112] は，受難週間 [45] にヴァイシュヴィルカスを呼び寄せるための使者を〔ウグロフスクへ〕派遣して，こう言った。「レフ [S2] がわしに使者を送って，わしとそなたが会合すること〔を求めた〕。しかし，なにも恐れることはない」。

ヴァイシュヴィルカスはレフ [S2] を恐れており，〔会合へ〕行きたがらなかったが，ヴァシリコ [I112] の保証があったので出発した。光明週間に〔ヴァイシュヴィルカスは〕ヴラジミルへやって来ると，聖大ミハイル修道院 [46] に滞在した。マルコルト・ネムチン [47] (Марколтъ же Нѣмѣчинь: Нѣмчинъ) が，すべての公たち，すなわちヴァシリコ [I112]，レフ [S2]，ヴァイシュヴィルカスを昼食に招待した [48]。そして，〔皆は〕昼食をとり，酒を飲み，興じ始めた。ヴァシリコ [I112] は大いに飲酒すると，寝るために〔馬で〕家へと向かった。ヴァイシュヴィルカス

---

42）「ポロニナの修道院のグリゴーリイ」については上注 23 および [ イパーチイ年代記 (12)：191-192 頁，注 402-403] を参照。

43）ヴァイシュヴィルカスは 1254 年頃に受戒剃髪して修道士になり，3 年間グリゴーリイの指導を受け，1257 年にアトス山に向けて出発している（[ イパーチイ年代記 (12)：191-192 頁，注 400-404] 参照）。ヴァイシュヴィルカスはその 10 年後の 1267 年に，再び昔の教導者の教えを受けようと望んだのである。

44）当時レフ [S2] はリヴォフ (Львов, Львів) を拠点城市としていた。

45）ウクライナ語訳の注は 1268 年の受難週間 (страстная неделя) としているが，ポーランド史料に拠って，これは 1267 年と見るべきだろう（下注 50）。その場合には受難週間は 1267 年 4 月 11 日～ 16 日に相当する。

46）現在のヴラジミル＝ヴォルィンスキイ市の聖大ヴァシリオス円形聖堂（ロトンダ）から南東に 200m ほど離れたところにあった木造の建物。大天使ミハイルに奉献されていた。

47）「マルコルト・ネムチン」(Марколтъ же Нѣмѣчинь: Нѣмчинъ) のネムチン (нѣмчин) は〈ドイツ人〉を意味し通称で，マルコルト (Marcolt) が固有名に当たる。13 世紀のガーリチの城市には「ドイツ門」(немецкие ворота) と名付けられた城門があり，ヴラジミル＝ヴォルィンスキイにはドイツからの商人が活動しており [Пашуто 2011: С. 240]，そのことは本年代記末尾のウラジーミル [I1121] の遺言状にもうかがえる。マルコルトはヴラジミルで財をなした富裕なドイツ人商人だったのだろう。

48）復活祭を祝う宴席に招待したのである。1267 年の復活祭は 4 月 17 日で光明週間は 4 月 18 日～ 23 日だった。

は，そのとき滞在していた〔聖大ミハイル〕修道院へと向かった。

そしてその後に，レフ [S2] は修道院のかれ〔ヴァイシュヴィルカス〕のところへやって来て，ヴァイシュヴィルカスに対してこう言い始めた。「代父よ[49]，大いに飲みましょう」。〔二人は〕飲み始めた。太古から人間に善を望まぬ悪魔（ディアヴォル）は，レフ [S2] の心に〔邪心を〕植え付けた。そして〔レフは〕，かれ〔ヴァイシュヴィルカス〕がリトアニアの地を弟のシヴァルン [S5] に与えたことを嫉妬して，ヴァイシュヴィルカスを殺した[50]。こうして，かれ〔ヴァイシュヴィルカス〕は殺されて最期を遂げた。かれ〔ヴァイシュヴィルカス〕の遺体は布で巻かれ，聖大ミハイル教会[51]に安置された。

**【シヴァルンの死について：1269 年頃】**

ヴァイシュヴィルカスの死後**【*869*】**，シヴァルン [S5] がリトアニアの地で公として支配したが，僅かな年のあいだ支配して逝去した[52]。かれの遺体は，聖なる聖母教会[53]の父の棺の傍らに安置された。

6777〔1269〕年

何も起こらなかった。

---

49）レフがヴァイシュヴィルカスを「代父よ」(куме) と呼んだのは，ヴァイシュヴィルカスが 1255 年に生まれたレフの息子ユーリイの代父 (кума)（洗礼親，名付け親）であることによる。[ イパーチイ年代記 (12)：注 401] 参照。

50）このレフによるヴァイシュヴィルカス殺害については，ヤン・ドゥウゴシュの『歴史』第 7 章 (Historiae... xii ) の 1267 年の項に「ルーシ公レフが計略によってリトアニアの公ヴァイシュヴィルカスを殺害した。故ルーシ王ダニールの息子であるルーシ公レフは，自分の父親の死後にルーシの公座に就いた。そして，権力を手にしたが，それはかれの父が遺した富と人民のおかげだった。かれは，ルーシの地について，ミンダウガス（メンドルフィ）の息子のリトアニア公ヴァイシュヴィルカスと諍いや抗争をはじめた。〔ヴァイシュヴィルカスがルーシの地を〕自分のものにしようとしたからである。〔レフは〕対抗すると，このヴァイシュヴィルカスを計略によって殺害した」[Dlugossi Liber 7/8, 1975: s. 157][Długosz ks.7/8, 1974: S. 195] とある。土地の所有をめぐる争いが殺害の背景にあったこと，「計略による」(circumventum) 謀殺だったことは本記事の記述と合致している。

51）ヴァイシュヴィルカスが滞在していた修道院の中央教会のことで，同じ大天使ミハイルに献堂されている（上注 46 参照）。

52）シヴァルンの死去についてはこの記事以外に確かな史料はない。没年についてフルシェフスキイは 1266-67 年にヴァイシュヴィルカスが殺され，その「僅かな年」(лѣтъ немного) の後にシヴァルンが没したとすると，遅くとも 1269 年だったとしている [Грушевський-Хронологія: C.367 ]。

53）これは，シヴァルンの父ダニールが埋葬されたホルムの聖母教会 (церковь святой Богородицы) のこと。[ イパーチイ年代記 (12)：注 421] を参照。

6778〔1270〕年

**【トライデニスのリトアニアにおける公支配とかれの兄弟たちについて：1269 ～ 70 年】**

忌まわしく，無法で，呪われた，無慈悲なトライデニス[54] (Тройдей; Тройдени) がリトアニアで公支配を始めた。われらは，かれの無法ぶりについて，その破廉恥さのゆえに書くことができない。〔トライデニスは〕シリアの〔王〕アンティオコス〔四世〕(Антиохъ Сурьсый)，エルサレムのヘロデ〔王〕(Иродъ Ерусалимьскый)，ローマの〔皇帝〕ネロ (Неронъ Римьскый) のごとき無法者[55]だった。かれらの無法ぶりを越えた多くの邪悪なことどもを〔トライデニスは〕なした。

この無法者は 12 年生きてのち世を去った[56]。かれには兄弟たちがいた。それは，ボルザ (Борза)，シルプティス[57] (Сурьпутий)，レーシイ (Лѣсий)，スヴェルケニイ (Свелкений) だった[58]。かれらは，聖なる洗礼を受けて〔キリスト教徒として〕生きていた。かれらは，親愛の

---

54）「トライデニス」(Тройдей; ロシア語 Тройден; ポーランド語 Troyden; リトアニア語 Traidenis, c.1222-1282) は，シヴァルンの没後（上注 52）の 1269 年もしくは 1270 年にリトアニアの公位に就いたと考えられる。かれは，ロマン一族諸公が関係を築いてきたリトアニアのミンダウガス一族とは別の一族の出身者で，16 世紀の『ブィホヴェツ年代記』では，リトアニア＝ジェマイティア＝ルーシ公のロマン (Roman) の 5 番目の息子で，兄ナリマントス (Narymont) の指示によって，ライゴロド（[ イパーチイ年代記 (12)：注 157] 参照）を拠点にヤトヴャグの地の公支配を行い，ポーランド人，ルーシ人，マズーリ（マゾフシェ）人と戦って常に勝利したという [Хроника Быховца 1966: С. 45-46]。なおかれの兄にはナリシア公でミンダウガスを殺害した後プスコフに亡命したダウマンタス（[ イパーチイ年代記 (12)：注 408] 参照）がいた。

55）ここに無法者 (безаконьник) として挙げられている三人の暴君は，それぞれ，ユダヤ教を弾圧したシリア王アンティオコス四世（在位：157 B.C. - 163 B.C.），ローマに荷担してユダヤ人を虐殺したヘロデ王（在位：37 B.C. - 4 B.C.），ローマ時代のキリスト教を迫害した皇帝ネロ（在位：54 - 6 年）を指している。かれらの名はスラブ語訳されたビザンツ年代誌 (Хронология) に邪悪な王・皇帝として記されているもので，年代記記者が翻訳年代誌を参照したことは疑いない。例えば，類似の出典を持つ『原初年代記』6573(1065) 年の記事にも，アンティコス王，ネロ帝の名が不吉な存在として記されている（[ ロシア原初年代記：189, 474 頁 ] 参照）。なお，『ブィホヴェツ年代記』にもトライデニスをこの三暴君と比較している部分があるが [Хроника Быховца 1966: С. 46]，これは本年代記の記述からの借用が考えられる。

56）トライデニスの没年について明示している史料はないが，1270 年にリトアニア公になって本記事の「1 年生きてのち没した」とすると 1282 年頃と推定することができ，これが通説となっている。

57）トライデニスの兄弟「シルプティス」は，1276 年のトライデニスのウラジーミル [I1121] の対立のときに，軍司令官として派遣されている（下注 103 参照）。

58）ここに列挙されている 4 人のトライデニスの兄弟のうち，「シルプティス」（前注）を除く「ボルザ（バルザ）」(Борза，リトアニア語 Barza)，「レーシイ（リエシス）」(Лѣсий; リトアニア語 Liesis)，「スヴェルケニイ（スヴァルケニス）」(Свелкений; リトアニア語 Svalkenis) の三人についてはこの個所だけに言及されており詳細は不明。

うちに，謙虚，謙抑のうちに生き，正しいキリスト教信仰を護り，よく信仰を愛し貧者を慈しんでいた。かれらはトライデニスの存命中に逝去した[59]。

6779〔1271〕年

**【ヴァシリコの死について：1269 年】**

篤信にしてキリストを愛するヴラジミルの大いなる公，大いなる公ロマン [I11] の息子であるその名もヴァシリコ [I112] が逝去した[60]。かれの遺体はヴラジミル主教座の聖なる聖母教会に安置された[61]。**【*870*】**

6780〔1272〕年

**【ウラジーミルの城市ヴラジミルにおける公支配の始まり：1269 年】**

かれ〔ヴァシリコ〕に代わってかれの息子ウラジーミル [I1121] が公支配を始めた[62]。かれは，自分のすべての兄弟たち，貴族たち，庶民に対して正義を愛することにおいて輝いていた。

---

59）トライデニスの没年 1282 年より前に死んだということ。以下にヴァシリコ [I112] に殺されたトライデニスの「3 人の兄弟」についての言及があり（下注 74），これがボルザ，レーシイ，スヴェルケニイ（前注）だとすると，ヴァシリコの没年 1269 年（下注 60）以前に死んだことになる。

60）ヴァシリコ [I112] の没年について直接触れている史料はない。本年代記のかれの息子ウラジーミル [I1121] の死亡記事に「〔ウラジーミルは〕父親の後に 20 年公支配を行った」（стб. 918 参照）とあり，ウラジーミルは 1288 年 12 月 10 日に没していることから，ヴァシリコは 1268-69 年に死去したと推定できる。フルシェフスキイは 1269 年に比定しており，これが通説になっている（[Котляр 2005: С. 331] [Грушевський-Хронологія: С.367-368 ][Домбровский 2015: С.327-328]）。

61）ヴァシリコ一族の菩提寺としてのヴラジミルの聖母教会については上注 3 を参照。
なお，本年代記でヴァシリコ公の死についての記述が簡単過ぎるのは不思議である。カラムジンは『国史』第 4 巻で，ヴァシリコ公の晩年について「若いときには勇武の戦士として活躍したが，晩年には修道士となり苦行を行ったとされている。記録によれば，かれはある時期になって人里離れ，灌木に埋まった洞窟に住み，俗世における権勢欲にとらわれた戦いの日々に犯した罪を，悔恨しながら過ごしたという」と説明している。これは，歴史家が入手した，リヴィウの市長のジモロヴィチ（Zimorowicz）が書いた Triplici Leopoli, 1672 年の写本に拠ったものである [Карамзин-4: С. 100, Прим. 144, 202]。

62）編集史研究の上では，ここから 1289 年の記事までが「ウラジーミル・ヴァシリコヴィチ年代誌」(Летописец Владимир Василькович) として編集単位が推定されており，編者としてウラジーミル主教エフシグニイ (Евсигний) が比定されている。

**【レフのガーリチおよびホルムにおける公支配の始まり：1269 年頃】**

他方，レフ [S2] はガーリチ[63] とホルムで，自分の兄弟のシヴァルン [S5] を継いで公支配を始めた。

6781〔1273〕年

**【ガーリチ＝ヴォルィニ諸公はボレスワフ五世と和を結び，ボレスワフの内争に援軍を差し向ける：1271 年】**

〔ウラジーミル [I1121] は〕ポーランド人と，〔すなわち〕ボレスワフ公〔五世・純潔公〕と和睦していた[64]。当時，ボレスワフはヴロツワフ〔公国〕の公[65] (воротьславьский князь) と戦争を始めたのである[66]。かれ〔ボレスワフ〕を助けるためにレフ [S2] とムスチスラフ[67] [S4] は進軍した。ウラジーミル [I1121] 自身は進軍しなかったが，自分の軍隊をジリスラフ[68] (Жилислав) とともに派遣した。〔ウラジーミル [I1121]〕自身が進軍しなかったのは，かれ

---

63）城市ガーリチの支配公について，本年代記では長年言及がなく，1254 年にイジャスラフがガーリチを奪取するためにタタール人に援軍を求めたが失敗した記事が最後である。1270 年のこの記事で，ようやくレフ [S2] がガーリチの支配公になったとされている。かれの父ダニール [I111:S] は晩年はホルムを拠点城市として，ポーランドやリトアニアとの関係を重視していた。シヴァルン [S5] は典型的にリトアニア指向の公だった。それに対して，レフ [S2] は二人の死後，ホルムからガーリチへと拠点を移したということだろう。

64）ヴァシリコ [I112] はクラクフ＝サンドミェシュ公ボレスワフ五世との紛争の後 1266 ～ 67 年に和議を結んでおり（上注 36 参照），ヴァシリコの息子のウラジーミル [I1121] も父の死 (1269 年 ) の後も，ボレスワフとの友好関係を引き継いでいたということ。6787(1279) 年のボレスワフ公逝去の記事では，かれの人徳が讃えられている（下注 143）。

65）このヴロツワフ公 (воротьславьский князь) は，ヘンリク四世高潔公（Henryk IV Prawy, c.1258-1290）を指している。かれは，父ヘンリクの死後 1266 年からシレジア地方の中心都市ヴロツワフの公位に就いていた。

66）ヘンリク四世高潔公（前注）は，一時期シレジア（ヴロツワフ）を統治していたボヘミアのプシェミシエル・オタカル二世と同盟しており，1271 年にオタカルのハンガリーへの軍事遠征に参加した。これに対し，ハンガリーの諸公は，同盟者のヴィエルコポルスカの公及びボレスワフ五世等マウォポルスカの諸公と組んで，1271 年春にヴロツワフを攻撃した。ルーシ諸公はこれに援軍を派遣したのである。「戦争を始めた」とはこの抗争を指している。

67）この「ムスチスラフ」[S4] は，文脈から見てダニール [I111] の息子でレフの弟にあたる公 (князь) と考えられる。ただ，その名は本年代記の 6721(1213) 年の項のダニールの息子たちの紹介部分で，ロマン [S3] とシヴァルン [S5] の間の兄弟として触れられた他は（[ イパーチイ年代記 (10)：269 頁，注 24]），本文中にはこれまで一度も言及されておらず，これはロマン [I1] 一族の活動記録という年代記の性格を考えると非常に不思議である。この点をとらえて，ドンブロフスキはダニールにはムスチスラフという名の息子が二人いたと推定している（[Kronika halicko-wołyńska 2017: s.225, przyp. 1467] 参照）。

68）「ジリスラフ」(Жилислав) は文脈から見てウラジーミルの軍司令官だろう。

がヤトヴャグ人と戦争を始めていたからである。

**【ガーリチ＝ヴォルィニ諸公が軍司令官を派遣してヤトヴャグ人討伐遠征を行う：1273/74 年冬[69]】**

その後，諸公は評議してヤトヴャグ人を攻める遠征を決めた。冬が到来して，〔この遠征に〕諸公は自らは進軍せず，戦争のために自分の軍司令官たちを派遣した。〔すなわち〕レフ [S2] はアンドレイ・プチヴリチ[70] (Андрѣи Путивлич) を自分の軍隊とともに派遣した。ウラジーミル [I1121] はジリスラフを自分の軍隊とともに派遣した。ムスチスラフ [S4] はヴワディスワフ・ロモノシイ[71] (Володъслав Ломносый) を自分の軍隊とともに派遣した。

〔これらの軍司令官たちは〕行軍して，ズリナ[72] (Злина) を占領した。ヤトヴャグ人は集合したが，敢えてかれら〔軍司令官たち〕と戦おうとはしなかった。こうして，かれらは勝利と大いなる栄誉をもって自分たちの公のもとに帰還した。

**【ヤトヴャグ人諸侯がガーリチ＝ヴォルィニ諸公を訪問して和を結ぶ：1273/74 年冬】**

そしてその後, ヤトヴャグ人の諸侯, すなわちミンテリャ (Минтеля), シュルパ (Шюрпа), ムーデイコ (Мудѣйко), ペスティロ (Пестило) が, レフ [S2], ウラジーミル [I1121], ムスチスラフ [S4] のもとにやって来て，自分たちのために和を請うた。**【*871*】**かれら〔諸公〕はかろうじて和平を与えた。ヤトヴャグ人は和平を喜び，こうして自分たちの地へと帰った。

6782〔1274〕年

**【トライデニスとレフとの友好関係について：1269 ～ 73 年頃】**

トライデニスがまだリトアニアの地を公支配していたとき，かれはレフ [S2] と大いなる親

---

69）遠征の時期については, フルシェフスキイ, コトリャールの説に拠った([Грушевський-Хронологія: C. 368][Котляр 2005: C.332] 参照)。

70）レフは当時ガーリチの公であった（上注 63）ことから見て,「アンドレイ・プチヴリチ」(Андрѣи Путивлич) はガーリチの貴族であろう。チェルニゴフ公領に属しセイム川沿岸に位置する城市「プチヴリ」(Путивль) となんらかの関係があると思われる。

71）「ヴワディスワフ・ロモノシイ」(Володъслав Ломносый) はムスチスラフ [S4] 配下の貴族で軍司令官。ムスチスラフ公は当時，ルチェスク (Луческ; Луцк) で公支配を行っていた [Войтович 2006: C. 502]。

72）「ズリナ」(Злина) ヤトヴャグ人の城砦で，ウクライナ語訳索引によれば，プレゴリャ川 (Преголя) 上流域の，現在のリトアニアの南西部ヴィルカヴィシスキオ自治区 (Vilkaviškio rajono) の城砦と推定されている（[ イパーチイ年代記 (12)：注 9] 参照)。

愛をもっており，互いに多くの贈物を送り合っていた[73]。

**【トライデニスとウラジーミルとの間に小規模な掠奪が 1 年間続く：1273 ～ 74 年】**

〔他方〕かれ〔トライデニス〕はウラジーミル [I1121] とは大いなる親愛にはなかった。それは，ウラジーミル [I1121] の父親ヴァシリコ公 [I112] が，トライデニスの 3 人の兄弟を戦争で殺したからだった[74]。それゆえ，かれ〔ウラジーミル [I1121]〕とは大いなる親愛を持たず，かれに掠奪を仕掛けていたが，大規模な戦争をすることはなかった。〔すなわち〕トライデニスはこっそりと歩兵を送り込んでウラジーミル [I1121]〔の地〕を掠奪し，ウラジーミル [I1121] も同じように〔兵を〕送り込んで掠奪をしていた。このようにして，〔かれら二人は〕丸一年の間，掠奪の戦いを行っていた。

**【トライデニスはレフとの和睦を解消してドロギチンを占領する：1274 年 4 月 1 日】**

その後，トライデニスは，レフへの親愛[75] を忘れ，グロドノ人[76] (городняны) を派遣してドロギチン[77] (Дорогичинъ) を占領するよう命じた。かれら〔グロドノ人〕とともにトリド[78] (Трид) がおり，かれは城市〔ドロギチン〕についてどのようにすれば占領できるかを知っ

---

73）トライデニスがレフ [S2] と緊密な同盟関係にあったことについては，『ブィホヴェツ年代記』のエピソードからも推察できる。そこでは，トライデニスが息子のルィモント (Rymont) を，ルーシ語を学ぶためにレフ・ムスチスラヴィチ (Lew Mstysławicz)（ダニーロヴィチの誤り）のもとに派遣し，ルィモントはリヴォフで洗礼を受け，さらには修道士となって，ノヴォグルードク近郊に修道院を開設したとされている [Хроника Быховца 1966: С. 47]。

74）先に言及されたトライデニスの四人の兄弟（上注 58）のうちシルプティスはその後の記事で言及されていることから（下注 103），「トライデニスの 3 人の兄弟」は，かれを除いたボルザ，レーシイ，スヴェルケニイを指すと考えられる（上注 59 参照）。また「ヴァシリコが（…）戦争で殺した」とは，ヴァシリコとウラジーミルによるリトアニア遠征で大きな勝利を収めた 1262 年のネブリの戦いを指しているのではないか（[ イパーチイ年代記 (12)：注 379] 参照）。

75）トライデニスとレフ [S2] が結んでいた緊密な同盟関係については上注 73 を参照。

76）黒ルーシ地方北西の城市グロドノは，リトアニア公トライデニスの拠点地ノヴォグルードクから西へ 130km ほどと近く，その統治者（代官）はトライデニスの指揮下にあったのだろう。以下の記事から推察すれば（下注 99），この頃すでにグロドノにはバルト地方のプルス人も多く居住していた可能性がある。なお，グロドノからドロギチン (Drohiczyn)（次注）までは南南西方向へ 160km ほど離れている。

77）「ドロギチン」(Дорогичинъ) は，ヤトヴャグ人とヴォルィニ地方の公の間で長年その帰属が争われており，当時はダニール一族の統治下にあった。ただし，防衛のための強力な軍隊や有力な軍司令官（代官）は派遣されていなかったと思われる。かつてヤトヴャグの地の公だったトライデニスは，レフ [S2] にとってヤトヴャグの地支配の拠点となるこの城市の占領を狙ったのである。

78）「トリド」(Трид) については他の史料に言及がなく詳細は不明。文脈から見て，諸注・索引はトライデニスが派遣したリトアニア人軍司令官としている。ただし，城市ドロギチンの事情を知っていることから，この周辺の地を支配していたヤトヴャグ人侯の可能性もある。

ていた。〔派遣部隊は〕夜間に侵入して，まさに復活大祭の日[79]に〔城市を〕占領し上流･下層を問わず〔住民を〕打ち殺した。

**【レフはトライデニスへ対抗するための援軍をモンケ・テムル＝ハンに請う：1274 年】**

レフ [S2] はこれを聞いて，このことをひどく悲しみ，考えを巡らせはじめた。そして，タタール人のもと，大いなる皇帝モンケ・テムル[80] (Меньгутимерь) のもとに使者を遣り，**【*872*】**リトアニア人を攻めるための援軍をかれに請うた。モンケ・テムルは，かれ〔レフ〕に軍隊を与え，これをヤグールチン[81] (Ягурчин; Ягураин) という司令官に率いさせた。また，かれ〔レフ〕にドニエプル川の向こうの諸公[82] (заднѣпрескыи князи) を援軍として与えた。すなわちそれは，ブリャンスク公ロマン[83] (Роман Дьбрянский)[G415] とその息子のオレーグ[84] (Олег)[G4152], ス

79）ウクライナ語訳注はこのドロギチン襲撃を 1275 年のこととしているが，時系列から見て 1274 年の可能性が高い。フルシェフスキイも 1274 年としている（[Грушевський-Хронологія: С. 368]）。その場合，復活大祭は 4 月 1 日に相当する。コトリャールは 1275 年の秋に近い頃としているが，根拠が示されていない [Котляр 2005: С.333]。

80）「モンケ・テムル」(Меньгутимерь はチュルク語 Mengu-Timur の音写，モンゴル語 Möngke-Temür) は，ルーシの地を支配していたジョチ・ウルスの第 6 代の宗主（ハン）で（在位：1266 ～ 1280 年頃）本記事では「大いなる皇帝」(великий царь) と呼ばれており，本年代記でタタール人のハン（もしくは大ハーン）を「皇帝」(царь) と呼ぶのはここが初出である。モンケ・テムルは，バトゥ＝ハン（[ イパーチイ年代記 (11)：211 頁，注 190] 参照）の孫に当たり，タタール人の「大いなる騒乱」（上注 5）の当事者だったベルケ＝ハン（在位：1257 ～ 1266 年）を継いで，1266 年にハン位に就いた。その統治においてイルハン国との和平の基礎を築き，内政では交易の振興に努めて国を安定化させた。ルーシに対しては，1269 年にノヴゴロド人の要請に応えて，リヴォニア騎士団に対抗するための援軍を差し向けて有利な和議に持ち込み，1270 年にはノヴゴロド人とヴラジミル＝スーズダリ公ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ [K45] の和解を導き，同年リャザン公ロマン・オリゴヴィチ [H3211] を密告によって刑死させている。

81）「ヤグールチン」(*Ип*. Ягурчин; *Хлб*. Ягураин) という名の司令官 (воевода) については他の史料に言及がないが，モンケ・テムル配下でルーシの地を支配する中心的人物（代官）だったのではないか。かれは遠征の帰路にクルスクを掠奪していることから（[Селезнев 2009: С.224]），チェルニゴフ公領の東部地方からドン川中流域を拠点としていたと考えられる。

82）「ドニエプル川の向こうの諸公」(заднѣпрескыи князи) とは，ガーリチ＝ヴォルィニ地方から見て，ドニエプル川の向こう，すなわち左岸地方を広く示しており，スモレンスク公領やチェルニゴフ公領を支配していた諸公を指している。

83）「ブリャンスク公ロマン」(Роман Дьбрянский)[G415] は，チェルニゴフ公領北西の城市ブリャンスク (Брянск) の公で，サライで刑死したチェルニゴフ公ミハイル・フセヴォロドヴィチ [G41]（聖公）の息子にあたる。1263 年にはこのロマン公の娘がウラジーミル・ヴァシリコヴィチ [I1121] と結婚しており，ダニール＝ヴァシリコ一族とは婚姻を通じて緊密な関係にあった（[ イパーチイ年代記 (12)：注 412, 419] 参照）。

84）ブリャンスク公ロマン [G415] にはミハイル [G4151] という名の「最年長の息子」がいたことから（[ イパーチイ年代記 (12)：注 420]），オレーグ [G4152] はその弟にあたる息子ということになる。

モレンスク公のグレーブ[85](Глѣб, князь Смоленьский)[J1241], 他の多くの公たちだった[86]。当時はすべての諸公はタタール人の強制のもとにあったのである[87]。

**【ルーシ諸公とタタール人は合同でトライデニスの拠点城市ノヴォグルードクへの遠征を開始する：1274/75 年冬】**

冬が到来して，ルーシの諸公,〔すなわち〕レフ [S2], ムスチスラフ [S4], ウラジーミル [I1121] は軍備を整え始めた。彼らとともにピンスクとトゥーロフの諸公[88]も進軍した。かれらはトゥーロフ[89](Туров) を過ぎてスルーツク[90](Случк; Слуцк) へ向けて進軍し, そこのスルーツクでタタール人と合流した。このようにして，全員は速やかにノヴォグルードクへ向けて行軍を始めた。

スィルヴャチ川[91] (река Сырьвяч; Сирьяч) に達する手前で，〔かれらは〕野営の陣を張った。翌朝，早く起きると出発して，日の出前に〔スィルヴャチ〕川を渡り，そこ〔対岸〕で日の出を待った。太陽が昇ると部隊の装備を調え始めた。部隊の軍装を終えて，城市〔ノヴォグルードク〕へ向けて進軍した。タタール人は右翼で自分たちの部隊を進めていた。レフ [S2] はかれら〔タタール人〕から離れて自分の部隊を進めていた。ウラジーミル [I1121] は，レフ [S2]

---

85）「スモレンスク公のグレーブ」(Глѣб, князь Смоленьский) は，グレーブ･ロスチスラフヴィチ (Глеб Ростиславич)[J1241] のこと。伯叔父のフセヴォロド・ムスチスラヴィチ [J122] がスモレンスク公として没した (1239 年頃 ) のちに，公位を継承して 1278 年の没年まで城市を支配していた [Войтович 2006: C.524, 526]。

86）以下に見るように,「ドニエプル川の向こうの諸公」の他にトゥーロフとピンスクの諸公もこの遠征に参加していた（下注 88 参照）。

87）当時, これらスモレンスク公領やチェルニゴフ公領は, バトゥ＝ハン以来, サライを拠点とするジョチ・ウルスの宗主（ハン）による代官を通した直接的な支配が及んでいたことから，ハンは諸公に遠征を命ずることができた。

88）「ピンスクとトゥーロフの諸公」(князи Пиньсции и Туровьсцѣи) についてはここでは名が挙がっていないが，この時期にはこの地方の公はガーリチ＝ヴォルィニ公に従属していたことから，ハン，モンケ・テムルの命令にではなく，レフ [S2] やウラジーミル [I1121] による指示を受けて遠征に参加したものと考えられる。ピンスク諸公については，1262 年のヴァシリコ [I112] によるネブリの戦いの際にヴァシリコへの援軍としてフョードル，デミド，ユーリイの三人の公の名が挙がっている（[ イパーチイ年代記 (12)：注 381-383])。これらのピンスク諸公が今回の遠征に参加していた可能性は高い。

89）「トゥーロフ」(Туров) の城市はプリピャチ川右岸に位置する，トゥーロフ諸公の拠点城市。ヴォルィニの地にとっては，リトアニアと隣接する軍事的な前哨地だった。

90）「スルーツク」(*Ип*. Случк; *Хлб*. Слуцк) は，ヴォルィニ＝トゥーロフ・ピンスク公領とリトアニアとの境界にある城砦で，現在のミンスク州スルーツク市 (Слуцк) に相当する。トゥーロフからだと 108km ほど北上し，そこからノヴォグルードクまでは北西へさらに 134km ほど進まなければならない。

91）「スィルヴャチ川」(*Ип*. Сырьвяч; *Хлб*. Сирьяч) は, ネマン川左岸支流で現在のベラルーシのセルヴェチ (Сервечь; Сервач) 川のこと。この中流域から 30km ほど北上するとノヴォグルードクへ到達する。遠征隊は目的の城市まで約一日行程の距離まで迫ったことになる。

から離れて左翼で自分の部隊を進めた[92)]。

**【タタール人が敵情について誤った情報をもたらす：1274/75 年冬】**

タタール人はレフ [S2] とウラジーミル [I1121] に〔軍使を〕遣って，このように言った。「われらの郎党が目撃したところでは，丘の向こう側に〔敵の〕軍隊が布陣しているとのことだ。そろそろ**【*873*】**，下馬して進もうではないか。何があるかを観察するために，われらのタタール人とともに〔斥候のための〕熟練した家来を派遣せよ」。かれら〔レフとウラジーミル〕は熟練した家来を，かれら〔タタール人〕とともに派遣した。〔斥候隊が〕馬で行き眺めて見ると，〔敵の〕軍隊はそこにいなかった。丘から流れる〔水流の〕水源のところから蒸気が立っていた。寒気が酷かったからである[93)]。

**【諸公の遠征部隊のノヴォグルードク到着が遅れる：1274/75 年冬】**

こうして〔遠征部隊は〕城市〔ノヴォグルードク〕へ向けて進軍し，〔城市の〕そばで布陣した。ムスチスラフ [S4] はまだ到着していなかった。なぜなら，かれはコプィリ[94)] (Копыль) から進軍して，ポレシエ地方[95)] (Полѣсие) を掠奪しながら通っていたからである。ロマン [G415] もグレーブ [J1241]，すなわち，ドニエプル川向こうのこれらの諸公も〔到着しては〕いなかった。ただ，ロマンの息子のオレーグ [G4152] が一人だけ，到着していた。かれは，タタール人と一緒に先遣隊として進軍していたからである。タタール人はロマン [G415] の到着を強く待ち望んでいた。

---

92）この部隊編成によれば，レフ [S2] は中央の本隊を指揮していることになり，かれがこの遠征の中心的な指揮者だったことがわかる。

93）タタールの斥候隊が，強い寒気が相対的に温かい水面の上に流れ込んで発生する湯気のような蒸気霧（川霧）を敵の集団と誤認したこのエピソードが書き留められたのは，ウラジーミル公 [I1121] 配下の年代記記者の，タタール人に対する反感によるものではないか。

94）「コプィリ」(Копыль) は，現在のベラルーシ，ミンスク州のカプィリ市 (Капыль) に相当する。スルーツクからコプィリまでは北西方面へ 34km ほどで，スルーツクの付属城市（城砦）だった。そこからノヴォグルードクまではさらに 100km ほど進軍しなければ到達できない。スルーツクからノヴォグルードクへ向かう遠征路はリトアニア人の居住地であり，ムスチスラフ [S4] は途上で住民に対して掠奪を行っていたため遅くなったのである。

95）「ポレシエ地方」(Полѣсие) は文字通りでは，森林 (лес) に隣接した一帯と解するのが通説で，現在のウクライナとベラルーシの国境地帯のウクライナ側，プリピャチ川と西ブーク川の間の湿地と森林が混在した地域の歴史・地理的地名として現在も用いられている。ここでは，トゥーロフ周辺のプリピャチ川一帯を指しているのだろう。

**【レフは諸公を出し抜いてひとりタタール人とともにノヴォグルードク周辺城市を占領・掠奪する：1274/75 年冬】**

〔これは〕レフ [S2] が自分の二人の諸公〔ロマン [G415] とグレーブ [J1241]〕を欺いていたからである。〔レフは〕ムスチスラフ [S4] とウラジーミル [I1121] に隠れて密かに，タタール人とともに〔ノヴォグルードク〕周辺城市 (околний градъ) を占領したが，内城 (дѣтинѣць) は手つかずだった [96]。〔周辺〕城市占領の翌日, ロマン [G415] とグレーブ [J1241] が大軍を率いて〔ノヴォグルードクの城市へ〕やって来た。

**【諸公はレフの抜け駆けを非難して，兵を引き上げる：1274/75 年冬】**

レフ [S2] に対しては，すべての諸公が怒りを向けた。それ〔の諸公は〕すなわち，ムスチスラフ [S4], ウラジーミル [I1121], かれ〔ウラジーミル〕の岳父ブリャンスクのロマン [G415], スモレンスクのグレーブ [J1241] であり，他の多くの諸公もそうだった。

すべて〔の諸公〕がかれ〔レフ〕に怒りを向けた理由は，かれ〔レフ〕がかれら〔諸公〕を自分と同等に扱わずに，自分だけがタタール人と組んで城市を占領したからである。予め評議の上で，かれらは全員でノヴォグルードクを占領して，その後で**【*874*】**リトアニアの地へと進軍を始めることを取り決めていたにもかかわらず。〔結局〕レフ [S2] に対する怒りゆえに〔諸公はリトアニアの地へは〕進軍せず，それぞれの故郷へと戻って行った。

**【ウラジーミルは遠征からの帰途に岳父のブリャンスク公ロマンを故郷に招くが，代わりに義理の兄弟オレーグがヴラジミルを訪問する：1275 年前半】**

こうしてオレーグ [G4152] は自分の姉妹 [97] のいるヴラジミルへとやって来た。なぜなら，ウラジーミル [I1121] はその時，自分の岳父〔ロマン [G415]〕を招待して，こう言って強く懇請していたのである。「主人にして父なる御方よ，どうか〔ヴラジミルへ〕ご来訪下さい，ご自

96）現在のベラルーシ，フロドナ州の都市ナヴァフルダク (Навагрудак)（ノヴォグルードク）の発掘調査によれば，その中心城市は「周辺城市」(околний градъ) と「内城」(дѣтинѣць) からなり，「内城」は現在ナヴァフルダク城 (Новогрудский замок) として保存されている 110x80m の城趾に相当し，「周辺城市」はその西側の土塁に囲まれたおよそ 225x130m の一帯を指している [Куза 1996: C. 91] [Загрульский 2001: C. 80-81]。両者は細い丘でつながっているだけであることから，石造りの城壁がある内城にはリトアニア人が立て籠もって抵抗したということだろう。

97）この姉妹 (сестра) は，ウラジーミル [I1121] の妃であるブリャンスク公ロマン公の娘のこと。結婚は 1263 年に行われた。（上注 83 および [ イパーチイ年代記 (12)：注 412, 419] を参照）。

身の家[98]へご滞在下さい。ご自身の娘御が健勝であることを御覧下さい」。しかし，ロマン [G415] は〔この懇請を〕断ってこう言った。「わが息子〔婿〕ウラジーミル [I1121] よ。わしは自分の軍隊から離れて〔ヴラジミルへ〕行くことはできない。見よ，わしは戦地で軍を進めているのだ。わしの軍隊を故郷へ連れて帰ることができるのは，わしの他に誰がいようぞ。見よ，わしの代わりに，わしの息子オレーグ [G4152] をそなたと一緒に行かせよう」。こうして〔ロマンとウラジーミルは〕接吻を交わすと，〔それぞれの〕故郷へ向かって行った。

6783〔1275〕年

6784〔1276〕年

**【トライデニスは，リヴォニアの騎士団から逃れたプルス人をグロドノ，スロニムへ移住させる：1276 年後半】**

プルス人[99] (пруси) が，ドイツ人に直面して，否応なくトライデニスのもとにやって来た[100]。かれ〔トライデニス〕はかれら〔プルス人〕を自分のもとに受け入れて，かれらの一部をグロドノ (Гроден) へ，一部をスロニム[101] (Въслоним) へ住まわせた。

**【ウラジーミルとレフはスロニムへ遠征してプルス人を捕獲する：1276 年後半】**

〔これに対して〕ウラジーミル [I1121] は自分の兄弟であるレフ [S2] と評議して，自分の軍隊をスロニムへと派兵した。二人〔ウラジーミルとレフ〕はかれら〔プルス人〕を捕獲したが，

---

98）フレーブニコフ系写本には「ご自身の家」(во своемь дому) の「家」(дом) の語がないが，これは写本における明らかな脱落である。なお，ウラジーミル [I1121] の岳父の「自身の家」が城市ヴラジミルにあるということは，姻戚関係で結ばれた両者の親密さを示している。

99）「プルス人」(пруси; пруссы) は，「プルーセン人」「プロシア人」「プロイセン人」とも表記され，ヴィスワ川とネマン川の流域に居住するバルト語族古プロシア人の民族名。ヤトヴャグ人と近縁の民族である。かれらは，13 世紀の 30 年代にチュートン（リヴォニア）騎士団と戦いが始まり，1283 年に騎士団によって占領された。

100）この頃，リヴォニア騎士団は東方へと勢力拡張を始め，原住民であるバルト系のプルス人（[ イパーチイ年代記 (12)：注 32] 参照）を圧迫するようになった。1272 年にはラトヴィアのゼムガレ地方を制圧し，1274 年にはプルス人を制圧し，翌年には現在のダウガウピルスにディナブルグ城を建てて支配の拠点としている [Удавичюс 2005: С. 70]。これに抵抗したプルス人は否応なく (неволею)，東の隣人であるリトアニアの公に保護を求めたのである。

101）「スロニム」(*Ипа*. Въслоним; *Хлб*. Слонимъ) は，現在のベラルーシのスロニム市 (Слонім) に相当している。この城市は一時はレフ [S2] の弟ロマン [S3] の所領だったこともあり，リトアニア公とダニール＝ヴァシリコ一族諸公の間で帰属について係争の対象になっていた境界地帯の城市だった（[ イパーチイ年代記 (12)：注 72, 184] 参照）。

それはこの地へ〔プルス人を〕移住させないためだった[102]。

**【トライデニスとウラジーミルは互いの領地を掠奪するが，後に和睦する：1276/77 年冬】**

その後，トライデニスは自分の兄弟であるシルプティス[103] (Сирпутьи) を派遣して，カメニ[104](Камень) の周辺地を掠奪した。ウラジーミル [I1121] はこれに対抗して〔部隊を〕派遣して，ネマン川河岸の (на Немнѣ)〔城市〕トゥーリスク[105] (Турийск) をかれ〔トライデニス〕から奪い取り **【*875*】**，その〔城市〕周辺の村々を掠奪した。

その後，和睦して大いなる親愛を持ち始めた。

**【ウラジーミルによる城市カメネツ建設のエピソード：1276 年[106]】**

その後，神はウラジーミル公 [I1121] の心に善き思慮を与えた。〔ウラジーミルは〕ベレスチエ (Берестье) の向こうに城市を建設したいと考えるようになった[107]。そして，〔何冊かの〕預言者の書物を手に取って，心の中で思慮しながらこう言った。「強き万能の主なる神よ。自身の言葉ですべてを創造し，整える御方よ。主よ，罪深いあなたの僕（しもべ）にあなたが示される〔場所〕に，わたしは立つでしょう」。〔ウラジーミルは〕書物を開いたところ，〔次のよ

---

102）ウラジーミル [I1121] とレフ [S2] は，リトアニアによるプルス人植民によって，年来の係争地である（前注）スロニムがリトアニア領として固定することを恐れて，この遠征を行ったのである。

103）トライデニスの兄弟シルプティス (Сирпутьи) については上注 57 参照。

104）「カメニ」(*Ипа*. Каменец; *Хлб*. Камен) はヴォルィニ公領内の城砦で，ツィリ (Цырь) 川（プリピャチ川上流支流）河岸にある現在のカメニ＝カシルスキイ (Камінь-Каширський) に相当する。ヴラジミル＝ヴォルィンスキイからだと北北東へ 95km ほどと比較的近い距離に位置しており，ヴォルィニ公領の城市だった。

105）「トゥーリスク」(Турийск) は，ネマン川中流左岸の城砦で，現在のベラルーシ，グロドナ州のトゥーレイスク (Турейск; Турэйск) 村の遺構に相当する。『原初年代記』1097 年の項にグロドノ公領の拠点城市として言及があり，ミンスク＝グロドノおよびピンスク＝グロドノ水系を繋ぐ商工業の中心地だった。ノヴォグルードクからは西方向へ約 66km で達することができ，当時は，トライデニスの支配下にあった。11 世紀後半のプルス人の西進によって城砦が建てられたという説や，ヴォルィニ地方からの植民による建設という説がある [Котляр 2005: C.335]。

106）この新城砦カメネツ建設の比定年代は，イパーチイ写本の年紀に拠っており現在の通説になっている。しかし，フルシェフスキイは，次のリトアニア討伐遠征の記事に接続していることから建設を 1277 年としており，コトリャールもこれを支持している（[Грушевський-Хронологія: C. 368] [Котляр 2005: C.336]）。なお，『グスティンスカヤ年代記』6781(1273) 年の項に，この年に「ウラジーミル・ヴァシリコヴィチがレスナヤ川の上に城市カメネツを定礎した」という記事がある [ПСРЛ Т. 40, 2003 : C. 124]。

107）「ベレスチエの向こう」(за Берестьемь) とは，ウラジーミル [I1121] の拠点城市ヴラジミルから見て「向こう側」，つまり北側ということになる。本記事には新しい城砦 (городъ) 建設の理由は書かれていないが，リトアニアへの遠征の前哨基地，リトアニアやヤトヴァグ勢からの防衛のための軍事的拠点とするためだっただろう。この記事に続く，諸公のリトアニア遠征に使われた可能性が高い。

うな〕イザヤの預言が示現した。「主の霊がわたしの上に〔ある〕。主がわたしに油を注がれたからである。主はわたしをお遣わしになった。貧しい者たちによき知らせをもたらし，傷心の者たちを癒し，囚われの者たちに解放を，また盲いた者たちに開眼を告げた。主が受け入れられた年を報復の時と宣告するために，〔また〕嘆き悲しむ者たちすべてを慰めるために。シオンで嘆き悲しむ者たちには灰の代わりに栄光が，〔嘆き悲しみの代わりに〕歓喜の油が，無関心の霊の代わりに栄光の覆いが授けられる。そしてかれらは《正義の世代》《栄光のための主の植樹》と呼ばれる。かれらは長らく見捨てられていた廃墟を再建し，それ以前の荒れ果てた所を新たに興す。かれらは幾世代にもわたって荒れ果てていた廃墟の町々を新たなものにする」[108]。

ウラジーミル公 [I1121] はこの預言から，自分に関わる神の恵みを理解した。そして，城市を建設するに相応しい場所を探し始めた。その地はロマン [I11] 以後 80 年間見捨てられていた [109]。今になって神は【*876*】自らの恵みによってその〔地を〕興したのである。

こうして, ウラジーミル [I1121] はアレクサ [110](Алекса) という名の熟練した家臣を〔その地に〕派遣した。〔アレクサは〕かれ〔ウラジーミル〕の父の生前にすでに多くの城市を建てていた。ウラジーミル [I1121] は，城市を建立するに相応しい場所を探すために，かれ〔アレクサ〕に現地人〔ベレスチエの住民〕をつけて派遣し，ロスナ川 [111] (рѣка Лосна) を上流へと川船で遡らせた。そして見よ，そのような場所を探し当てた〔アレクサは〕公〔ウラジーミル〕のもとに戻って語り始めた。

公〔ウラジーミル〕は貴族たちや配下の者たちを伴って自ら〔その場所へ〕やって来た。かれ〔ウラジーミル〕はロスナ川 (Лысна) の岸の上にある場所が気に入った。そして，この〔場

---

108）旧約『イザヤ書』61:1-4 の忠実な引用。転写ミスによると思われる欠落部分は〔〕内で補った。日本語訳は [ 七十人訳イザヤ書:291-292 頁 ] に拠った。ここで, ウラジーミルの城市建設のための預言（託宣）として重要なのは,「廃墟の再興」というモチーフである。

109）この文言の解釈は，13 世紀初頭に始まったロマン・ムスチスラヴィチ公 [I11] とベレスチエ周辺の住民との関係の緊密化のことを言っているのだろう。これは，1209 年のベレスチエ人のヴァシリコ [I112] 招聘の記事などからもうかがうことができる（[ イパーチイ年代記 (10):245 頁, 注 73] 参照)。「80 年間見捨てられていた」は，この時から 80 年前ならば 1196 年になり，丁度 1196/97 年冬にロマン公 [I11] がヤトヴャグ人を攻める遠征を行っている（[ イパーチイ年代記 (12)：注 214] 参照)。ロマン公がこの遠征の拠点として，この地（カメネツ）に小さな城砦を建てた可能性はあるだろう。

110）「アレクサ」(Алекса) はアレクセイ (Алексей) の卑称形。「熟練した家臣」(муж хитр) とあることから，呼び名から見て高位（貴族）ではないが，城市・城砦建設に専門的な技術を持ったウラジーミル配下の従士 (дружинник) だろう。とくに「熟練」(хитр) が強調されているのは，当時は技術が必要な 30m もの高さの石造りの城塔（天守塔）（下注 113 参照）を建てたことが評価されていたのではないか。

111）「ロスナ川」(рѣка Лосна) は，西ブーグ川右岸支流で，ベラルーシ，ブレスト州を流れ，現在のリャスナヤ川 (Лясная; Лесная) に相当する。河口はベレスチエ（現在のブレスト）から 18km ほどしか離れておらず，ウラジーミル [I1121] による新しい城市建設地の探索はベレスチエを拠点として行われたことがわかる。

所を〕整地して，それからそこに城市を建てて，それにカメネツ [112] (Каменѣць) という名を付けた。石の多い地だったからである [113]。

6785〔1277〕年

**【ノガイが使者を遣って，ルーシ諸公にリトアニアへの遠征を促す：1277 年後半】**

呪われた無法のノガイ [114] (Ногай) が，レフ [S2] とムスチスラフ [S4] およびウラジーミル [I1121] に対して，テギチャグ (Тегичаг)，クートゥルーブガ (Кутлубуга)，エシムート (Ешимут) という使者 [115] に文書を持たせて派遣した。そして，〔ノガイは〕次のように言った。「そなたたちはいつも，リトアニア人について不満を言い立てている。さあ，わしはそなたたちに軍隊を与え，軍司令官マムシェイ [116] (Мамъшѣи) にこれを率いさせよう。かれとともに，そなたたちの敵を討ちに行くがよい」。

---

112）「カメネツ」(Каменѣць) は，現在のベラルーシ，ブレスト州の都市カメネツ (Каменец) に相当し，他のカメネツの名の都市と区別するために 1940 年まではカメネツ＝リトフスキイ (Каменец-Литовский) と呼ばれていた。ベレスチエからは北方向へ 40km ほど離れている。なお，この名称は「石・岩」を意味する普通名詞 камы, камень の語から派生したものである。

113）この城市カメネツ建築については，ウラジーミル公 [I1121] の業績として，6796(1288) 年の記事でも繰り返し述べられており，そこでは現在も保存されている石造りの天守塔 (вежа) についての記述もある（Стб. 925 参照）。

114）「ノガイ」(Ногай; Noqay, Noγai, 1299 年没 ) は，ジョチの曾孫にあたる（ジョチの子ボアルの長男タタルの子）王族の出身者で，地位としては万人長 (темник)（[ イパーチイ年代記 (11)：216 頁，注 204] 参照）だったが，軍を統括する「総司令官」（ベクリャルベク беклярбек）としてジョチ・ウルスの軍事・外交の実質的な権力を握っていた。60 年代前半にはジョチ・ウルスのベルケ＝ハン（在位：1257 ～ 1267 年）のもとでイルハン国（フレグ＝ハン，アバカ＝ハン）と戦って武功をたて，1265 ～ 67 年にはビザンツ帝国侵攻の軍の指揮をとっている。その後のモンケ・テムル＝ハンの時代には，ジョチ・ウルス西端ドナウ川下流域の遊牧地を支配地として与えられ，この地に接するリトアニア，ポーランド，ハンガリー，ビザンツへの遠征を行って，ジョチ･ウルスの中で大きな権威を確立した。そのため，ノガイの命令はルーシ諸公にとっては拒否できない絶対的なものだった [Селезнев 2009: C. 139-145] [Котляр 2005: C.336]。

115）「テギチャグ」(Тегичаг),「クートゥルーブガ」(Кутлубуга),「エシムート」(Ешимут) の，ノガイが派遣した三人のタタール人の使者についての詳細は不明だが，「クートゥルーブガ」については，アラブ史料によれば，1298 年の夏のノガイとトクタ＝ハンとの最初の戦闘に参加している [Селезнев 2009: C. 114]。ここでは，レフ [S2]，ムスチスラフ [S4]，ウラジーミル [I1121] に対してそれぞれ一人ずつが使者として派遣されたということだろうか。

116）「軍司令官マムシェイ」(воевода<...>Мамъшѣи) についても，ノガイ配下の遠征隊の総指揮官だった他は詳細不明。モンケ・テムル＝ハン配下のリトアニア遠征隊の司令官ヤグールチン（上注 81）と同様の高位の将軍だったのだろう。

**【ルーシ諸公はリトアニアへのタタール人との合同掠奪遠征に出発する：1277/78 年冬[117]】**

冬が到来して，ルーシの諸公はリトアニア人を攻めるために出発した。それは，ムスチスラフ [S4] とウラジーミル [I1121] で，レフ [S2] は出発しなかったが，自分の息子ユーリイ [S21] を〔遠征に〕派遣した。こうして，全員がノヴォグルードク[118] (Новъгородък) へ向けて進軍した。

**【タタール人によるノヴォグルードク掠奪の報を受けたルーシ諸公は，遠征先をグロドノに変更する】**

かれらがベレスチエ (Берестье) に到達したとき，かれらのもとに報告がもたらされた。タタール人がすでに先んじてノヴォグルードクへ向かっているというのである。諸公は評議を始めた。**【*877*】**ムスチスラフ [S4]，ウラジーミル [I1121]，ユーリイ [S21] はこう言った。「もしノヴォグルードクへ向けて進軍しても，そこではタタール人がすべてを掠奪し尽くしているだろう。〔掠奪されていない〕手つかずの場所へ行こうではないか」。こうして，評議の上でグロドノ (Городен) へ向けて進軍を始めた。

**【ムスチスラフとユーリイが，ウラジーミルを出し抜いて先遣した掠奪部隊が，慢心のためグロドノ城下で壊滅する】**

かれらはヴォルコヴィエスク[119] (Волковыескъ) を迂回して，〔この城市から〕さらに遠く離れたところで野営をした。そのとき，ムスチスラフ [S4] とユーリイ [S21] は，ウラジーミル [I1121] に隠れてこっそりと，自分たちの最良の貴族たちと配下の者たちを，チュイ

117）この年代はフルシェフスキイの推定 [Грушевський-Хронологія: С. 369] に拠っている。

118）ノヴォグルードクは，当時のトライデニスのリトアニア支配の拠点地であり，1274/75 年冬のルーシ諸公とタタール人の合同遠征もこの城市攻略が第一の目的だった（上注 88 ～ 90 参照）。

119）「ヴォルコヴィエスク」(Волковыескъ) は，現在のベラルーシ，グロドノ州の州都ヴァウカヴィスク (Ваўкавыск) に相当する。ベレスチエ（ブレスト）からだと北北東へ 129km の地点にあり，ヴォルコヴィエスクからグロドノまでは北西へさらに 72km ほど進まなければならない。この城市は，かつては，リトアニア公ヴァイシュヴィルカスが支配しており，当時はトライデニスの支配地だったのだろう。「かれらは（…）迂回して」(минувшимъ имъ) とは，ルーシ諸公遠征隊は，当初，ノヴォグルードクへ向かう遠征路の途上にあったこの城砦の占領･掠奪を計画していたが，タタール人によるノヴォグルードク掠奪の報を受けて，ヴォルコヴィエスクまで行かず，進路を変更してグロドノへと向かったということ。

マ [120] (Тюима) とともに〔グロドノ方面へ〕派遣して掠奪をさせた [121]。かれらはそこ〔グロドノの城下〕で掠奪を行うと，〔掠奪した村で〕野営して横になって〔休んで〕いた。かれらは自分の軍隊のところには戻らず，歩哨も立てず，自分の鎧も脱いでいた。そのとき，かれらのところから一人の逃亡者が逃げ出して〔グロドノの〕城市にたどり着いた。そして，城市の住民に対してこう語った。「あそこでは，〔敵の〕人間たちが村の中で秩序なく寝入っています」。プルス人 (пруси) とバルタ人 (бортове) は [122] 城市から出撃すると，夜間にかれら〔敵に〕打撃を加え，かれらをみな打ち殺し，他の者は捕獲して [123]，城市へと連行した。チュイマは橇で曳かれて行った。ひどく負傷していたのである。

**【ルーシ諸公は先遣掠奪部隊の敗北について知る】**

翌朝，〔遠征軍の〕部隊が〔グロドノの〕城市に近づいたとき，ムスチスラフ [S4] の配下のラチスラフコ [124] (Ратиславко) が裸で裸足の姿で駆けよって来て，そこで起こったことについて語り始めた。ムスチスラフ [S4] とレフ [S2] の貴族たちがことごとく打ち殺され，配下の者たちもことごとく打ち殺され，他の者は捕虜になったというのである。ムスチスラフ [S4] とレフ [S2] の二人は，これについて，おのれの愚かさ〔を恥じて〕，大いに悲しんだ。他方，ウラジーミル [I1121] は，**【*878*】**二人が自分に隠れてこのようなことをしたことで，二人を好ましく思わなかった。

---

120）「チュイマ」(Тюима; Туйма) は，6789(1281) 年と 6790(1282) 年の記事（下注 174 および 180 参照）にも言及されているホルムの軍司令官。レフ [S2] とその息子ユーリイ [S21] に仕えていた。ここでは，ムスチスラフ [S4] とユーリイ [S21] の命令により抜け駆けの部隊を実質的に指揮していた。

121）ルーシ諸公とタタール人の対リトアニア遠征において，ダニール一族の公がウラジーミル [I1121] に対して，タタール人と組んで抜け駆けの掠奪を行ったのは，1274/75 年冬のノヴォグルードク遠征（上注 96 参照）以来これが二度目である。このような〈欺き〉の叙述には，ウラジーミル公配下の年代記記者自身のダニール一族諸公に対する反感が反映しているだろう。

122）「バルタ人」(борты; барты) は，「湿地」を意味する *bor- から形成されたと考えられ，ドゥスブルグのペトルス (Petrus de Dusburg) の『プロイセン年代記』(Chronicon terrae Prussiae)（1326 年頃成立）に Bartha（バルタ）として表記されるプルス人の代表的な部族である。ここでもその意味で使われている（[ イパーチイ年代記 (12)：注 32,33] 参照）。ラヴァ川＝ウィナ川（Лава-Łyna) の中下流域，シフィナ川 (Świna) 流域，マムルィ湖 (Mamry) 周辺に広範な居住区域を持っていた。この地はバルティア (Bartia) と呼ばれる。[Петр из Дусбурга 1997: С. 274]。

なおこの個所の「プルス人」(прусы) と「バルタ人」(борты) は，ドイツ騎士団の圧迫から逃れて難民となり，トライデニスによってグロドノ城市に植民されたバルト語族を指しているだろう（上注 100）。

123）戦争のあとの和議交渉における捕虜交換や身代金獲得のために，敵軍の司令官（貴族）など高位の者は殺さずに捕虜として確保しておくということ。

124）「ラチスラフコ」(Ратиславко) は，チュイマ（上注 120）と同様に，ムスチスラフ [S4] の家臣で，プルス人に襲撃されて捕虜になっていたが，グロドノ城から逃亡してきたのだろう。

**【ルーシ諸公の遠征軍はグロドノの城塔を占拠するが，交渉によって捕虜となった貴族たちを取り戻しただけで戦果なく帰郷する】**

そして，〔ルーシ諸公は〕城市〔グロドノ〕を占領することについて計略を巡らせはじめた。高い石造りの塔があり，〔グロドノの〕城門の前に立っており[125]，その〔城塔の〕中にプルス人が立て籠もっていた。そして，かれら〔諸公〕はその傍らを通って城市に近づくことができなかった。その塔の上から〔矢や石弾で〕撃たれてしまうのである。

そこで,〔諸公は〕これ〔塔〕に突撃して, これを占領した。大きな恐れと恐怖が城内〔の住民〕を襲った。塔が占拠されたことで，かれら〔住民〕は城市の胸壁の上に死人のように立ち尽くしていた。なぜなら，〔城塔が〕かれらの頼りだったからである。

〔諸公は〕自分たちの〔捕虜になっていた〕貴族たちを，どのようにして奪還するかについて評議を始めた。しかし，何もうまくはいかなかった。〔そこで〕ムスチスラフ [S4]，ウラジーミル [I1121]，ユーリイ [S21] は、住民と話し合って，かれらが城市を占領せず，自分たちの貴族を解放させるという取り決めを結んだ。〔諸公は〕自分たちの貴族を取り戻したが，城市から何も〔獲得することは〕できなかった。こうして，〔諸公の遠征軍〕は帰郷した。

6786〔1278〕年

**【リトアニア公トライデニスは兄弟シルプティスを派遣してルブリン郊外を掠奪する：1278 年】**

トライデニスは依然としてリトアニアの地を公支配していた。〔かれは〕大軍をポーランド人に敵対して派遣した。〔すなわち〕自分の兄弟のシルプティス (Сирпутьи) を派遣した。その時，ヤトヴャグ人が〔かれと一緒に〕いたからである[126]。〔派遣軍は〕ルブリン周辺を 3 日間掠奪した。そして，数え切れないほど多数の捕虜を獲った。こうして，大いなる名誉をもって

125）このグロドノの城塔 (столпъ...каменъ высокъ) は，現在の旧城 (Старый замок) の城門の北側にあった城門を防衛するための塔で，1580 年にステファン・バトーリイ宮殿を城内に建設するために壊されるまで立っていた。1568 年制作のグロドノ全景の銅版画にはこの城塔が描かれている [Антипов 2000: C. 153]。クラクフ旧市街に現存するフロリアンスカ門の塔とバルバカンと類似の構造だったと考えられる [Котляр 2005: C.337]。

126）原文は「ヤトヴャグ人がいたから」(бяху бо ятвязи) になっているが，これだけだと分かりにくい。おそらく，当時シルプティスはヤトヴャグの地の公支配を行って，ヤトヴャグ人を配下に置いており，その地はポーランド（マゾフシェおよびサンドミェシュ地方）に隣接していることから，トライデニスはシルプティスに掠奪遠征を命じたのだろう。

帰郷した[127]。**【*879*】**

6787〔1279〕年

**【飢饉が起こり，ヤトヴャグ人がウラジーミル公に食料を求める：1279 年春[128]】**

すべての地で飢饉が起こった。すなわち，ルーシ，ポーランド，リトアニア，ヤトヴャグ〔の地〕である。その後, ヤトヴャグ人はウラジーミル [I1121] のところに使者を遣ってこう言った。「主人よ，ウラジーミル公 [I1121] よ。われらは全てのヤトヴャグ人〔のもと〕から，あなたのところに来ました。神に望みをかけ，あなたの健勝を願っています。われらを死するがままにせず，われらに食料を与えて下さい。主人よ，御自身の穀物をわれらのもとに売りに来させて下さい。われらは喜んで買います。あなたが望むものを喜んで差し出します。蜜蝋であれ，オコジョであれ，ビーバーであれ，黒いテン〔の毛皮で〕であれ，銀であれ[129]」。

**【ウラジーミル公が送った穀物船が掠奪され，使者が殺される。マゾフシェ公コンラートに嫌疑がかかる：1279 年夏～秋】**

ウラジーミル [I1121] はかれら〔ヤトヴャグ人〕に対して穀物を送った。船に積んで，信頼できる善き者たち[130]を付けてブーグ川 (Буг) を〔運ばせた〕[131]。かれらはブーグ川を航行して，それからナレウ川[132] (Наровь) に入り，ナレウ川を進み始めた。かれらはそのまま航行して，

---

127）このリトアニア人のポーランド遠征については，『ポーランド聖十字年代記』(Annales Sanctae Crucis Polanici) の 1278 年の項に，「レシェク〔二世〕がリトアニア人と戦って，ロヴネでかれらを打ち破り，また，ルコヴィエンス地方で自ら偵察を行った」(dux Lestko congrediens cum Lithwanis devicit eos in Rowne, seu in districtu Lucoviensi ipsos investigando) とあり，この「ロヴネ」がルブリンから 145km ほど北のロウネ村 (Równe)，ルコヴィエンス地方がルブリンから北 200km ほどのウコヴェ村 (Łukowe) 周辺とすれば時間・場所とも本記事と対応する（[Грушевський-Хронологія: C.369] [MGH. SS. 1866. T. 19: p. 682]）。ただし，本記事ではリトアニア側の遠征が大成功であったとあり，遠征結果の記述内容は対称的である。

128）この年代はフルシェフスキイに拠った [Грушевський-Хронологія: C. 369]。

129）6765(1257) 年の記事には，ダニール公 [I1111] がヤトヴャグ人から徴集していた貢税の品目として，「黒いテン，オコジョ，銀」（[ イパーチイ年代記 (12)：注 212] 参照）が列挙されており，ここに示されている品目とほぼ共通している。

130）「信頼できる善き者たち」の原文は люди добрые, кому вѣря で，ウラジーミル [I1121] が取り引きを任せていた商人たち [Пашуто 2011: C. 287]，あるいは配下の高位の家来たちを指している。

131）この船の積み出し地について，コトリャールはヴラジミルからだとしている [Котляр 2005: C. 338]。

132）「ナレウ川」(Наровь) はヴィスワ川右岸支流の現在のナレウ川 (Narew) のこと。西ブーグ川はナレウ川に注ぐ支流にあたる。

ポルトヴェスク[133] (Полтовеск) の城下に着くと，そこで休憩のために一晩停泊した。そして，その夜に城下で全員が撃ち殺され，穀物が奪われ，船が沈められた。

ウラジーミル [I1121] は，これについて捜査を行った。誰がこれを為したか，強く知りたいと望んだのである。そして, 自分の兄弟のコンラート[134] (Кондрат)〔二世〕のもとに使者を遣って, かれにこう言った。「そなたの城市の城下でわしの家来たちが撃ち殺された。それは【*880*】そなたの命令によるものか，あるいは他の者の〔命令による〕ものか。そなたは，そなたの地のことは知っているはずだ。知っていることを〔教えよ〕」。コンラートは否定して〔言った〕。「わしは撃ち殺してはいない。他の誰が撃ち殺したかは知らない」[135]。

すると, かれ〔ウラジーミル [I1121]〕の母方の伯叔父であるボレスワフ公[136]〔五世･純潔公〕が，自らの甥[137] であるコンラート〔二世〕〔を咎めて〕，ウラジーミル [I1121] に対してこう告

---

133）「ポルトヴェスク」(Полтовеск) は，ナレウ川の河岸に位置し，現在のポーランド，マゾフシェ県プウトゥスク (Pułtusk) 市に相当する。西ブーグ川の河口からだと約 22km 北上してナレウ川を遡ったところにある。11 世紀からマゾフシェ公領ブウォーツク司教座に属して，通商の拠点として発展し，1257 年にはヘウムノ（クルム）法に準拠した都市権を獲得していた。ここは，ヤトヴャグ人居住地と隣接するマゾフシェ地方の前哨地であり，ウラジーミル [I1121] が派遣した穀物船が停泊して，ヤトヴャグの地における穀物との交換取引の準備をする予定だったのだろう。

134）「コンラート」(Кондрат) は，シェモヴィト一世の長男のマゾフシェ公コンラート二世 (Konrad II)（チェルスク公 (Czersk) (1264 ～ 1294 年 )，プウォツク公 (1264 ～ 1275 年 )）を指しており，1262 年の父シェモヴィトの死後（[ イパーチイ年代記 (12)：注 367])，1264 年には捕虜となっていたリトアニアから帰還して，プウトゥスクを含むマゾフシェ地方一帯を支配していた。かれの政策では，母方の伯叔父にあたるレフ [S2] よりも，ウラジーミルとの友好関係をより重視していた [Котляр 2005: C.338]。

なお，ウクライナ語訳注にもあるように，コンラート二世がウラジーミル [I1121] の「兄弟」(брат) であるとは，ウラジーミルの母親エレーナ（上注 2 参照）がマゾフシェ公コンラート一世の娘（つまりシェモヴィト一世の姉妹）であることから，コンラート二世とウラジーミルは従兄弟の関係にあることを指している。さらに, ウラジーミル [I1121] の従姉妹（ダニール [I111] の娘）にあたるペレヤスラーヴァがシェモヴィト公の妻で，コンラート二世の母親にあたることから，ウラジーミルにとってコンラートは母方の従甥という関係でもあった。

135）前注のように 1270 年代には，コンラート二世とウラジーミルは良好な関係にあったことから，コトリャールは，この襲撃は，ここでコンラートが言っているように，かれの指示によるものではなかったと推定している [Котляр 2005: C.338]。全般的な情況からみて，襲撃者は飢饉によって発生した夜盗的な集団だったか。

136）ボレスワフ五世純潔公（Bolesław V Wstydliwy）（クラクフ公（ポーランド大公）：1243 ～ 1279 年，サンドミエシュ公 1232 ～ 1279 年）のこと。当時かれはポーランド大公として最高の権威を持っており，ウラジーミル [I1121] とは，長年友好関係を築いていた（上注 64 参照）。

なお，ウラジーミルにとっては，ボレスワフ公は厳密には「母方の伯叔父」(уй) ではないが（上注 134 のようにシェモヴィト一世が母方の伯叔父である），ボレスワフ五世はシェモヴィト一世の〈兄弟〉（次注）であることから，ここでは уй の概念が拡張されて使われているのだろう。

137）「甥」の原語は сыновьч は広い意味での〈兄弟〉(брат) の息子を指す親族名称。ボレスワフ五世にとってシェモヴィト一世は父方の従兄弟 (брат) にあたることから，その息子コンラート二世はボレスワフのいわゆる従甥にあたっている。

げた。「〔コンラートが〕否定しているのは理不尽である。〔コンラート〕自身がそなたの家来たちを撃ち殺したのだ」。その時, ボレスワフ〔五世〕は自分の甥コンラートと不和の間柄だった[138]。ボレスワフ〔五世〕はウラジーミル [I1121] に〔さらに〕こう言った。「かれ〔コンラート二世〕に報復をせよ。かれは大きな辱めをそなたに加えたのだから，自らが〔受けた〕辱めを雪ぐがよい」。

**【ウラジーミルはマゾフシェ領に報復の遠征隊を派遣するが，まもなくコンラート二世と和睦する：1279 年後半】**

ウラジーミル [I1121] はコンラート〔二世〕に敵対して自分の軍隊を派遣し，ヴィスワ川のこちら側[139]を掠奪し，多くの捕虜を獲った。その後，コンラート〔二世〕は自分の兄弟であるウラジーミル [I1121] に使者を派遣して，和を結ぶことを望んだ[140]。ウラジーミル [I1121] は和睦をした。〔こうして〕二人〔ウラジーミルとコンラート〕は大いなる親愛を結び始めた[141]。ウラジーミル [I1121] は,〔自分〕の軍隊が捕獲した奴隷[142]をかれ〔コンラート〕に返還した。

**【ボレスワフ五世（純潔公）が死没する：1279 年 12 月 7 日】**

この年，クラクフの大いなる公ボレスワフ〔五世〕が逝去した[143]。善良，温和，謙抑，悪意

---

138）1265 年に, ボレスワフ五世がポーランド大公位の継承者に, やはり従甥であるレシェク二世黒公（ポーランド大公在位 1279 - 1288 年）を定めたことから，大公位継承を期待していたマゾフシェ公コンラート二世とは不和になっていた。

139）「ヴィスワ川のこちら側」(по сей сторонѣ Вислы) とは，マゾフシェの地のヴィスワ川右岸地域のことで，具体的には，マゾフシェ公領のヴォルィニ公領に隣接する，ブーグ川とヴィスワ川に挟まれた一帯を指しているだろう。

140）ここではイパーチイ写本，フレーブニコフ写本ともに「和を望まなかった」(мира не хотя) となっているが叙述が整合しないため，не を削除した読み（エルモラエフ写本の読み）を採用した。

141）ここでは，コンラート二世の側から和議を提案したように書かれているが，ウラジーミルが和睦を承知したのは，これに続く記事にあるポーランド大公ボレスワフ五世の死が大きな要因だっただろう。ウラジーミルはポーランドの有力な同盟者を失い，大公位とサンドミェシュ公位を継承したレシェク二世黒公との関係が不透明であったため，マゾフシェ公であるコンラート二世とは関係を安定させる必要があった。また, コンラートの側からも, これまで不和であった（上注 138）ボレスワフが没したことで，和議を邪魔する存在がいなくなったことは好機であったろう。

142）この「奴隷」(челядь) は，マゾフシェ地方遠征でウラジーミル軍が捕獲した住民の捕虜 (полон) のことを指している。当時の掠奪遠征では，住民を「捕虜」として捕獲して連れ帰り,「奴隷」として使役するのが通常だった。

143）ポーランド史料によればボレスワフ五世は 1279 年 12 月 7 日にクラクフで没しており，三日後の 12 月 10 日に葬儀が行われた [Грушевський-Хронологія: С. 369]。ここの「大いなる公」(великий князь) の称号も，これまでと同様に死亡記事における称揚的表現だろう（[ イパーチイ年代記 (12)；注 345, 393] 参照）。

のない人物だった。長い年月を生きて，老年になって[144] 善く主のもとに身まかった。かれの遺骸は布に巻かれて，クラクフの聖フランシスコ教会[145] に安置された。**【*881*】**

6788〔1280〕年

**【ポーランド大公位を巡る諸公の抗争。レシェク二世が大公となる。レフのポーランドへの野望：1279 年 12 月】**

大いなる公ボレスワフ〔五世･純潔公〕の死後, 誰もポーランドの地を公として支配しなかった[146]。なぜならば，かれには息子がいなかったからである。

レフ [S2] は自分ために〔ポーランドの〕地を〔支配することを〕望んだ。しかし，〔ポーランドの〕貴族たちは強く，かれ〔レフ〕に〔ポーランドの〕地を与えなかった[147]。

ボレスワフ〔五世〕には甥が五人いた。それは，〔マゾフシェ公〕シェモヴィト[148]〔一世〕の二人の息子, すなわちコンラート[149] (Кондратъ)〔二世〕とボレスワフ[150] (Болеславъ)〔二世〕,

144）ボレスワフ五世の生年は 1226 年であり，死去したとき 53 歳だった [IPSB: Bolesław Wstydliwy]。当時の感覚では「老年」(во старости) ということなのだろう。

145）聖フランシスコ教会 (церквь святаго Франьцишка) はフランシスコ会（アッシジの聖フランチェスコを創始者とする修道会）のカトリック教会堂。クラクフの旧市街にあり，創建は 13 世紀 30 年代と考えられるが，モンゴル侵入の 1241 年以降，ボレスワフ五世とかれの妃クニクンデ（キンガ）の手で再建がなされたとされている。

146）「ポーランドの地の公支配」(княжити в Лядьской земли) とは，あとで見るように，クラクフに公座があるポーランド諸公の「長子領」(Dzielnica senioralna) を公（もしくは大公）として支配することを意味する。このクラクフ公位はポーランド諸公領の中で，最高位に位置づけられていた。サンドミェシュ公でもあったボレスワフ五世は，1243 ～ 1279 年の期間クラクフ公位に就いていた。

147）レフ [S2] がボレスワフ五世の死後その後継者としてクラクフの公座（ポーランド大公）を要求したのは，かれ自身が妃コンスタンツァ（ハンガリー王ベーラ四世の娘（[ イパーチイ年代記 (11)：注 485] 参照））の夫としての資格でクラクフ大公位の権利を持っていたことによっている [Войтович 2012: C. 142]。

148）「マゾフシェ公シェモヴィト一世」( 没年 1262 年 ) については，[ イパーチイ年代記 (12)：注 3] を参照。

149）シェモヴィト一世の息子で，父の死後マゾフシェの公となった「コンラート二世」については上注 134 を参照。

150）マゾフシェ公「ボレスワフ」(Болеславъ) 二世 (Bolesław II mazowiecki)（マゾフシェ公在位 1262 ～ 1275 年）についてはこの個所が初出。

および，カジミェシュ〔一世〕の三人の息子たち[151]，すなわち，レシェク[152] (Лестько)〔二世・黒公〕，ジェモミスウ[153] (Земомыслъ)，ヴワディスワフ[154] (Володиславъ)〔一世，のちの短身王〕だった。ポーランドの貴族たちは，かれらの中の一人レシェク〔二世〕を自分たちで選び，クラクフのボレスワフ〔五世〕の公座に据えた。こうして，レシェク (Льстко)〔二世〕が公支配を始めた。

**【レフはレシェク二世の支配地を侵略するために，タタール人の援軍を得る：1280 年前半】**

その後，レフ [S2] がポーランドの地 (земля Лядьская) の一部の辺境地域 (на въкраини) の諸城市を，自分のために望んだ[155]。〔レフは〕呪われた忌まわしいノガイ[156](Ногай) のもとへ行って，ポーランド人を討つための援軍を要請した[157]。かれ〔ノガイ〕は，かれ〔レフ〕に援軍として，呪われたコンチャク (Кончак) とコゼイ (Козѣи) とクーバタン (Кубатан)〔とその軍勢を〕与えた[158]。

---

151）「カジミェシュの三人の息子たち」(Казимиричи трие) の「カジミェシュ」(Казимир) は，クヤヴィ公カジミェシュ一世 (Kazimierz I kujawski) のこと。マゾフシェ公コンラート一世の息子で，クヤヴィ公在位は 1233 ～ 1267 年。マゾフシェ公シェモヴィト一世（上注 148）の兄にあたる。

なお，カジミェシュ一世には，この三人の他に，カジミェシュ〔二世〕とシェモヴィトという息子がいたが，年少でクラクフ公位を争う年齢に達していなかったため，ここでは言及されなかったのだろう [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 232, przyp. 1533]

152）「レシェク二世黒公」（Leszek Czarny）（1241 年～ 1288 年）は，サンドミェシュ公及びポーランド大公（在位 1279 年～ 1288 年）。かれについてはこの個所が初出。

153）「ジェモミスウ」(Земомыслъ, Ziemomysł) はヴロツワフ公（在位 1267 年 -1271 年，1278 年 -1287 年）で，当時は実質的なクヤヴィ公だった。1287 年に没している。

154）「ヴワディスワフ」(Володиславъ) は，通常「ヴワディスワフ一世短身王」(Władysław I Łokietek) (1260/61 年 -1333 年 ) と称され，兄のレシェク二世黒公が 1288 年に没したのち，1305 年にはクラクフ公となり，その後ポーランド王（在位 1320 年 -1333 年）としてポーランドの支配権を確立した。当時は，末弟であったため兄たちのもとでクヤヴィの公支配を行っていた。

155）この「ポーランドの地の一部で辺境地域の諸城市」(части в землѣ Лядьской, города на въкраини) とは，ヴェプシ川とヴィスワ川に囲まれた，マウォポルスカ（サンドミェシュ）地方のルブリン周辺からサンドミェシュにかけての領地を指している。クラクフ公位奪取を阻止されたレフは，代わりにこの地方の城砦を占領し領有する意図を持っていたのだろう。[Котляр 2005: C.339] 参照。

156）タタール人のベクリャルベク（総司令官）「ノガイ」については上注 114 を参照。

157）この記述から，レフ [S2] は自らノガイのもとに出向いて援軍要請を行ったと理解できる。当時ガーリチの支配公だったレフは，ドニエストル川を下って，ドナウ川下流地帯に拠点を置いていたノガイのもとに参内したのだろう。

158）ここに挙げられている「コンチャク」(Кончак)，「コゼイ」(Козѣи)，「クーバタン」(Кубатан) の三人はノガイ配下の軍司令官の名前。特に，「コンチャク」「コゼイ（コザ，グザ (Коза, Гуза)）」は『キエフ年代記』においても言及されているポロヴェツ人首長の典型的な名前であり（おそらくは，部族の中で継承されていた族長名跡）（[ イパーチイ年代記 (8)：注 171] 参照），当時，ノガイは軍事活動のためにポロヴェツ人の諸部族を配下に置いていたことがわかる。

**【遠征軍は氷結したヴィスワ川を渡河して，サンドミェシュを包囲するが戦わず:1280 年 2 月】**

冬になり，〔レフの軍勢は〕このようにして〔遠征に〕出陣した。すなわち，レフは喜んでタタール人とともに, 自分の息子ユーリイ [S21] とともに〔出陣した〕。他方, ムスチスラフ [S4] とウラジーミル [I1121]，ムスチスラフ [S4] の息子のダニール[159] [S41] は，タタール人に強いられて渋々と軍を進めた。

こうして，全員はサンドミェシュ (Судомирь) へ向けて出陣した。〔遠征部隊は〕サンドミェシュに近づくと, ヴィスワ川の対岸へ向かって出発した。そして, 氷上を進んで〔ヴィスワ川を〕渡河し，〔サンドミェシュの〕城下に着いた。最初に，レフ [S2] が，自分の部隊と自分の息子ユーリイ [S21] とともに〔氷上を〕渡河した。かれ〔レフ〕の後から，ムスチスラフ [S4] とかれの息子ダニール [S41]〔が渡河した〕。かれらの後から同様に**【*882*】**タタール人〔が渡河した〕。こうして渡り終わると，〔サンドミェシュの〕城市を取り囲んで布陣した。〔しかし〕僅かな間布陣しただけで，戦闘は行なわなかった。

**【レフの主導で，遠征軍はクロピヴニツァ経由でクラクフ方面へと転進する：1280 年 3 月】**

その後, レフ [S2] は自分の部隊とともに大いなる戦力をもってクロピヴニツァ[160] (Кропивница) へ向けて進軍を始めた。〔レフは〕大いなる驕りによって[161]，クラクフ (Краков) へ進軍しようと欲したのである。

**【遠征軍後衛のウラジーミルの部隊があげた戦果について】**

ウラジーミル [I1121] は城下において自分の部隊とともに後方に布陣していた。かれ〔ウラジーミル〕に対して〔伝令が〕次のように告げ始めた。「森の中に鹿砦があり人と備蓄で溢れています。いかなる軍勢をもってもこれを占領することはできません。〔鹿砦は〕非常に堅固だからです」。ウラジーミル [I1121] は，そこ〔鹿砦〕に向けて高官たちを派遣し，これをシレ

---

159）「ムスチスラフ [S4] の息子ダニール」(сынъ Мьстиславль Данило) についてはこの個所が唯一のかれについての言及である。ドンブロフスキによれば，1265-68 年に生まれ，1288 年までには没しており，当時はまだ年少だったと考えられる [Dąbrowski 2002: s. 231-232]。

160）この「クロピヴニツァ」(Кропивница) の城砦について，ウクライナ語訳索引はサンドミェシュ近くの城砦として，ポーランドのシフィエトクシシ県のサンドミェシュ郡の現在のコプシヴニツァ村 (Koprzywnica) 村に比定している。サンドミェシュからクラクフ方面へ進軍する場合，この城砦を拠点としたポーランド軍の反撃があったのだろう。この城砦は，サンドミェシュからは近く南西へ 14km ほどヴィスワ川を遡った地点であり，そこからそのまま川沿いに 134km ほど行くと首都クラクフに到達する。

161）「クロピヴニツァへ，大いなる驕りによって」(ко Кропивници, с гордостью великою) の文言はイパーチイ写本のみの読みで，フレーブニコフ系写本にはない。

ジア人カフィラト[162] (Кафилат) に率いさせた。かれらが鹿砦のところに着くと，ポーランド人たちが激しくかれらと戦った。かれら〔派遣部隊〕は，大いに苦労して占領することに成功し，そこ〔鹿砦〕で多くの人と備蓄を獲った。

**【レフが率いる遠征軍前衛部隊はポーランド人に反撃され，戦果なく帰郷する：1280 年 3 月】**

さて，われらが先にレフ [S2] について書いた通り，かれは自分の部隊とともに進軍していた[163]。そして，〔レフの部隊は〕戦い掠奪するために散らばった。神はかれ〔レフ〕に対して自らの御心を為した。〔すなわち〕ポーランド人が，かれ〔レフ〕の部隊の貴族たちや有能な配下の者たちを殺し，タタール人の一部も殺したのである。こうして，レフは大いに名誉を失って帰還した[164]。

6789〔1281〕年

**【レシェク二世はレフに反攻して国境のペレヴォレスクを占領破壊する：1280 年 3 月】**

レシェク〔二世〕がレフ [S2] を討つべく軍を進めた。かれ〔レシェク二世〕はかれ〔レフ〕からペレヴォレスク[165] (Переворескъ) の城市を占領し，そこにいた人々を老若問わず全員を斬り殺した。そして，城市を焼き，故郷へと戻った[166]。

**【コンラート二世とボレスワフ二世が抗争を始める：1280 ～ 1282 年？】**

その後，悪魔はシェモヴィト〔一世〕の二人の息子である**【*883*】**コンラート〔二世〕とボレスワフ〔二世〕に憎悪を植え付けた。二人は互いに敵対して，争い合うようになった。コンラート〔二世〕は自分の兄弟であるウラジーミル [I1121] と一体となっており，他方，ボレスワフ〔二

---

162）「シレジア人カフィラト」(Кафилат <...> же селезенец) はウラジーミル配下の軍司令官。селезенец の解釈は難しく，軍司令官のあだ名の可能性もあるが，ここでは「シレジア人」(силезенец) のことと解した。

163）ここはレフ [S2] の主導による遠征の記述だが，ウラジーミル [I1121] の働きについてのエピソードを挟んだため，年代記記者はレフの遠征部隊について書くとここで改めて言っている。

164）レフ [S2] の遠征軍がどこで，どのように敗北したかについて本記事の記述はきわめて曖昧である。

165）「ペレヴォレスク」(Переворескъ) は，ムレチカ (Mleczka) 川（サン川 (San) 支流のヴィスウォク川 (Wisłok) 右岸支流）の右岸の城砦。当時の遺構がのこされている。現在のポーランド，ポトカルパチェ県プシェボルスク郡のプシェボルスク市 (Przeworsk) に相当する。マウォポルスカ地方とガーリチ公領との境界に位置し，以下の記事で「レフの城市」(городъ Львов)[Стб. 890] とあるように（下注 219），当時はガーリチ公の配下にあった。レシェク二世軍はサンドミェシュ方面からサン川沿いにこの城砦に向けて進軍したと考えられる。

166）以下の 1282 年の記事によれば，この時期に同時に，レシェク二世は，北方のヴォルィニ公領との国境地帯の城市ヴォインにもルブリンから遠征軍を派遣して掠奪を行っている（下注 218 参照）。

世〕はレシェク〔二世〕およびその兄弟のヴワディスワフ〔一世〕と一体だった。

**【ボレスワフ二世はコンラート二世の拠点エズドフ城（ワルシャワ）を占領・掠奪する：1282 年】**

ボレスワフ〔二世〕は自分の軍勢を集めると[167]，ヴワディスワフ〔一世〕の援軍を得て，自分の兄弟コンラート〔二世〕を討つべく，〔その拠点地である〕城市エズドフ[168] (Ѣздов) へ向けて出陣した。その時，コンラート〔二世〕はこの〔エズドフの〕城市にはいなかった。こうして〔ボレスワフ二世は〕攻撃を仕掛けて，〔エズドフの〕城市を占領した[169]。

ポーランド人の間には次のような掟があった。すなわち，〔城市を占領しても住民を〕奴隷として捕獲してはならない，殺してはならない，身ぐるみ剝ぐだけにせよ，というのである[170]。〔そのように，〕〔ボレスワフ二世は〕〔エズドフの〕城市を占領すると，その中に〔蓄えられていた〕物資を沢山獲り，人々からも奪い取った。自分の兄嫁，すなわちコンラート〔二世〕の公妃の〔財産も〕身ぐるみ奪った。自分の姪からも身ぐるみ奪い取った[171]。こうして，自分の兄弟であるコンラート〔二世〕に対して大きな辱めを加えた。

**【コンラート二世はウラジーミルに援助を求める：1282 年】**

その後，コンラート〔二世〕は，自分の兄弟のウラジーミル [I1121] のもとに，自分の使者を派遣して，自分が〔受けた〕辱め〔を雪ぐこと〕について，かれ〔ウラジーミル〕に不満を訴えた。ウラジーミル [I1121] は可愛そうに思って大いに泣いた。そして，自分の兄弟〔コンラート二世〕の使者に向かって言った。「兄弟よ，どうか，神があなたが受けた辱めに報復しますように。わたしはこの通りあなたを助ける用意はできています」。

---

167）ボレスワフ二世はこの頃はソハチェフ（下注 184 参照）の城市を拠点にしていたようである。そこから 52km ほど東へ行くとエズドフ（ワルシャワ）（次注）に到達する。

168）「エズドフ」(Ѣздов) は，現在のワルシャワ市内のワジェンキ公園 (Park Łazienkowski) の周辺にあった城砦。現在はウヤズドフ区 (Ujazdow)，ウヤズドフ城 (Zamek Ujazdowski) にその名称が残っている。ヴィスワ川河岸に築かれたマゾフシェ公領の城砦の一つ。[ イパーチイ年代記 (12)：注 365] を参照。

169）フルシェフスキイは，ユーリイの「スーズダリ」行き（下注 173）との関係で，このボレスワフ二世によるエズドフ城占領を 1282 年のこととしている [Грушевський-Хронологія: С. 371]。

170）このポーランド人の慣習だった戦争捕虜にかかわる掟 (закон) については，[ イパーチイ年代記 (10)：注 484] を参照。城市占領時のポーランド人の振る舞いが，ルーシ諸公にとっての遠征の慣習（その主な目的は奴隷 (челяди) として使役するための捕虜の獲得だった）と異なっていたことから，このような記述がなされたのである。

171）コンラート二世は，1270 年頃，レグニツァ公ボレスワフ二世角公 (Bolesław II Rogatka) の娘ヤドヴィガと結婚しており，ボレスワフ二世にとっての「兄嫁」(ятровь) で「公妃」(княгиня) とはかの女を指している。二人の間にはアンナという娘（当時 10 歳ほど）がおり「姪」(сыновиця) はこれを指している。

**【ウラジーミルは甥のユーリイに援軍を要請する：1282 年秋】**

そして，〔ウラジーミルは〕ボレスワフ〔二世〕を討つべく軍の準備に取りかかった。また，自分の従甥[172]のユーリイ [S21] のもとに使者を遣って，援軍を要請した。従甥〔ユーリイ〕はかれ〔ウラジーミル〕にこう言った。「わが〔父方の〕伯叔父よ【***884***】，わたしはあなたと喜んで進軍したいのですが，わたしには時間がありません。主人よ，わたしは結婚するためにスーズダリまで出かけるのです[173]。わたしは，多くの家来を連れては行きません。すべてのわたしの家来と貴族たちは神とあなたの手〔に委ねます〕。それであなたがよろしければ，どうかかれら〔家来と貴族たち〕とともに進軍して下さい」。

**【ウラジーミルは軍隊を編成し，配下の軍司令官たちをコンラート二世への援軍として派遣する：1283 年春】**

ウラジーミル [I1121] は軍を整えると，ベレスチエへ向けて進軍を開始した。そこで，〔軍隊を〕集合させた。ホルム人 (холъмлянѣ) がかれ〔ウラジーミル〕のところにやって来た。かれらのところに軍司令官チュイマ[174] (Тюима) がいたからである。そして，ウラジーミル [I1121] は大軍を率いて，メリニク[175] (Мѣлник) へ向けて軍を進めた。

ウラジーミル [I1121] は[176]，メリニクからスロニムの公 (князь Вослонимьский) ヴァシリ

172）「従甥」の原文は сыновець; сыновечь で兄弟もしくは従兄弟の息子を指す。ここでは，後者にあたる。

173）このユーリイ [S21] が「結婚する」(жинитися) ことについては，『ヴォスクレセンスカヤ年代記』および『シメオノフスカヤ年代記』の 6790(1282) 年の記事に「その年，トヴェーリの〔公〕ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ [K45] の娘が，ヴォルィニの公ユーリイ [S21] に嫁ぐためにヴォルィニへと連れてこられた」([ПСРЛ Т.7，2001: С. 176][ПСРЛ Т. 18, 1913: С. 78]）とある内容と対応している。つまり，1282 年（フルシェフスキイによればその年の秋 [Грушевський-Хронологія: С. 371]）にユーリイ [S21] 自身を含む使節団がトヴェーリへ行き，結婚期の冬に花嫁を連れて戻った。そのためユーリイ自身がポーランドへの援軍の遠征に参加できなかったということ。本記事の「スーズダリまで」(до Суждали) は，スーズダリの地を意味し，実際には使節団はトヴェーリまで行ったのだろう。

174）ホルムの「軍司令官チュイマ」(воевода Тюима) については上注 120 を参照。なお，文脈から見て，チュイマが率いてきたホルム人の部隊は，上述のユーリイ [S21] がウラジーミルの要請に応えて派遣した援軍部隊と理解することが出来る。そのことから，当時ユーリイはホルムの支配公だったと推定される [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 234, przyp. 1556]。

175）「メリニク」(Мѣлник) はこれまでも国境地帯の拠点として何回か言及されている。ベレスチエからブーグ川を下って北西へ 55km ほど離れてた城砦。[ イパーチイ年代記 (12)：注 301] を参照。

176）原文では「ウラジーミル」が与格になっているが，文脈から判断してここは独立与格構文の誤用と解釈して，主格として訳した。

コ[177] (Василко) [S32] を軍司令官として〔ポーランドの地へ〕派遣した。〔同様に〕ジェリスラフ[178] (Желислав) とドゥナイ[179] (Дунай)〔も軍司令官として派遣した〕。他方, ユーリイ [S21] の軍隊は軍司令官チュイマ[180]が率いた。こうして,〔派遣軍は〕ポーランド人〔の地〕へと向かった。

**【ウラジーミルはコンラートに予め使者を遣り，援軍の派遣を内密に知らせる：1283 年春】**

ウラジーミル [I1121] は軍隊を派遣してから,〔自分は〕ベレスチエに戻った。〔ウラジーミルは〕軍隊の到着に先んじて, 自分の兄弟コンラート〔二世〕のもとに使者を派遣した[181]。なぜなら，かれ〔コンラート二世〕のもとには不忠な貴族たちがいたからである。

〔不忠な貴族たちが〕ボレスワフ〔二世〕に内通しないように，ウラジーミル [I1121] の使者は，コンラート〔二世〕のもとにやって来ると，かれ〔コンラート〕の貴族たち全員の目の前で，かれ〔コンラート〕に向かってこう語った。「あなたの兄弟ウラジーミル [I1121] はあなたに対して次のように語りました。『〔わしは〕そなたの辱めを雪ぐために喜んでそなたを助けたいのだが，わしはそれが出来ない。タタール人がわれらを占領しようとしているのだ』」。それ

177）「スロニムの公ヴァシリコ」(Василко, князь Вослонимьский) [S32] についてはこの個所が初出。ウクライナ語訳注とコトリャールは，このヴァシリコを 1260 年頃に没したロマン･ダニーロヴィチ [S3] とエレーナ（ヴォルコヴィエスクの支配者グレーブ侯 (князь Глѣб) の娘）との間の息子であり，傍系の公が勤務公として辺地を支配していたとしている [Котляр 2005: C.341]。それに対してドンブロフスキは，このヴァシリコはリューリク公家に属さない，リトアニア＝バルト族の首長の一族出身ではないかとしている [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 235, przyp.1558]。このふたつの説はともに決定的な論拠はなくどちらとも定め難い。

いずれにせよ，スロニムは，1276 年にリトアニア公トライデニスがプルス人の植民を図ったため，ウラジーミル [I1121] とレフ [S2] がこの城市に遠征して占領しており（上注 101），その後，ウラジーミルは支配下に置いたスロニムの城市に，ヴァシリコ公を自分の代官として置いたのだろう。以下に，ヴァシリコがベレスチエで待機していたウラジーミル公 [I1121] に戦勝報告を送っていること（下注 193）から見て，かれはウラジーミルが派遣したルーシ援軍部隊の総司令官だったことがわかる。

178）「ジェリスラフ」(Желислав) は，ウラジーミル [I1121] 配下の軍司令官で，1262 年のリトアニア人討伐遠征のときにヴァシリコ [I112] とウラジーミル [I1121] によって派遣されている（[ イパーチイ年代記 (12)：187 頁，注 373] 参照）。

179）「ドゥナイ」(Дунай) はここが初出で，ジェリスラフと同様にウラジーミルの配下の軍司令官だろう。以下の記事 (1282, 1287 年 ) で何回か言及されており, ウラジーミルの側近貴族だったことがわかる。なお, 人名としての「ドゥナイ」(Дунай Иванович) はロシア･フォークロアのブィリーナ（英雄叙事詩）の中では，キエフ公ウラジーミルに仕え，リトアニアへ使者として派遣される従士として描かれている。

180）「チュイマ」については上注 120 を参照。

181）コンラート二世はエズドフ（ワルシャワ）（上注 168 及び下注 192 参照）に拠点を置いて, 西にあるヴワディスワフ一世短身王（ボレスワフ二世の同盟者）の支配地の占領を狙ったのだろう。それゆえ，ウラジーミルの使者はエズドフに向かったと考えられる。

から，使者は公〔コンラート二世〕の片手を取って，かれの手を握った[182]。公〔コンラート二世〕は〔その意味を〕悟ると，かれら〔使者達〕とともに**【*885*】**その場を立ち去った。〔その後〕〔使者たちは〕かれ〔コンラート二世〕にこう告げ始めた。「あなたの兄弟〔ウラジーミル〕は〔実は〕こう言ったのです。『そなた自身は軍の準備をせよ。ヴィスワ川を〔軍の輸送ができるように〕川船を装備せよ[183]。明日には〔われらの援軍の〕軍隊がそなたのもとに現れるだろう』[184]」。コンラート〔二世〕は大いに喜んで，速やかに川船を用意するよう命じ，自らも準備をした。

**【ウラジーミルの援軍はコンラート軍と合流してゴスティニイへと向かう：1283 年春】**

〔ウラジーミルが派遣した〕軍隊が到着し，〔ヴィスワ川を〕渡河した。部隊は軍装を整え始めた。軍装を済ませると，次のように進軍を始めた。〔軍司令官〕ヴァシリコは自分の部隊とともに進軍し，ジェリスラフも自分の部隊とともに，ドゥナイも自分の部隊とともに〔進軍を始めた〕。コンラート公〔二世〕は自分のポーランド人の部隊とともに，チュイマは自分の部隊とともに〔進軍を始めた〕。こうして，万全の軍備をもって決然として進軍した。

かれら〔援軍の軍司令官たち〕がソハチェフ[185] (Сохачев) の城市に達する手前で，かれらはこの城市を占領することについて評議した。それは，〔ポーランドの〕地の深くまで入り込まないようにとのことだった[186]。ところが，コンラート公〔二世〕はかれらにそう〔ソハチェフの占領〕させず，ゴスティニイ[187] (Госиныи) の方面へと〔軍隊を〕向かわせた。それは，ボレ

182）「かれの手を握った」の文言はフレーブニコフ系写本にはないが，ここはイパーチイ写本の読みに従った。

183）ルーシの援軍部隊がヴィスワ川を渡河したエズドフ付近から，川船 (лодки) でヴィスワ川を下り，軍隊を大規模に輸送する計画を立てたのである。川の渡航可能期であることから，この遠征は 1283 年春頃に行われたと推定できる。

184）このように，おおやけに言いあらわしたこととは正反対のメッセージを身振りによって相手に伝える戦術テクニックは，1259 年にウラジーミルの父ヴァシリコ [I112] がタタール人に強いられたホルム城攻撃の際に用いている（[ イパーチイ年代記 (12)：182 頁，注 346] 参照）。

185）「ソハチェフ」(Сохачев) は，マゾフシェ公領の城市でエズドフ（ワルシャワ）（前注参照）の西約 50km ほどの地点のヴィスワ川左岸支流のブズラ川 (Bzura) 左岸にあり，ヴェリコポルスカ地方へ向かう街道の要地に位置していた。現在のマゾフシェ県ソハチェフ郡の首都ソハチェフ (Sochaczew) に相当する。ベレスチエ（ブレスト）からだと西へ 240km ほど離れている。当時は，ヴワディスワフ一世（短身王）と同盟していたボレスワフ二世が拠点地としていた（下注 195 参照）。

186）援軍の軍事行動をソハチェフの占領にとどめることは，ウラジーミル [I1121] が軍の損耗を避けるために，予め軍司令官たちに指示したと考えられる [Котляр 2005: C.342]。

187）ゴスティニイ (Госиныи) は，現在のマゾフシェ県ゴスティニン郡の首都ゴスティニン (Gostynin) を指している。プウォツクからは南西へ 20km ほどしか離れておらず，ソハチェフからヴィスワ川沿いに西北西方向へ 57km ほど進めば到達する。ヴワディスワフ四世の拠点城砦だった。

スワフ〔二世〕が愛しんでいる場所だったのである[188]。

**【コンラート軍とルーシの援軍はゴスティニイの城市を包囲して陥落させ，コンラートは勝利の凱旋をする：1283 年】**

〔コンラート二世と援軍の〕部隊が城市〔ゴスティニイ〕に到来し，城市を包囲した[189]。〔包囲軍は〕大きな松林のようだった。そして，城市を占領するための軍備を整えた。コンラート公は馬で〔援軍部隊の前に〕進み出ると，次のように言った。「愛しいルーシ人のわが兄弟同胞たちよ[190]。力を尽くされよ，〔ポーランド人とルーシ人が〕心を一つにするために」。こうして，〔ルーシの部隊は〕胸壁の下からよじ登ろうとした。他の諸部隊は動かないままだった。〔籠城の〕ポーランド人の不意討ちを警戒していたのである。**【*886*】**胸壁に登り詰めようとしたころで，ポーランド人はかれらに向かって，猛烈な雹のように石を落とした。しかし，〔攻城軍の〕戦士たちの〔撃つ〕矢のために，〔籠城軍兵士が〕胸壁から姿をあらわす[191]ことができなかった。

槍による突き合いが始まった[192]。城市の多く〔の籠城軍兵士〕が，ある者は槍で，ある者は矢で傷を負った。死体がまるで藁束のように胸壁から投げ落とされた。こうして，城市〔ゴスティニイ〕は占領された。城内の多量の物資が奪われた。捕虜も数え切れないほど多数だった。〔城内の〕投石機は壊され，城市は焼かれた。

こうして，〔コンラート軍と援軍は〕勝利と大いなる名誉をもって帰郷した。コンラート公〔二世〕は，自分の城市へ[193]向かい，勝利の栄冠を戴いた。自分の兄弟ウラジーミル [I1121] の助けによって，辱めを雪いだのである。

---

188）ヤン・ドゥウゴシュ『ポーランド王国年代記』第 7 書の 1286 年の項（この年代は誤り）では，城市ゴスティニイ (Gostinin) はボレスワフ二世の同盟者ヴワディスワフ四世短身王の支配下 (sub Vladislao Loktck) としている [Długosz ks.7-8, 2004: s. 304][Dlugossi Liber 7/8, 1975: p. 239]。

189）ヤン・ドゥウゴシュ『ポーランド王国年代記』第 7 書の 1283 年の項には短く「ゴスティニンの城市はマゾフシェ公コンラートによって破壊された」(Et opid(d)um Gosthinin per Cunradum Maszovie ducem vastatur)[Długosz ks.7-8, 2004: s. 225] と記されており，以下の戦いはこれに対応している。

190）この「愛しいルーシ人のわが兄弟同胞たちよ」(братья моя милая руси) はウラジーミル [I1121] が派遣したルーシの援軍全体に対する呼びかけ。

191）「胸壁から姿をあらわす」とは，籠城兵が胸壁の隙間から弓や弩弓を射て反撃すること。なお，この部分の戦闘の表現は，ヨセフス・フラヴィウス『ユダヤ戦記』のスラブ語版第 1 書 18 章のヘロド王による宮殿襲撃の場面と表現が似ており（[Мещерский 1958: C. 100, 198]）さらに 1259 年のサンドミェシュ攻防戦の描写とも類似である（[ イパーチイ年代記 (12)：注 352] 参照）。

192）すでに胸壁を登り詰めた攻城の兵（ルーシ人）が，胸壁の上で籠城側と長槍で突き合う白兵戦を行ったということ。

193）先に，ボレスワフ二世に占領された，コンラートの拠点エズドフの城市のこと（上注 168）。

**【援軍のヴァシリコ公も勝利の凱旋をする】**

ヴァシリコ公は多くの捕虜を連れてベレスチエへと向かった。自分たちに先行して使者を派遣して，自分の主人であるウラジーミル公 [I1121] へ報告を送った[194]。ウラジーミル [I1121] は大いに悲しんでいた。なぜなら，かれ〔ヴァシリコ〕の部隊から報告がなかったからである。その後，かれ〔ウラジーミル〕のもとにかれ〔ヴァシリコ〕の部隊から報告が来た。全員が健勝で大いなる名誉とともに進んでいるとのことだった。ウラジーミル [I1121] は大いに喜んだ。かれの従士たちが全員無事で，自分の兄弟コンラート〔二世〕の辱めを雪いだのだから。

**【ルーシ遠征軍の戦いのエピソード：1283 年】**[195]

かれ〔ウラジーミルが派遣した〕の部隊で殺されたのはたった二人だけであり，それも城市〔ゴスティニイ〕の城下でではなく，追いかけられたときのことだった。一人は，プルス人の生まれで，もう一人は**【*887*】**，屋敷付きのかれ〔ウラジーミル〕が大切にしていた配下の者で，貴族の息子のラフ・ミハイロヴィチ (Михайловичь именемь Рахъ) という者だった。この二人が殺された事態について，われらは証言しよう。

部隊がソハチェフの城市を通り過ぎて進んでいたまさにその時，ソハチェフからボレスワフ〔二世〕公が出撃して来た[196]。

ウラジーミル公 [I1121] は，予め自分の司令官たち，すなわちヴァシリコ，ジェリスラフ，ドゥナイ[197] に対して，掠奪のために〔軍兵たちを〕散り散りにしてはならず，総員が城市〔ゴスティニイ〕へと向かわなければならないと指示をしていた。ところが，軍隊に隠れてこっそりと村へ〔掠奪に〕向かう者たちが 30 人ほどおり，これを率いていたのはユーリイの〔配下の〕ブルース (Блус) という男だった。そして，かれらは村を離れて進路を取った。〔捕獲した〕奴隷たちが森の中へと逃げ出したのである。かれらはその後を追いかけた。

まさにその時，ボレスワフ率いるポーランド人がかれら〔ルーシ人〕に一撃を加えた。かれら二人〔ラフとプルス人〕の〔属する〕従士たちはこれに耐えきれずに，ブルースとともにひたすら逃げ出した。〔しかし〕この二人，ラフとプルス人は逃げ出さずに，記憶に値する仕事をなして[198]，雄々しく戦い始めた。

プルス人はボレスワフ〔二世〕と，騎乗で打ち合ったが，その場で多勢によって殺された。

---

194）ヴァシリコが遠征軍の総司令官であったことについては上注 177 を参照。

195）この戦闘を描写した節は事態の進行の叙述とは独立したエピソードになっている。遠征参加者からの聞き書きのような別資料が，年代記編集の際にここに挿入されたものだろう。

196）マゾフシェ公領の城市ソハチェフについては上注 184 を参照。当時はボレスワフ二世の拠点だった。

197）ウラジーミルによって，援軍の遠征に派遣された三人の軍司令官については上注 177-179 を参照。

198）この表現については [ イパーチイ年代記 (12)：185 頁，注 353] を参照。

ラフはボレスワフ〔二世〕の高級貴族をひとり殺したが, その場で自分自身も同様に戦死した。この〔二人は〕雄壮な心をもって戦死して，自らの後の世の時代に栄誉を残したのだった。

**【ウラジーミルはベレスチエから拠点城市ヴラジミルへと戻る：1283 年】**

その後，ウラジーミル [I1121] はベレスチエを出て，ヴラジミルへ向けて出発した。**【*888*】**

6790〔1282〕年

**【タタール人はルーシ諸公を動員してハンガリーへ来襲する：1285 年 2 月 [199]】**

呪われた無法のノガイ [200] (Ногай) とかれとともにトゥラ･ブカ [201] (Телебуга) が，数え切れないほどの多数からなる大軍勢をもって, ハンガリー人を攻めるべく到来した [202]。かれら〔トゥラ・ブカ〕はルーシ諸公，すなわちレフ [S2]，ムスチスラフ [S4]，ウラジーミル [I1121]，ユーリイ・リヴォヴィチ [S21] 等に，自分とともに出陣するよう命じた。

そのとき，ウラジーミル [I1121] は片脚が〔悪くて〕歩けず，そのため〔遠征に〕行くことはなかった。ひどく負傷していたのである。そこで,〔ウラジーミル [I1121] は〕自分の軍隊を，甥のユーリイ [S21] に率いさせて派遣した。その当時, ルーシの諸公はタタール人の意志に従っていたのであり, そのため〔諸公〕全員が出陣した。ただ, ウラジーミル [I1121] ひとりだけが，歩行困難のために残っただけだった [203]。

---

199）タタール人のハンガリー侵攻（いわゆる「第二次ハンガリー侵攻」）の年代については，ハンガリー及びドイツ史料をもとに考察したフルシェフスキイの見解によった [Грушевський-Хронологія: С. 371-372 ]。その後の諸研究も多くはこれ基づいている。ただし, セレズニョフは, モンゴル関係史料をもとに，ポーランド侵攻の丸一年前，すなわち 1286-87 年冬のことと推定している [Селезнев 2009: С. 192]。

200）「ノガイ」については上注 114 を参照。

201）トゥラ・ブカ（Телебуга; Tula-Buqa, Тула-Бука)（ハン在位 1286 年頃～ 1291 年）は，ジョチ・ウルスの第 8 代宗主（ハン）になった人物で，第 6 代宗主モンケ・テムル（上注 80）の甥にあたる。当時は，遠縁の叔父でウルスの実質的な支配者ベクリャルベク (беклярбек：総司令官 ) ノガイと共同で，西方地方の支配をおこなっており，ここではノガイに対しては副次的な地位で記されている。しかし，1287 年には弟およびモンケ・テムルの息子たちと共謀して，ノガイが擁立していた第 7 代宗主（ハン）トデ・モンケ（叔父にあたる）を廃して，自らハン位についている [Селезнев 2009: С. 192-194]。

202）後述されるように，トゥラ・ブカがカルパチア山脈横断の行路をとったことから見て，かれの遠征部隊はガーリチの地へ「到来した」と考えるべきだろう。

203）このタタール人によるハンガリー侵攻（いわゆる第二次ハンガリー侵攻）については，しばらくあとの記事でその経緯が記されている（下注 221 以下参照)。

**【ボレスワフ二世は遠征してヴラジミルの所領シチェカレフを掠奪する：1285 年 2 月頃 [204)]】**

ボレスワフ〔二世〕は依然として自分の愚かさを誇っており，時機を見計らうと，200 人〔の軍兵〕とともに到来して，シチェカレフ [205)](Щекарев) の周辺を掠奪し，10 の村を占領した。そして，大きな傲慢さをもって帰還した。まるで，かれが全ての地を占領したかのようだった [206)]。

**【レフはウラジーミルに，ボレスワフ二世討伐遠征を提案する：1285 年】**

その後，〔タタール人とルーシ諸公の軍が〕ハンガリーの地に侵入したとき，レフ [S2] は〔援軍の〕任から解放されて [207)]，故郷へ戻ってきた。そして，そこで起こったこと，すなわちボレスワフ〔二世〕がかれの地を掠奪したことを残念に思った。

〔レフは〕自分の兄弟ウラジーミル [I1121] に使者を遣って，かれにこう言った。「兄弟よ，われら〔が受けた〕この辱めを雪ごうではないか。〔使者を〕派遣して，リトアニア人をボレスワフ〔二世〕〔への攻撃に〕動員せよ」。

**【レフとウラジーミルはリトアニア人の援軍をあてにしたが，到着が遅れたため，自らの軍司令官たちをヴィシェゴロドに派遣する：1285 年】**

ウラジーミル [I1121] はドゥナイ [208)] を派遣してリトアニア人を動員した。リトアニア人はかれ〔ウラジーミル〕に，そのようにする〔ボレスワフを攻める〕ことを約束して **【*889*】**，言った。「ウラジーミル [I1121] よ，善き公正なる公よ，われらはそなたのために討ち死にしてもよい。そなたのよい時機に，われらは〔進軍する〕用意がある」。レフ [S2] とウラジーミル [I1121] は自分の軍隊の装備をととのえた。そして，かれらはベレスチエへやって来ると，リトアニア人〔が来るのを〕待った。リトアニア人は〔約束の〕期限までに到着しなかった。

レフ [S2] とウラジーミル [I1121] の二人は自分たちは進軍せずに，軍司令官を派遣した。レ

---

204）年代はフルシェフスキイに拠っている [Грушевський-Хронологія: С. 371]。

205）「シチェカレフ」(Щекарев) は，現在のポーランドのヘウム県の都市クラスニスタウ (Krasnystaw) に相当する城市。ヴェプシ川中流域左岸のヴォルィニ地方とポーランドとの境界に位置しており，当時はユーリイ [S21] の支配領だった。ヴラジミルからだと西北西に 82km ほど離れている。ボレスワフ二世はソハチェフから遠征を行ったとすれば，南東方向のヴィスワ川上流方面へ 250km 近く遠征したことになる。なおこの城市は，6727(1219) 年の記事にもレシェク一世が攻撃したダニール [I111] の領地として言及されている [ イパーチイ年代記 (10)：279 頁，注 296]。

206）ボレスワフの遠征は，1283 年にルーシ諸公がコンラート二世に援軍を行ったことに対する報復であり，ウラジーミル [I1121] を除くルーシ諸公がトゥラ・ブカのハンガリー遠征に動員されて不在だったことを利した行動だったと考えられる。[Котляр 2005: С. 343]。

207）ボレスワフ二世によるシチェカレフ周辺の掠奪（上注 204）の報を受けて，所領地防衛のためを理由にノガイの許しを得たと思われる。

208）ウラジーミル [I1121] の軍司令官ドゥナイ (Дунай) については，上注 179 を参照。

フ [S2] は，チュイマ[209] (Тюима)，ヴァシリコ・ベルジャニン[210] (Василко Белжянин)，リャベツ[211] (Рябьц) に自分の軍隊を率いさせた。ウラジーミル [I1121] はヴァシリコ公[212] (Василко князь)，ジェリスラフ[213] (Желислав)，オロヴャネツ (Оловянъц)，ヴィシタ (Вишта)[214] に自分の軍隊を率いさせた。こうして，〔派遣軍は〕ボレスワフを攻めるべく進軍を始めた。そして，ヴィシェゴロド[215] (Вышегород) 周辺で掠奪が始まった。数え切れないほど多数の奴隷，家畜，馬を捕獲した。

**【リトアニア人が到着し，ウラジーミルはこれをレシェク黒公討伐のためにルブリン周辺へ派遣する：1285 年春】**

その後，リトアニア人がベレスチエへやって来て，ウラジーミル公 [I1121] にこう言い始めた。「そなたはわれらを動員した。〔さらに〕われらをどこかへ〔掠奪に〕行かせよ。われらはその用意が出来ている。そのためにわれらは〔ここに〕来たのだ」。公〔ウラジーミル〕は評議を始めた。かれら〔リトアニア人〕をどこへ引き連れて行ったらよいのか。自分たちの軍隊はすでに遠くへボレスワフ〔二世〕を攻めるべく出払っている[216]。他方，川は増水して流れ始めている[217]。ウラジーミル [I1121] は，レシェク〔二世黒公〕が以前に，ルブリン人を派遣して，かれ〔ウラジーミル〕から国境地帯のヴォイン (Воин) という名の村を占領したこと[218] を思い出した。ウラジーミルはかれ〔レシェク〕に，何度も，〔その時捕獲した〕奴隷を還すように言っ

---

209）レフ配下の軍司令官チュイマについては上注 120 を参照。

210）「ベルズ人ヴァシリコ (Василко Белжянин) は，レフ配下の軍司令官で，城市ベルズ (Белз）の出身者のこと。すぐ後にスロニム公ヴァシリコが言及されることから（下注 211)，これと区別するために出身地を書いたのだろう。

211）「リャベツ」(Рябьц) は，レフ配下の軍司令官で詳細は不明。

212）ウラジーミル配下の軍司令官スロニム公ヴァシリコについは，上注 177 を参照。

213）ウラジーミル配下の軍司令官ジェリスラフについては上注 178 を参照。

214）ウラジーミル配下の軍司令官「オロヴャネツ」(Оловянъц) と「ヴィシタ」(Вишта) についてはここが初出。オロヴャネツについては 6795(1287) の記事でも言及されており，高官（貴族）だったことがわかる（下注 309 参照)。

215）「ヴィシェゴロド」(Вышегород) は，マゾフシェ地方の中心地プウォツク (Płock) からヴィスワ川を 40km ほど上った上流にある現在のビショグルト (Wyszogród) に相当する。ボレスワフの拠点地のひとつだった。ベレスチエ（ブレスト）からだと，西ブーグ川，ヴィスワ川を西に向かって下る方向へで 245km ほど進むことになる。[ イパーチイ年代記 (11)：230 頁，注 280] も参照。

216）レフとウラジーミル配下の軍司令官たちのヴィシェゴロドへの遠征のこと。

217）ヴィシェゴロドへ軍司令官たちを派遣したときには冬季だったため川の氷上の移動が可能だったが，遅れて到着したリトアニア人は春の増水のため川を移動に使えなくなったことから，ベレスチエから陸上移動が可能なルブリン方面への掠奪遠征を提案したのである。

218）1280 年 3 月頃のレシェク二世のウラジーミルの領地への掠奪遠征のこと。6789(1281) 年の記事の冒頭の記事への上注 166 を参照。

たが，かれ〔レシェク〕は【*890*】かれ〔ウラジーミル〕にかれ〔ウラジーミル〕の奴隷を還さなかった。

そのため,〔ウラジーミルは〕かれ〔レシェク二世黒公〕を攻めるべくリトアニア人を派遣した。そして,〔リトアニア人は〕ルブリン周辺で掠奪を行い，多くの奴隷を捕獲した。こうして,〔ウラジーミルが派遣したリトアニア人は〕捕虜を得ると，名誉をもって帰還した。

その後レフ [S2] とウラジーミル [I1121] の軍隊は大いなる名誉をもって帰還した。多数の捕虜を捕獲したのである。こうして，それぞれが別れて帰郷した。

**【ポーランド人によるベレスチエ襲撃と反撃：1280 年 3 月】**

前述の年，レシェク〔二世黒公〕が，レフ [S2] の城市のペレヴォレスク (Переворескъ) を占領した頃[219], ポーランド人はベレスチエ (Берестье) 近辺のクロスナ川[220](Кросна) 沿いを掠奪し，10 の村を占領して，引き返した。ベレスチエ人は集合すると，かれらのあとを追いかけた。ポーランド人は 200 人で，ベレスチエ人は 70 人だった。かれら〔ベレスチエ人〕のもとには軍司令官ティート[221] (Титъ) がおり，かれは，戦争でも狩猟でもどこにあってもその雄壮さで有名だった。こうして，かれら〔ポーランド人〕を追走して，かれらと戦った。ベレスチエ人は，神の慈悲によってポーランド人に勝利して，かれらを 80 人殺し，その他は捕獲した。また，捕虜になっていた仲間〔同郷のベレスチエ人〕を解放した。こうして,〔ベレスチエ人は〕神とその至浄なる母を永遠に讃美しながら，名誉をもってベレスチエへと帰還した。

**【ノガイとトゥラ・ブカはハンガリー侵攻する。トゥラ・ブカ軍は山中をさ迷って壊滅する：1285 年春】**

さて，われらはもとの話に戻ろう[222]。

忌まわしい無法のノガイとトゥラ・ブカがかれら〔ルーシ諸公〕とともに進軍し，二人はハ

---

219）このレシェク二世黒公によるペレヴォレスク (Переворескъ) への攻撃については，上注 165 の個所で言及されており，1280 年 3 月頃のことと推定される。この記事は，レシェク二世との戦いの関連から，時系列にこだわらずにここに挿入されたと考えられる。

220）「クロスナ川」(Кросна) は，ウクライナ語訳索引ではベレスチエ（ブレスト）近郊を流れていた西ブグ川右岸の支流とされるが現在は枯渇して存在しないとしている。ポーランド語訳は，西ブグ川左岸支流の現在のクルズナ川 (Krzna) に比定している。中流域だとベレスチエから西へ 50km ほどの近さで，マゾフシェ領からも近く，こちらの可能性が高いだろう。

221）「ティート」(Титъ) は名前から推定して，ポーランド史料に言及される人名 Tytus に対応し，ポーランド人である可能性が高い。ベレスチエに勤務したポーランド人が高位の地位（軍司令官 воевода）を得たものか [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 238, przyp. 1596]。

222）タタール人によるハンガリー侵攻については，すでに上で言及されており，「もとの話」とその個所を指している（上注 171 参照）。

ンガリーの地を掠奪していた。

ノガイはブラシェフ[223] (Брашевъ) へと進攻した。

他方トゥラ･ブカは〔ウゴルの〕山越え[224]の進攻を始めたが, 山越えに三日かかるところを, 30 日の間, 山中をさ迷い歩いていた[225]。神の怒りに導かれたのである[226]。かれら〔タタール軍〕は大いなる飢えに〔苦しみ〕, 人を食い始め, **【*891*】**それから自ら死にはじめた[227]。かれらは数え切れないほど多数が死んだ。これを目撃した者たちはこう言っていた。「死者は 10 万人になる[228]」。忌まわしく無法のトゥラ・ブカは, 自分の妻をともなって, 一頭の雌馬を連れただけの徒歩で, 〔ハンガリーから〕逃げ出した。神から辱めを受けたのである[229]。

**【ウラジーミルとユーリイはリトアニア人を動員してボレスワフ二世の城市ソハチェフを占領する：1285 ～ 86 年】**

それから, その無知ぶりをまだ発揮していなかったボレスワフ公〔二世〕がいた。かれはウラジーミル公 [I1121] とユーリイ [S21] に悪をなすことを止めていなかった。ウラジーミル [I1121] とユーリイ [S21] は, ボレスワフを攻めるべく自分の軍の戦闘準備を整えた。ウラジーミル [I1121] は〔リトアニア人のもとに〕使者を遣って, リトアニア人を動員した。こうして,

---

223）「ブラシェフ」(Брашевъ) は, 現在のルーマニアのブラショフ県の県都ブラショフ（Braşov) に相当する。ノガイ軍はドナウ川河口一帯の根拠地から, 西に向かって遠征軍を進め, トランシルヴァニア地方への掠奪遠征を試みたと考えられる。

224）この「山を越えて」(поперек гору) は「ウゴルの山」(горы Угорские), すなわちカルパチア山脈の山越えを意味している。モンゴル軍は第一次ハンガリー侵攻のときと同様の行路で, ガーリチ公領からおそらくヴェレック峠 (Верецкий перевал; Verecke Pass) を越えてパンノニア平原への侵攻を試みたと考えられる。

225）トゥラ・ブカ軍のカルパチア山脈越えが 1285 年の春, おそらく 2 月頃だとすると, 軍隊は深雪に進路を阻まれて迷った可能性が高い。

226）トゥラ・ブカのハンガリー遠征失敗が神の懲罰によるという説明は, 以下にも参照されている（下注 235 参照）。

227）「自ら死にはじめた」は原文で начаша и сами измирати 。フレーブニコフ系写本は измирати（死ぬ）の代わりに покаряти（服従させる）が使われているが, これでは文意が通らない。

228）この 10 万人という死者の数（умерших бысть сто тысячь）は, トゥラ・ブカ軍が「数え切れないほどの大軍団」であったことと対応するが, 二年後にはかれが軍団を擁してポーランド遠征を行っている（下注 234 参照）ことを考えると, これは誇張された死者の数と考えるべきだろう [Jackson 2005: p. 205]。なお, ポーランド語訳注は, 『士師記』8:10 の「戦死した者は 12 万」(и умерших бяше сто и двадесять тысящ) の句の借用としている [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 239, przyp. 1601]。

229）トゥラ･ブカのハンガリー侵攻については, これに動員されたはずの（上注 202 以下参照）レフ [S2], ムスチスラフ [S4], ユーリイ [S21] 等ルーシ諸公についてここでは言及がなされていない。これについて, セレズニョフは, ルーシ諸公は, ポーランドのボレスワフ二世軍の到来（下注 230）の報を受けて, カルパチア山脈を越えずに引き返したと推定している [Селезнев 2009: С. 192]。

全員が進軍を始めた。ユーリイ公 [S21] もかれらとともにボレスワフを攻めるべく進軍した。

〔ユーリイが〕メリニツァ[230] (Мѣлница) に滞在していたとき[231]，かれの父のレフ [S2] がかれ〔ユーリイ〕のもとに使者を派遣して，かれに次のように言った。「我が子ユーリイ [S21] よ，お前は自らリトアニア人とともに〔遠征に〕行くのはやめよ。わしは，かれらの侯ヴァイシュヴィルカスを殺したことがある[232]。〔リトアニア人は〕復讐をしようとするに違いない」。ユーリイ [S21] は父の言葉にしたがって進軍せず，自分の軍隊を派遣しただけだった。

〔ウラジーミル軍とユーリイの派遣軍は〕こうして進軍すると，ソハチェフ[233] (Сохачев) の城市を占領し，城内の多数の物資，奴隷を捕獲し，投石機は破壊した。こうして，捕虜を獲ると，帰還の途についた[234]。

6791〔1283〕年

**【トゥラ・ブカとノガイはポーランド侵攻を計画したが，仲違いのため別々の遠征になる：1287 年晩秋】**

忌まわしい無法のトゥラ・ブカ【***892***】がポーランド人を攻める遠征を望んで[235]，かれは多くの軍勢を集めた。かれは，先にわれらが証言したように，ハンガリーでかれに対して下された神の懲罰[236] のことを忘れていたのである。そして，〔トゥラ・ブカは〕ノガイのもとにやっ

---

230）「メリニツァ」(Мѣлница) は，ウクライナ語訳索引によれば，西ブーグ川沿岸の現在のポーランドのポドラシェ県ミェルニク村 (Mielnik) にあたり，行軍の中間地点ということになる。ユーリイ [S21] がかりにベレスチエから進軍したとすると，西ブーグ川沿いに北西方向へ 50km ほど進んだところにある。また，そこから西へ 193km ほど進むとソハチェフへ到達する。

231）ユーリイ [S21] は自軍を率いて，おそらく支配拠点地のホルムからメリニツァ (Мѣлница) へ向かったのだろう。

232）レフ [S2] がリトアニア公ヴァイシュヴィルカスをヴラジミルで謀殺したことについては，上注 44 ～ 51 を参照。これは 1267 年のことであり，この時から 20 年も以前の出来事である。

233）「ソハチェフ (Сохачев)」はマゾフシェ公領の城市で，ボレスワフ二世の拠点地だった（上注 184 参照）。

234）このウラジーミル [I1121] とリトアニア人によるソハチェフ攻略について，ポーランド史料では，1286 年に攻められたのはゴスティニン城砦 (castrum Gostinin) で，ポーランド側はマゾフシェ公コンラート二世 (Cunradus Maszowie et Czirnensis) が戦ったとされている [Dlugossi Liber 7/8, 1975: s. 239][Długosz ks.7/8, 1974: S. 301]。しかし，同じ遠征を指していることは疑いはない [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 239, przyp. 1604]。

235）いわゆる「モンゴルの第三次ポーランド侵攻」と呼ばれているもので，ポーランド史料等によると，ハンガリー遠征失敗の二年後の 1287 年に行われた [Грушевський-Хронологія: С. 372 ][Котляр 2005: С. 345]。この時点でトゥラ・ブカは第 8 代のハン位に就いている（上注 200 参照）。ハンガリー遠征と同様に今回もルーシ諸公が動員されており，以下に見るように，本年代記にはその経緯が詳しく記されている。

236）ハンガリー遠征の失敗が「神の懲罰」によることについては上注 225 を参照。

て来た。かれら二人の間には大いなる諍いがあった[237]。

**【トゥラ・ブカはポーランド侵攻の遠征にルーシ諸公を動員する：1287 年晩秋】**

トゥラ・ブカは，ドニエプル川向こうの諸公[238]に使者を遣った。またヴォルィニの〔諸公にも使者を遣った〕。〔すなわち，〕レフ [S2]，ムスチスラフ [S4]，ウラジーミル [I1121] のもとに〔使者を遣った〕。そして，かれらに対して，自分とともに戦争のために進軍するよう命じた。その当時，ルーシの諸公はタタール人の強制のもとにあった[239]。こうして，トゥラ･ブカは，多数の軍勢を集めて，ポーランドを攻めるべく進軍を始めた。

**【ルーシ諸公はトゥラ・ブカの遠征部隊に次々と参加する：1287 年秋～冬】**

かれ〔トゥラ・ブカ〕がゴルィニ川[240] (Горина) の近くまで達すると，ムスチスラフ [S4] が酒と贈物をもってかれ〔トゥラ・ブカ〕を出迎えた。そして，そこから出発して，クレミャネツ[241] (Кремянѣц) を迂回してペレミリ[242] (Перемиль) へと向かった。そしてリパ川[243]で (на Липѣ)，ウラジーミル公 [I1121] が酒と贈物をもってかれ〔トゥラ･ブカ〕を出迎えた。その後，

---

237）トラ・ブカは 1287 年にハン位に就いたが，その後ノガイとの政争が起こり，この時には二人は反目する関係にあった（上注，199，234 を参照）。

238）「ドニエプル川向こうの諸公」(заднѣпрѣисии князи) の語句はすでに使われており（上注 82），ガーリチ＝ヴォルィニ地方から見て川向こう，すなわち，スモレンスク公領やチェルニゴフ公領の諸公を指している。ただし，ここでは具体的にこの地域のどの公がポーランド遠征に動員されたかは不明である。

239）この文言は，1274 年のヤグールチンとレフ公 [S2] による対リトアニア人遠征の叙述の中でも使われている（上注 87 参照）。このような表現の再使用は年代記記者に特徴的な手法である。

240）ゴリナ川 (Горина) は，プリピャチ川支流のゴルィニ川 (Горынь) のことで，その上流まで（チホムリ (Тихомль) 付近？），南東方面からやって来たトゥラ・ブカの遠征軍は到達したのである。ルツク (Луцк) の城市で公支配をしていたムスチスラフ [S4] はかなり先まで南下して出迎えたことになる。

241）「クレミャネツ」(Кремянѣць) は，現在のウクライナ・テルノーピリ州クレメネツ市 (Кременець) に相当し，ティホムリからだと，北西へ 42km ほど進んだ場所にある。1127 年の記事でムスチスラフ公 [J51] の領地として言及されている [ イパーチイ年代記 (10)：300 頁，注 403]。「迂回して」(мимо) というのは，この城砦が高所に位置し堅固であったことからタタール人遠征軍は占拠を諦めたということだろう [Котляр 2005: С.344]。

242）「ペレミリ」(Перемиль) はヴォルィニ地方のストィリ川 (Стырь) 上流左岸の城砦で現在のペレミリ (Перемиль) 市に相当する。クレミャネツから北西方向へ約 49km 離れている。文脈から見て，ここはムスチスラフ [S4] の所領だったのだろう。

243）「リパ川」(Липа) はストィリ川支流で，河口付近に現在のリパ村 (Липа) が位置している。ペレミリ（前注）からは 5km ほど北にあり近い。ヴラジミルからだと，贈物を持って 74km も南東へ出向かなければならず，ウラジーミル公 [I1121] にとっては大きな負担だったはずである。

レフ公 [S2] が酒と贈物をもって，ブジコヴィチ[244] (Бужькович) まで〔トゥラ･ブカを〕追いかけていった。

かれらはブジコヴィチの野 (Бужьковьское поле) に到達すると，自分たちの部隊の観閲を行った。諸公は，自分たちは殺され，〔自分たちの〕城市は占拠されるのではないかと考えていた。

**【トゥラ・ブカのポーランド遠征軍はヴラジミルの近辺を通過し，この地を荒らす：1287 年 12 月】**

そこから，ウラジーミル [I1121] のもとへと進軍し，ジタニ[245] (Житань) で宿営した。トゥラ・ブカはヴラジミルの城市を視察するために馬を進めた。城内に〔トゥラ・ブカが〕足を踏み入れたと言う者たちもいるが，これについては不明である。

〔トゥラ・ブガは〕ニコライの日の翌日の日曜日に城市〔ヴラジミル〕を通り過ぎた[246]。神はその【***893***】御心によって〔諸公を〕救われ，城市〔ヴラジミル〕は占領されなかった[247]。しかし，〔タタール人は〕城内で大いに暴力を振るった。数え切れないほど多くの物資と馬を掠奪したのである[248]。こうして，無法のトゥラ・ブカは，ポーランド人のもとへと向かった。

他のタタール人は，疲馬を養うために〔城市〕ヴラジミルの近くに宿営していた。この者たちはヴラジミルの地を荒廃させていた。〔タタール人はヴラジミルの住民が〕食料調達のために城市〔ヴラジミル〕から出ることをゆるさず，誰かが出ようとすると，これを殺したり，捕獲したり，さらに身ぐるみ剝いだり，馬を取り上げたりした。こうして，神の怒りによって，包囲された諸城市の中では数え切れないほど多数が死んでいった[249]。

---

244）「ブジコヴィチ」(Бужькович) は，現在のヴォルィニ州イヴァニチウ地区ブジコヴィチ村 (Бужковичі) に相当する。ヴラジミルまでは近く，北北西へ 15km で到達することができる。レフ公 [S2] がリヴォフから発ったとすると，100km ほど北上しなければならなかった。

245）「ジタニ」(Житань) は，現在のヴォルィニ州ヴォロディミール＝ヴォルインスキイ区のジタニ村 (Житані) に相当する。ヴラジミルの城市から近く，南東に 8km ほどしか離れていない。

246）1287 年の 12 月 6 日の聖ニコライの記念日（冬のニコライ）は土曜日にあたり，翌日の日曜日は 12 月 7 日である。この年代の検討については [Селезнев 2009: C. 192] も参照。この聖ニコライの加護によって城市占領から免れたというのは，1256/57 年にクルムシ指揮下のタタール軍がルチェスク（ルツク）を攻撃した描写でも述べられている（[ イパーチイ年代記 (12)：167 頁，注 270] 参照）。

247）城市ヴラジミルが「占領」(взяти) されなかったというのは，トゥラ・ブカの遠征部隊が軍事力で城市を破壊し，組織的に捕虜捕獲，破壊，掠奪を行わなかったということ。ウラジーミル [I1121] はトゥラ・ブカと取り決めて自主的に開城したのだろう。

248）「大いに暴力を振るう」(наслье велико) とは，城内に入った一部のタタール人が（次の段落に「他のタタール人」の文言がある），ポーランド遠征のために，城内の物資や馬を勝手に掠奪した事態を指している。

249）包囲戦の兵糧攻めの定型描写で以下でも繰り返されている（下注 253）。

**【トゥラ・ブカ遠征軍はルーシ諸公とともにポーランドに侵入してサンドミェシュを包囲攻撃するが攻め落とせず，周辺地で掠奪を行う：1287 年 12 月後半】**

トゥラ・ブカはポーランド人のもとへと進軍し，かれとともに全ての諸公がタタール人の強制によって進軍した。レフ公 [S2] は自分の息子ユーリイ [S21] とともに，ムスチスラフ [S4] は自分の軍隊とともに，ウラジーミル [I1121] も自分の軍隊とともに〔進軍した〕。

こうして，〔遠征軍は〕ザヴィフヴォスト[250] (Завихвост) へ向けて進軍を始め，ヴィスワ川に到着した。川は氷結していなかったので，これを渡河することはできなかった。そこで，その上流のサンドミェシュ (Судомир) へ向けて出発した。そして，サン川 (Санъ река) の氷上を横断した。そのとき，ウラジーミル [I1121] は，サン〔川〕で転回してかれら〔遠征軍〕から離れ，引き返した[251]。〔遠征軍は〕サンドミェシュ (Судомирь) から上流のところでヴィスワ川を氷上で横断し，城市〔サンドミェシュ〕に対してあらゆる方角から攻撃を仕掛けた。しかし，何も成功しなかった。**【*894*】**そして，〔遠征軍は〕ポーランドの地の掠奪を始め，その地に 10 日間とどまった。

**【トゥラ・ブカ遠征軍はクラクフへ向かうが，ノガイ遠征の報を聴いて転回する：1287 年 12 月 25 日頃】**

トゥラ･ブカはクラクフ[252]への進軍を望んだ。しかし，そこに到達する前に転回してトルジョク[253] (Торжьк) へと向かった。かれ〔トゥラ･ブカ〕のもとに報せが来た。ノガイがかれ〔トゥラ・ブカ〕に先行してクラクフへ向かおうとしているというのである。これについては，二人の間に大きな諍いがあった。

**【トゥラ・ブカは遠征の帰路にレフの支配地を荒廃させる：1288 年 1 月～ 2 月】**

そこで，〔トゥラ･ブカは〕ノガイと出会うことはせず，引き返して，レフ [S2] の地，リヴィウの城市を攻めるようと図った。〔トゥラ・ブカは〕レフ [S2] の地に滞在したが，兵馬を養っただけで掠奪はしなかった。だが，城市〔リヴィウ〕から食料調達のために出ることをゆるさ

---

250）「ザヴィフホスト」(Завихвост) は，ヴィスワ川左岸に位置し，現在のザヴィホスト (Zawichost) に相当し，ヴラジミルから真西に 175km ほど進んだところにある。サンドミエシュまではヴィスワ川を 15km ほど上ったところにある。

251）ウラジーミル [I1121] がサン川で病を得て衰弱した事情については，以下に詳しく述べられている（下注 281 以下参照）。

252）クラクフは，ポーランド大公国の中心地であり，当時はレシェク二世黒公が 1279 年から支配していた。

253）「トルジョク」(Торжьк) は，シフィエントクジスキエ県ポワニツェ区 (Połaniec) のトゥルスコ・マウェ (Tursko Małe) 村に相当する。サンドミェシュからヴィスワ川を 37km ほど遡った河岸（左岸）に位置している。

なかった。誰かが出ようとすると，これを殺したり，捕獲したり，さらに身ぐるみ剝いで裸で解放したりして[254]，寒さで死ぬ者もいた。なぜなら，大変な酷寒の冬だったからである。こうして，〔レフの〕地を完全に荒廃させた。

見よ，これは神がわれらに見せしめを行ったのである。われらの罪ゆえにわれらを罰したのである。われらは自分たちの悪しき無法な行いを悔い改めたが，さらに最後には[255]〔神は〕われらに怒りをもたらし，包囲された諸城市の中で数え切れないほどの多数が死に，無法のハガル人が諸城市から立ち去ったあと出てきた者たちも，村々で窮死した。しかし，われらはもとの話に戻ろう。

**【ノガイは別の遠征路でクラクフへ向かったが，城市を落とせずに引き返す：1278 年末～1288 年 1 月】**

呪われたノガイは，ポーランドへ進軍するときに，トゥラ・ブカと同じ行路を進むことはしなかった。なぜならば，**【*895*】**二人の間には大いなる諍いがあったからである。〔そこでノガイは〕ペレムィシェリ (Перемышль) へ向かう独自の行路をとった。かれ〔ノガイ〕はクラクフの城市にやって来たが，そこでは何もなすことができなかった[256]。トゥラ・ブカのサンドミェシュでの情況と同じだった。

しかし〔ノガイは〕ポーランドの地の掠奪を行った。〔ノガイは〕トゥラ・ブカと出合うことはしなかった。二人はこちらはあちらを，あちらはこちらを〔互いに〕恐れていたからである。こうして，〔ノガイは〕自分の根拠地[257]へと引き返し始めた。トゥラ・ブカは独自の行路で引き返し，ノガイも独自の行路を取った。

**【ポーランドで疫病が大流行する：1287/88 年冬】**

その年の冬，ポーランド人のところでは大いなる疫病が流行った。かれら〔ポーランド人〕

---

254）この文言は直前（上注 248）でも用いられており，『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』の年代記記者に特徴的な表現の再使用の一つである（上注 238 参照）。

255）この「最後には」(на конѣчь) の文言には，年代記記者の終末についての考えが反映している可能性もある。なお，これ以下の記事には，しきりに事件が「神意」によって起こったことが記されており，この個所以降は別の編集者が記事を書いた可能性が高い。

256）ポーランド史料によると，ノガイはキリスト降誕祭前日（1287 年 12 月 23-24 日）にクラクフ城下に接近し，その報を受けたレシェク二世黒公は妃とともにハンガリーへ逃走している [Селезнев 2009: С. 193]。

257）「自分の根拠地」(своя вѣжа) の вѣжа は遊牧民の移動式の幕舎を指しており，ここでは幕舎が集合しているノガイの根拠地のこと。具体的には，ドナウ川河口・下流域を指している（上注 114 参照）。

のうち数え切れないほど多数が死んだ[258]。

**【タタール人遠征によるレフの支配地がこうむった大きな被害について：1288 年】**

トゥラ・ブカとノガイが去った後，レフ公 [S2] はかれの地で，幾人の民が失われたか数え上げた。すなわち，幾人が掠われたり殺され，幾人が神の御心により死んだのかを〔数え上げた〕。それは，1 万 2 千 5 百人だった。

6792〔1284〕年

**【ユーリイの幼少の息子ミハイルが没する：1287 年[259]】**

ユーリイ・リヴォヴィチ公 [S21] のミハイル (Михайло) という名の息子が死んだ。かれは年少だった[260]。すべての人々がかれを悼んで泣き，かれの遺体は布で巻かれ，ホルム (Холм) の聖なる聖母教会に安置された[261]。それ〔教会堂〕はかれ〔ミハイル〕の曾祖父である大いなる公[262] ダニール [I111]，ロマンの息子が創建したものだった[263]。

**【ルーシとポーランドで疫病が蔓延する：1287/88 年冬】**

その年の冬，ルーシ人の間だけでなく，ポーランド人の間でも，神の怒りが疫病として顕れた[264]。

---

258）記事の時系列から見て，タタール勢のポーランド侵攻が起こった年の冬ということで，1287/88 年と考えられる。

259）これは記事の前後関係から推定された年代である。

260）ユーリイ [S21] は 1282 年にトヴェーリ公の娘と結婚していることから（上注 173），その息子のミハイルは 3 ～ 4 歳の「年少」(млад)，すなわちまだ幼児だったことになる [Котляр 2005: C. 346]。

261）ホルムの聖母教会 (церковь святыя Богородица) には，ダニール公自身（[ イパーチイ年代記 (12)：注 421]），その息子シヴァルン [S5]（上注 53）が埋葬されたことが本年代記に記されており，ダニール一族の菩提寺の役割を果たしていたことが分かる。

262）ポーランド語訳注は，このダニール [I111] に対する「大いなる公」(великий князь) の称号に，ダニールを「王」(король) として見ていた（1264 年のかれの死亡記事など [ イパーチイ年代記 (12)：注 422]）年代記記者の視点の変化を読み取っている [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 242, przyp. 1626]。ただ，この「大いなる公」の称号は，本年代記の公の死亡記事における称揚的な表現でもあることから（[ イパーチイ年代記 (12): 注 1, 345, 393] 参照），これによる解釈も可能である。

263）ダニール公によるこの教会の創建については [ イパーチイ年代記 (12)：172 頁，注 292] を参照。なお，この記事からも，当時ホルムが，父レフから引き継いだユーリイの支配地だったこと（上注 174）が確認できる。

264）これは，上述のポーランドでの疫病（上注 257）と同じ事態を指しているだろう。異なる資料を使ったため別に記録されたのではないか。その場合，1287/88 年冬の出来事となる。なお，フルシェフスキイは時期を 1286/87 年の冬と推定している [Грушевський-Хронологія: C.372 ][Котляр 2005: C. 345]。

**【伝染病でタタール人の家畜が死滅する：1287/88 年冬】**

その年の冬，タタール人のもとですべての馬と家畜が死んだ。羊もすべて死んだ。何も残ることはなかった[265]。**【*896*】**

6793〔1285〕年

**【ドイツにおける洪水：1287 年 12 月】**

[266] 次のような知らせが届き始めた。ドイツ人のところで海が溢れて，神の怒りにより地上が浸されて, 6 万人[267] 以上が溺れ, 11 棟の石造りの教会堂と 100 棟のその他の木造〔の教会堂〕が水没した[268]。

**【コンラート二世はレシェク二世黒公の攻撃に反撃して勝利する：1287 年後半～ 1288 年】**

その年，カジミェシュの息子レシェク〔二世〕が，自分の部隊を派遣して，シェモヴィトの息子コンラート公〔二世〕を攻めた[269]。コンラート公は, 自分の従士たちを集めると, かれら〔レシェク勢〕を追いかけ，かれらと戦い，神の助けによってかれらに勝利した。レシェクの部隊では，貴族たちや平の兵士の多くが撃ち殺された。

---

265）この家畜の伝染病は，すぐ上のルーシおよびポーランドでの疫病と別立てになっているが，1287/88 年冬にはルーシとポーランドでトゥラ・ブカの指揮によるタタール人の大遠征があったことから（上注 234 以下参照),「タタール人のもと」はポーランドにおけるタタール遠征部隊を指しているのではないか。

266）フレーブニコフ系写本では，この記事の前に「同じ年の冬,〔新〕年がやって来たとき」(тое же зимы в наставшее лѣто) の文言がある。イパーチイ写本の 6793 年の年記を無視すれば，上記記事と同じ年（1287/88）の冬で，新年（三月式）と考えれば，1288 年 3 月と解釈することができる。前年の 12 月の事件（下注 267）についての情報が，翌年の 3 月にヴラジミルにもたらされたということか。

267）フレーブニコフ写本では，数字がアルファベット表記で «sĭ» となっており [KHW(KR): s. 539]，その場合溺れた数は「1 万 6 千人」と読める。ここでは，イパーチイ写本の読みを採用した。

268）この「ドイツ人のところ」(в нѣмцихъ) の洪水については，ドイツ史料に「この年，一度も聞いたことがないほどの洪水がゼランディア〔デンマークのシェラン島〕，フリシア〔フリースラント〕，ホランディア〔オランダ〕で起こった」(hoc anno tanta aquarum fuit inundatio in Zelandia, Frisia et Hollandia, quamque nunquam audire fuerat) との記録があり，これに対応している [Грушевський-Хронологія: C. 372-373] 。史料によれば，1287 年 12 月 14 日に大洪水が発生しており，5 万から 8 万人が溺死したという。このような詳細な情報が年代記に記されるということは, ヴラジミル＝ヴォルィニ公領が西側と緊密な交通を保っていたことを示しているだろう [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 242, przyp. 1629]。

269）このレシェク二世黒公のマゾフシェ公のコンラート二世討伐遠征（エズドフを攻めた？）は, トゥラ・ブカとノガイのポーランド遠征より以前に行われた可能性が高い。コトリャールは 1287 年春としている [Котляр 2005: C. 346] がこの年の後半の可能性が高い。

〔コンラート公は〕かれ〔レシェク二世〕の軍司令官であるシェラツのマチェイ[270] (Матѣй Серажьский) を殺し，〔敵に捕まっていた〕味方の捕虜を解放した。こうして，〔コンラート公は〕大いなる名誉をもって故郷へ帰還し，三位一体なる父と子と聖霊を誉め讃えた。今もいつも世々に。

6794〔1286〕年

**【リトアニア人とジェマイティア人のリガ進軍：1288 年】**

全土のリトアニア人 (литва) とジェマイティア人 (жемоть) が，ドイツ人を攻めるべくリガへ向けて進軍した[271]。かれら〔ドイツ人〕に報がもたらされて，かれらは〔リガの〕城市の中へ逃げ込んだ。かれら〔リトアニア人とジェマイティア人〕は〔リガの〕城市に到来したが，何もなすことができずに，そこからラトガリ人[272] (лотыгола) を攻めるべく進軍した。そして，〈熊の頭〉の城砦[273] に到達した。しかし，ここでも何もなすことができなかった。こうして故郷へ帰還したが，捕獲した捕虜は少数だった。

---

270）「シェラツのマチェイ」(Матѣй Серажьский) は，シェラツ (Sieradz)（ウッチ県ワルタ河畔の古都）出身の城代 (Kasztelan) および軍司令官 (воевода) でマチェイ (Maciej) のこと。かれについては，ドゥウゴシュの『歴史』の 1288 年の項に，「レシェク黒公がマゾフシェ公コンラートに怒りを発して，シェラツの軍司令官 ( パラチヌム ) マチェイと，タタール人との戦いで損傷の少なかったシェラツの地の騎士たちを派遣した」(Lestko Niger dux iras suas in Cunradum Mazowie ducem satagens explere, pallatinum Siradiensem Matheum et terre Siradiensis tantummodo milites, qui minus vastacionis a Thartaris pertulerant）と記されている [Dlugossi Liber 7/8, 1975: s. 249]。史料では，かれについては 1287 年 12 月にこの城代の職名として記されており，1288 年 6 月 25 日に戦死している [IPSB: Maciej]。

271）この時代，ジェマイティア（サモギティア）の地は，北に接するドイツ（リヴォニア）騎士団と恒常的な勢力争いの場になっていた。年代は記事の時系列から判断して 1288 年と推定される。コトリャールは 1287 年と比定している [Котляр 2005: С. 346]。

272）「ラトガリ人」(лотыгола：ラテン語 Latgola) は，現在のラトヴィアのダウガワ川右岸（北岸）（現在のヴィドゼメ地方とラトガリ地方に相当）に居住していたバルト＝ラトヴィア系で，ラトヴィア人（旧名レット人）の基幹をなした民族。当時のラトガリ人はすでにドイツ騎士団の支配下に置かれて従属していた。

273）「熊の頭」(Медвежа Глава) と称する城砦とは，現在のエストニアのタルトゥーの南南西約 40km にあるオテパー (Otepää) のことで，フィン系の地名「オデンペ」(Odenpäh) をスラブ語に翻訳借用したもの。リガからは北東方向へ 190km ほど離れている。1116 年の項ではバルト・フィン系チュヂ人（エスト人）の拠点の城砦として記されているが（[ イパーチイ年代記 (1)：261 頁，注 96] 参照）。1217 年のドイツ人，ラトガリ人連合軍とエスト人，ルーシ人連合との南エストニアのサッカリア地方での戦い（「聖マタイの日の戦い」）に前者が勝利したことによって，この地はラトガリ人勢力圏となっていた [ 山内 1997 年：131-134 頁 ]。

**【ドイツ騎士団軍は反撃してジェマイティアを掠奪する：1288 年】**

トルンのドイツ人[274]は，ジェマイティア人が総勢でリガを攻めるために進軍したことを聴いて，ジェマイティア人を攻めて，**【*897*】**仲間のドイツ人を助けるべく軍を進めた。そして，かれら〔ジェマイティア人〕を数え切れないほど多数捕獲し，他の者は撃ち殺した。こうして，多数の捕虜とともに故郷へ帰った。

**【ポーランド大公レシェク二世黒公の死：1288 年 9 月 30 日】**

この年に，クラクフの大いなる公レシェク，カジミェシュの息子が逝去した[275]。司教，修道院長，司祭，助祭たちがかれの遺体に布を巻き，通常の歌[276]を歌った。こうして，かれの遺体は城市クラクフの聖三位一体教会[277]に安置された。すべての人々，貴族，庶民が大いに哀泣してかれ〔の死を〕悲しんだ。

6795〔1287〕年

**【トゥラ・ブカとアルグイおよびルーシ諸公のポーランド侵攻：1287 年冬～ 1288 年】**

[278]神はわれらを〔罰するための〕自らの剣を送った。それ〔剣〕は，われらの罪が増したことに対する〔神〕自らの怒りに仕えているのである。

---

274）「トルンのドイツ人」（труньцѣи нѣмцѣ）の「トルン」は現在のポーランド中北部，クヤヴィ＝ポモージェ県の県都トルン（Toruń）のこと。「ドイツ人」はドイツ騎士団の軍団を指し，当時トルンは，ドイツ騎士団の勢力範囲の西南のポーランド（クヤヴィ公領）と接する境界に位置していた。ドイツ騎士団領は，ジェマイティア（サモギティア）と北東の境界で接しており，ジェマイティア人がリガ方面（リヴォニア騎士団領）に出払って手薄になったかれらの領地に対して，掠奪遠征を行ったのである。なお，記事の時系列から判断すると 1288 年の出来事と考えられる。

275）レシェク二世（黒公）は，1288 年の 9 月 30 日にクラクフで病死している [Котляр 2005: C.347] [IPSB: Leszek Czarny] 。かれはノガイのクラクフ攻撃によって一旦はハンガリーへ逃れたが（1287 年 12 月）（上注 255），その後（1288 年前半）クラクフに戻ってすぐのことである。なお，次に再びトゥラ・ブカによるポーランド侵攻（1287 年冬～ 1288 年）が語られるので，時系列としては一見反対に見えるが，次の記事は 1288 年 12 月に死没するウラジーミル [I1121] の死の物語として一括して考えれば，時系列の整合も取れている。

276）「通常の歌」(обычные песни) とは，正教の斎 (пост) 期間に葬儀を行う場合には，葬礼の聖体礼儀の聖歌が「地味」な形式（つまり通常の）で唱われるという当時の慣例を指しているという説がある [Цыб 2010: C. 34]。ただし，1288 年の 9 月 30 日は斎の期間ではないことから，年代記記者がこの一連の描写を他の葬礼の記事から定型として流用した可能性もある。

277）「三位一体教会」は，1223 年にクラクフの城内にドミニコ会によって建設された教会で，今もストラルスカ通り (ul. Stolarska) に教会堂 (Kościół Świętej Trójcy) が現存している。

278）ここに，フレーブニコフ写本では「冬が来て」(Наставши ж зѣмѣ) の文言が付されている。

トゥラ・ブカとアルグイ[279] (Алгуи) は大軍をもって進軍していた[280]。かれらにはルーシ諸公であるレフ [S2]，ムスチスラフ [S4]，ウラジーミル [I1121]，ユーリイ・リヴォヴィッチ [S21] および他の諸公がともにいた。当時, ルーシのすべての諸公はタタール人の意志に従っており，神の怒りに服していたからである。このようにして全員が一緒に進軍した。

ウラジーミル公 [I1121] は病気だった。神によって癒えざる傷がかれに送られたからである[281]。かれら〔ルーシ諸公〕はポーランド人のもとに進軍し, サン (Санъ) と呼ばれる川まで到達したとき[282]，ウラジーミル [I1121] 公は衰弱して自分の身体がすくみ，自分の兄弟の【*898*】ムスチスラフ [S4] に使者を遣って[283]，こう言った。「兄弟よ，見よ，わしは衰弱して何もできない。わしには子供はいない[284]。わしは，自分の死後に，自分の兄弟であるそなたに自分のすべての土地と諸城市を与えよう[285]。見よ, 皇帝〔ハン〕とその側近たちのいる場[286] においてこ

---

279）「アルグイ」(Алгуи) は (1291 年没 ) は，第 6 代宗主（ハン）モンケ・テムル（上注 80 参照）の長男。1287 年にトゥラ・ブカと共謀してその叔父の第 7 代宗主（ハン）トデ・モンケを廃位してトゥラ・ブカをハン位に就け，その後はかれと同盟関係にあった。1291 年には，トゥラ・ブカのハン位をおびやかす兄弟のトクタおよびノガイの排除をはかるが，トクタと協力していたノガイによってかえって返り討ちにあい，トゥラ・ブカとともに謀殺された [Селезнев 2009: C. 32-33]。

280）このタタール勢のポーランドへの進軍は, 上記の「モンゴルの第三次ポーランド侵攻」（上注 234 以下）と同じ事態を指している。ただし，上ではアルグイの参加については述べられていなかった。ここでは「ウラジーミル公 [I1121] の死の物語」に関連付けて述べられているため，先の記述とは別に記されたのだろう。このように同じ事態を 2 個所で別々に記すことについては，上注 263 を参照。

281）旧約『エレミヤ書』30:15 の句を借用した表現。

282）サン川でウラジーミル [I1121] が戦列を離れたことについては，上の記述でも述べられている（上注 250 を参照）。

283）以下の親族であるルーシ諸公の間のやり取りは使者を通じて行われているが，これはおそらく公族儀礼にもとづくもので，かれらはタタール人に動員されて，同じ陣営内に身を置いており，そこでの出来事である。

284）ウラジーミルに子供がいないが, 養子にしたイジャスラヴァという女児がいたことは以下にも言及されている（下注 307）。なお，中世ロシアの公族には養子を嫡子とする習慣は全くなかった。

285）そのウラジーミルが死後の財産を，ダニールの長男のレフではなく，その弟のムスチスラフに与えようとしたのは，後の記述で，レフ親子の「傲慢さゆえ」(за гордость) と説明している（下注 302）。

なお，嫡子がいない公族の遺産の移譲について，年代記が詳しく記しているのは，公族の相続慣習では，その時点の年長者, すなわちこの場合には, レフに権利があることになっていたことに原因があるだろう。つまり，ウラジーミルはレフに遺産を渡さないために，このような積極的な行動を起こしたことになる。

286）「皇帝とその側近たちいる場」(при царихъ и при его рядьцахъ) とは，公同士が約定を結ぶ時に，ルーシ諸公にとっては宗主であるハンやその代理人の立ち会いが，その実効性を保証する手段と見なされていたということ。ウラジーミルはタタール勢の陣営に諸公が加わっているという情況を，みずからの遺言の執行の保証に利用したのである（[Котляр 2005: C.347-348] 参照）。なお，ここでは公文書の文言として，「皇帝」は複数形になっているが，具体的には，ジョチ・ウルス第 8 代宗主（ハン）のトゥラ・ブカ（上注 200）を指している。

れを与える」。ムスチスラフ [S4] は，自分の兄弟のウラジーミル [I1121] の前に叩頭した[287]。

そして，ウラジーミル [I1121] は，自分の兄弟のレフ [S2] と従甥のユーリイ [S21] に使者を遣って，次の言葉〔を言った〕。「見よ，わしはそなたたち二人に伝える。わしは，自分の兄弟ムスチスラフ [S4] に自分の土地と諸城市を与えた」。

レフ [S2] はウラジーミル [I1121] に〔使者を通じて〕言った。「そなたは，わしに〔土地や城市を〕与えたほうがはるかに良い。そなたの死後に，ドイツ人の〔ものとなった土地や城市を〕要求する[288] ことになってもよいのか。われらはすべて神の御心のままに歩んでいるのである。どうか，今この時にも，神がわしのものを領有できるようになし給え」。

その後，ムスチスラフ [S4] は，兄弟のレフ [S2] と自分の甥〔のユーリイ [S21]〕に使者を遣って，こう言った。「わが兄弟よ，見よ。ウラジーミル [I1121] はわしに自分の全ての土地と諸城市を与えた。そなたは，なにを望むというのか。わが兄弟でそなた自身の〔兄弟であるウラジーミル〕の死後に，〔そなたは〕何を要求[289] しようというのか。さあ，そなたが皇帝の〔裁定が必要〕なら，皇帝〔トゥラ・ブカ＝ハン〕もここにいれば，わしもここにいる。そこで，わしとともに，そなたが何を望むのか〔皇帝に〕言うがよい」。レフ [S2] はこの言葉に対して何も言わなかった。

**【ウラジーミルはヴラジミルに戻り，さらにリュボムリ，カメネツへ避難する：1288 年】**

その後，トゥラ・ブカがポーランド人のもとへ進軍した。アルグイはかれ〔トゥラ・ブカ〕とともにおり，すべての諸公も〔ともにいた〕。ただ，ウラジーミル [I1121] は引き返した。**【*899*】** なぜならば，かれの病状を見ていると，気の毒でかれを直視できないほどだったから。ウラジーミル [I1121] は〔ヴラジミルへ〕帰ってきた。人々は自分たちの主人が健勝で帰ってきた[290] のを見て，みなが喜んだ。〔ウラジーミル [I1121]〕はヴラジミルにほんの数日の間滞在してから，

---

287）この「叩頭」(ударити челом) は，公族の間での上下関係を確認するための儀礼で，拝礼 (поклонитися) に比べて，とくに重要な場合に行われる [Накадзава 2016]。ムスチスラフ [S4] がウラジーミル [I1121] に対して，「土地と城市」の遺贈と引き換えに，様々な義務を約束したと思われる。なおここでは，ムスチスラフは実際にウラジーミルの前に出頭して「叩頭」の儀式を行ったのだろう。

288）ここは，イパーチイ写本の読みは混乱しており読解が難しい。フレーブニコフ系写本は，мнѣ подъ нѣмьцѣ искати となっており，こちらの読みを採用した。ウラジーミル＝ヴォルィニ公領をムスチスラフのような「弱小」の公に与えると，たちまちドイツ騎士団勢に占領されてしまう，ということを示唆した発言ではないか。

289）この「要求」(искати) の語は裁判や裁定において自分の権利などを主張することを指している。

290）「健勝で」(во здоровьи) は実態を示すものではなく，遠征からの帰還を描写する定型表現と解釈すべきだろう。

自分の公妃と貴族たちにこう言い始めた。「わしはリュボムリ[291] (Любомль) まで行きたい[292]。なぜなら，わしは異教徒たちと関わりたくない[293] からだ。わしは病気の人間である。わしはかれら〔異教徒たちと〕報告をやり取りすることができない。かれらはわしを骨の髄まで打ちのめした[294]。見よ，わしのかわりに主教のマルク[295] (Марк) が〔ヴラジミルに残る〕。

そして，〔ウラジーミルは〕公妃および自分の屋敷付きの配下の者たちともにリュボムリへ向けて出発した。リュボムリからベレスチエ (Берестье) へ向けて出発した[296]。ベレスチエで 2 日間滞在すると，カメネツ[297] (Каменец) へ向けて出発した。そこで，自分の病気のために伏せたままになり，公妃と自分の配下の者たちにこう言った。「異教徒が〔わしの〕地を通り過ぎたらすぐに，われらはリュボムリへ戻ろう[298]」。

**【ウラジーミルは配下の者からタタール遠征軍に従軍した諸公の消息を知る：1288 年】**

数日が経ったとき，かれ〔ウラジーミル [I1121]〕の配下の者たちがかれのいるカメネツ (Каменѣч) へやって来た。かれらは，タタール人とともにポーランドで戦争をしていた。ウラ

---

291）「リュボムリ」(Любомль) は，現在のウクライナ，ヴォルィニ州リュボームリ (Любомль) 市に相当し，市の中心部に城砦の遺構がある。ヴラジミルからだと 47km ほど北北西へ行った地点になる。

292）ウラジーミルが数日でヴラジミルを発ったのは，ポーランド遠征の成果が得られなかったタタール遠征軍（「異教徒ども」(поганные)）が帰路において，富裕なヴラジミルの城市を掠奪することを恐れて病身をおして避難したのである。タタール勢の動きについての情報がなかったため急いだのだろう。なお，タタール勢が往路でヴラジミルを掠奪する恐れがあったことについては，上注 246 を参照。

293）「わしは異教徒たちと関わりたくない」(дѣла мь с погаными нет) はフレーブニコフ写本の読み。イパーチイ写本の読み досадила ми погань си（この異教徒がわしを怒らせた）は後代の加筆が入っているため，こちらを採用した。「関わり」(дѣло) とはタタール軍に従軍したり，支援したりすることを指している。

294）「すでにわしを骨の髄まで打ちのめした」の原文は прояли мь уже и на печенехъ で直訳すると「すでに肝臓まで突き刺した」となる。諺をふまえた修辞的な表現だろう。

295）以下の記述にウラジーミルの使者として交渉にあたっている「ヴラジミル主教エフシグニイ (Евсигний)」が言及されており，その果たしている重要な政治的役割から見てこの「マルク」と同一人物を指していると考えるべきではないか。この「マルク」(Марк) の名前は何らかの誤記によるものではないか。なお，A・カルポフは，マルクの在任期間は短く，後任がエフシグニイだったという解釈を行っている [Карпов 2017: С. 275]。

296）リュボムリからベレスチエ（現在のブレスト）までは北へ 99km ほど進まなければならない。

297）「カメネツ」(Каменец) は，ヴラジミル自身が 1270 年代の半ばにベレスチエの向こうに建設した城市（上注 107）。ベレスチエからさらに北へ 40km ほど行ったところにある。上注 107 ～ 113 を参照。ヴォルィニ公領の北辺に位置し，タタール勢からの難を避けるには好適地だった [Kronika halicko-wołyńska 2017: s. 245, przyp.1649]。

298）以下に見るような，ヴラジミル⇒リュボムリ⇒ベレスチエ⇒カメネツ⇒ライを行程とした，公妃と少数の従者たちを伴った逃避行は，病身のウラジーミルにとっては困難な旅行だったはずであり，タタール勢がヴォルィニ地方から去って，掠奪の恐れがなくなる時機を待っていたのである。

ジーミル [I1121] は，トゥラ・ブカについて，「かれはポーランドの地からもう出たのか」と，かれら〔配下の者たち〕に訊いた。かれらは「出ました」と告げた。〔ウラジーミルは訊いた〕「わしの兄弟レフ [S2] とムスチスラフ [S4] とわしの甥〔ユーリイ [S21]〕は，健勝であるか」。かれらは告げた。「ご主人様, 全員が順調で健勝です。〔諸公の〕貴族やその配下の者たちも〔同様です〕」。ウラジーミル [I1121]【***900***】はそのことについて神を讃美した。

**【ウラジーミルは，ムスチスラフが自分の領地を自由にしていることを知り憤慨する：1288 年】**

〔配下の者たちは〕ムスチスラフ [S4] についてこう告げた。「〔ムスチスラフ [S4] は〕トゥラ・ブカとともにリヴォフを攻めに向かいました[299]」。そのとき，〔配下の者たちは〕告げた。「あなたの兄弟〔ムスチスラフ〕はフセヴォロジ[300] (Всеволожь) の城市を〔自分の〕貴族たちに与え，〔その周辺の〕村々を〔貴族たちに〕分け与えています」。

ウラジーミル [I1121] の，自分の兄弟〔ムスチスラフ [S4]〕に対する不満[301] は大きくなり，こう言い始めた。「見よ, わしは病気で伏せっている。ところが, わしの兄弟〔ムスチスラフ [S4]〕はわしの病気をさらに重くしようとしている。わしはまだ生きているというのに，かれ〔ムスチスラフ〕はわしの城市と村を分け与えているのだ。わしの死後に分け与えるべきであるのに」。

**【ウラジーミルはムスチスラフに抗議する：1288 年】**

そして，ウラジーミル [I1121] は自分の使者に〔次のような〕抗議の言葉を持たせて，自分の兄弟ムスチスラフのもとへ派遣した。「兄弟よ，そなたは軍を仕立てて[302] わしからなにかを奪取したことはない。槍によってわしから取り上げたことはない。わしを攻めにやって来て，戦争によってわしの城市からわしを追い出したこともない。〔それなのに〕このようなことをわしに対して行った。そなたはわしの兄弟である。他にレフ [S2] もわしの兄弟である。ユーリイ [S21] はわしの甥である。これらのそなたたち三人のなかから, わしはそなた一人を選んで,

---

299）トゥラ・ブカ指揮下のタタール遠征部隊が，ポーランドからの帰路にレフ [S2] の領地の掠奪を策したことについては上注 253 を参照。ウラジーミルの領地遺贈問題をめぐってレフとの関係が悪化していたムスチスラフ [S4] は，この計画と行動に自ら加わったのだろう。

300）「フセヴォロジ」(Всеволожь) は，ヴォルィニ公領の城砦のひとつで，現在のウクライナ，リヴィウ州スタルゴロド村 (Старгород) のブーグ川対岸，ザスタヴネ保護区 (Заставненський заказник) に遺構がある。ムスチスラフの所領（ルチェスク地方）に接していたこともあり, ムスチスラフはウラジーミルの死を待たずに，この地の所有権を行使したのである。

301）「不満」(нелюбье) の語は，それまで「満足・円満」(любовь)，すなわち味方や同盟の関係にあったものが否定された状態を指している。

302）「軍を仕立てて」は，イパーチイ写本では на полону（捕虜になって）となっているが，文脈に整合しないため，フレーブニコフ系写本の読み на полку を採用した。

わしの死後に，自分の全ての土地と城市をそなたに与えることにしたのだ。わしの生きている間は〔この件で〕いかなる行動もおこすな。わしがこのことを決めたのは，わしの兄弟〔レフ [S2]〕と甥〔ユーリイ [S21]〕の傲慢さゆえ[303]であり，〔それゆえに〕わしはそなたに自分の地を与えたのだ」。

**【ムスチスラフは使者を遣って弁明し，服従を誓う：1288 年】**

ムスチスラフ [S4] は〔使者に〕自分の兄弟〔ウラジーミル [I1121]〕に対して，こう言わせた。「主人よ[304]，兄弟よ，〔懸案の〕土地は神のものであり，あなたのものです。城市もあなたのものです。わたしはそれらを**【*901*】**自由にすることはできません。わたしはあなたの御意のままです。どうか，神が，わたしにとって終生，あなたが自分の父のようであり，わたしがすべての正義をもってあなたに仕えることができますように。主人よ，あなたが健勝でありますように。わたしはあなたに大きな期待をかけています」。

かれ〔ムスチスラフ〕の使者はカメネツ (Каменець) のウラジーミル [I1121] のもとにやって来て，ムスチスラフの言葉を告げた。ウラジーミル [I1121] にとってその言葉は満足[305]のいくものだった。

**【ウラジーミルは約定を結ぶためにムスチスラフを呼び寄せる：1288 年】**

その後，〔ウラジーミル [I1121] は〕カメネツからライ[306] (Рай) へと出発した。そこ〔ライ〕に滞在していたとき，かれ〔ウラジーミル〕は自分の公妃にこう言い始めた。「わしは自分の

---

303）ウラジーミルが所領をムスチスラフに遺贈したことについては上注 284 を参照。

304）ムスチスラフはウラジーミルに「叩頭」をしており（上注 286），これによって，主従関係が定まったことから，ウラジーミルに対して「主人よ」(господине) と呼びかけている。

305）これまでウラジーミルはムスチスラフに「不満」(нелюбие) であったが（上注 300），その状態が解消されて「満足した」(люба бысть) ということ。

306）「ライ」(Рай) は，ウラジーミルの離宮（屋敷）があった場所で，この地名の語源は，地名語源辞典によればリトアニア語の raistas（沼地・荒地）と共通の語幹からと推定される [Етимологічний словник 1985: C. 114]。ウクライナ語訳索引は第一に，現在のヴォルィニ州ロジシチェンスキイ区ライミスト村 (Раймісто) に比定しているが，この場合，ヴラジミルから東北東へ 50km ほど離れる。索引は別説として，プリピャチ川上流左岸のヤレヴィシチェ村 (Яревище) に比定する説を紹介しており，地名語源辞典も同様で，18 世紀に改名されるまでは，ライモヴィシチェ (Раймовище) の地名だったと説明している。コトリャールの校訂テキストに付された地図も，この場所に同定している [Котляр 2005: C. 350]。こちらはリュボムリから北へ約 38km，ヴラジミルから北へ約 76km の距離になり，ウラジーミルのカメネツ⇒ライ⇒リュボムリ⇒ヴラジミルの帰路に合理的に合致しており，後者のほうが可能性は高いだろう。

いずれにせよ，ウラジーミルはおそらくタタール遠征軍のヴラジミル地方への掠奪はないと確信したのだろう，退避していたカメネツからウラジーミルに戻ろうとして，その途中でこの「ライ」に滞在したのである。

兄弟であるムスチスラフ [S4] を呼び寄せるための〔使者を〕遣ろう。かれと土地について，城市について，わが愛しい公妃オリガよ[307]，そなた〔の行く末〕ついて，わが愛するわたしたちの実の娘としてのこのイジャスラヴァ[308] (Изяслава) について，約定を交わしたほうがよいだろう。神はわしの罪ゆえに，わしに自分自身の〔子供を〕授けてはくれなかったが，この〔娘は〕まさにわが公妃から生まれた者のようだ。わしは，この〔娘を〕その母親から襁褓にくるまれたまま受け取り，育てたのだから」。

そして，〔ウラジーミル [I1121] は〕兄弟〔ムスチスラフ [S4]〕のもとに自分のヴラジミル主教エフシグニイ (Евьсѣгньи) を派遣した。かれと一緒に，ボルコ (Бороко) とオロヴァネツ (Оловянец) を派遣して[309]，次のようなかれ〔ムスチスラフ [S4]〕に対する言葉を託した。「兄弟よ，わしのもとに来たれ。すべてのことについて，そなたと約定を結びたい」。

**【ムスチスラフは自らウラジーミルのもとに来てあらためて弁明する：1288 年】**

ムスチスラフ [S4] は，ライ (Рай) のかれ〔ウラジーミル [I1121]〕のもとへやって来た。自分の貴族たち，配下の者たちと一緒であり，一同にはヴラジミル主教〔エフシグニイ〕，ボルコとオロヴァネツも同行していた。

ムスチスラフ [S4] は屋敷付きの宿舎に落ち着いた。かれ〔ムスチスラフ〕の配下の者たちが，ウラジーミル [I1121] に「あなたの兄弟が到着しました」と知らせた。かれ〔ウラジーミル〕は病気で**【*902*】**で伏せっていたが，兄弟〔ムスチスラフ〕の到来の〔報を〕聞くと立ち上がって，〔椅子に〕座し，兄弟〔ムスチスラフ〕を呼ぶ使いを遣った。かれ〔ムスチスラフ〕はかれ〔ウラジーミル〕のもとにやって来て，かれに拝礼をした。ウラジーミル [I1121] は，トゥラ・ブカについて，ポーランド人のところでかれはどんなことを為したのか，どこへ行ったのか，かれがポーランドから去ったことについて，かれ〔ムスチスラフ〕に質問をした。かれ〔ムスチスラフ〕はかれに〔ウラジーミル〕にすべて起こったことを順番に証言した。〔ムスチスラフは〕それ以外にも多くのことをかれ〔ウラジーミル〕とともに語り合った。

---

307）「わが愛しい公妃オリガよ」(княгини моа мила Олго) の呼格表現のような夫婦間の親密さを示す公の言葉が引用されるのは，この記事の記者（もしくは情報提供者）がウラジーミルの近くに居たことを示している。

308）「この子供のイジャスラヴァ」(о семь дѣтяти, о Изяславѣ) は，以下のウラジーミルの言葉にあるように，子供のないウラジーミル公夫婦が育てた養子の女児。

309） 原文は <посла...> с нимъ Борка же Оловянца で，「ボルコ・オロヴァネツ」（Борк/Борко Оловянец）すなわち，ボルク（もしくはボルコ）が名でオロヴァネツ (Оловянец) が姓の一人の人物である可能性もあるが，オロヴァネツについては 1282 年の記事で言及されており（上注 214），また，これに続いてこの名が言及される二個所では接続詞 и で結ばれていることから，「ボルコとオロヴァネツ」と二人として解釈した。いずれにせよ，かれらはウラジーミル配下の上級貴族（ボヤーレ）である。

**【ウラジーミルは約定締結を提案し，ムスチスラフは同意する：1288 年】**

ムスチスラフ [S4] は宿舎へと向かった。ウラジーミル [I1121] はかれ〔ムスチスラフ〕のもとに, 自分の主教〔エフシグニイ〕をボルコとオロヴァネツとともに派遣して, こう言わせた。「わが兄弟よ，わしがそなたを呼び出したのは，そなたと土地について，城市について，わが公妃について，この子供について約定を結びたいと思ったからだ。わしは文書を書くことを望む」。

ムスチスラフ [S4] は自分の兄弟〔ウラジーミル〕の主教〔エフシグニイ〕に言った。「〔ウラジーミルに〕こう言え。『主人よ，わが兄弟よ，わたしはいったい，あなた死後にあなたの地を〔自分から〕要求しようとなど思ってもいませんでした。そのことはわたしの心の中にはありもしませんでした。〔そのことは〕あなたが, ポーランドにいたときにわたしに言ったことなのです。それは，わたしがトゥラ・ブカとアルグイとともにいた時のことです。そこには，わたしの兄弟のレフ [S2] もわたしの甥のユーリイ [S21] もいました。わたしの主人であり，わたしの兄弟であるあなたは，〔そのときに〕わたしに使者を遣って〈ムスチスラフ [S4] よ，わしは自分の死後に，自分の全ての地と城市をそなたに与える〉[310] と言ったのです』」。

〔さらに〕ムスチスラフ [S4] は, 自分の兄弟〔ウラジーミル〕の主教〔エフシグニイ〕に言った。「兄弟〔ウラジーミル〕にこう言え。『主人よ，どうかあなたが神に愛されますように。もし，文書を書くことをお望みなら，神の意志のまま，あなたの御心のままです』」。

主教〔エフシグニイ〕はムスチスラフ [S4] のもとから戻ってくると，兄弟〔ムスチスラフ [S4]〕の言葉を〔ウラジーミルに〕報告した。**【*903*】** ウラジーミル [I1121] は自分の書記官のフェドレツ [311] (Федорец) に命じて〔次の〕文書を書かせた。

---

310）上注 284 のウラジーミル [I1121] の言葉を参照。

311）「フェドレツ」(*Ип*. Федорец; *Хлб*. Ходорьць) という書記 (писець) について, フルシェフスキイは, 遺言文書の中に言及されている，ウラジーミル配下のおそらく貴族である Давыдович Фодорок と同一人物と考えている。そして，この人物は，遺言を書記として書き取っただけでなく，その描写の具体性などを根拠にウラジーミルの病気と死に関わる物語全体の作者であると推定している [Грушевський ІУЛ-3: С. 183-184]。ただし，コトリャールはこの説を名前の類似だけが根拠であるとして，別人だと考えている [Котляр 2005: С.351]。みずから卑称 (Федорец) を用いていること，遺言が書かれた時が自分の守護聖人であるテオドロスの週 (Федорва неделя) であることをことさらに記していることなどから，フルシェフスキイの説は説得力があるのではないか。

## 参考文献

Антипов 2000 — Антипов И. В. Древнерусская архитектура второй половины XIII - первой трети XIV в. Каталог памятников. СПб., 2000.

Василик 2013 — Василик В. В. Эсхатологические представления в Галицко-Волынской летописи // Русин. 2013. № 1(31). С. 136–148

Войтович 2006 — Войтович Л. В. Княжа доба: Портрели еліти. Біла Церква, 2006.

Войтович 2012 — Войтович Л. В. Князь Лев Данилович. Львів, 2012.

Грушевський-Хронологія — Грушевський М. С. Хронологія подій Галицько-Волинської літописі // Грушевський, Михайло Сергійович. Твори: у 50 т. Львів, 2005. Т. 7., С. 327 - 387.

Грушевський ІУЛ-3 — Грушевський М. С. Історія української літератури: В 6 т. Т. 3. Київ, 1993.

Етимологічний словник 1985 — Етимологічний словник літописних географічних назв Південної Русі / Відп. ред. О.С.Стрижак. — К.: «Наукова думка», 1985

Загорульский 2001 — Загорульский Э. М. Археология Беларуси. Минск. 2001.

Карпов 2017 — Карпов А. Ю. Русская церковь X – XIII вв. Биографический словарь. М., 2017.

Котляр 2005 — Галицко-Волынская летопись: Текст. Комментарий. Исследование / сост. Н.Ф. Котляр, В. Ю. Франчук, А. Г. Плахонин. под ред. Н.Ф. Котляра. СПб., 2005.

Куза 1996 — Куза А. В. Древнерусские городища X–XIII вв. Свод археологических памятников. М., 1996.

Накадзава 2016 — Накадзава А. К проблеме происхожденя и эволюдции этикетных формул "поклон" и "челобитье" в Древней Руси // Труды Отдела древнерусской литературы. Т. 64, СПб., 2016, С. 653–677.

Пашуто 2011 — Пашуто В. Т. Русь. Прибалтика. Папство(Древнейшие государства Восточной Европы 2008), М., 2011.

ПСРЛ Т.7, 2001 — Летопись по Воскресенскому списку.(Полное собрание русских летописей. Том VII) М., 2001.

ПСРЛ Т. 18, 1913 — Симеоновская летопись(Полное собрание русских летописей. Том XVIII). СПб. 1913.

ПСРЛ Т.40, 2003 — Полное собрание русских летописей: Том 40. Густынская летопись. СПб., 2003.

Селезнев 2009 — Селезнев Ю. В. Элита Золотой Орды. Казань, 2009.

Святский 2007 — Святский Д.О. Астрономия Древней Руси. М., 2007.

Удавичюс 2005 — Эдвардас Удавиюс. История Литвы с древнейших времен до 1569 года. М., 2005.

Хроника Быховца 1966 — Хроника Быховца. / Предисл., коммент. и пер. Н.Н. Улащика. М., 1966.

Цыб 2010 — Цыб С. Когда Владимир Мономах стал киевским князем? // RUTHENICA T. IX, 2010. С. 23-36.

Dlugossi Liber 7/8, 1975 — Ioannis Dlugossi Annales seu Cronicae incliti Regni Poloniae. Liber 7/8. Varsaviae, 1975.

Długosz ks.7/8, 1974 — Jan Długosz, Roczniki czyli Kroniki sławnego Królestwa Polskiego, ks. 7/8, 1242–1299. Warszawa, 1974.

Dąbrowski 2002 — Dąbrowski, Dariusz. Rodowód Romanowiczów książąt halicko-wołyńskich. Poznań-Wrocław, 2002.

IPSB — IPSB(INTERNETOWY POLSKI SŁOWNIK BIOGRAFICZNY) http://ipsb.nina.gov.pl/Home

Jackson 2005 — Peter Jackson The Mongols and the West, 1221 – 1410. Harlow: Pearson Longman, 2005.

Jusupović 2016 — Adrian Jusupović Elity ziemi halickiej i wołyńskiej w czasach Romanowiczów(1205-1269). Kraków, 2016.

KHW(KR) — Kronika halicko-wołyńska(Kronika Romanowiczów), wydali, wstępem i przypisami opatrzyli Dariusz Dąbrowski, Adrian Jusupović przy współpracy Iriny Juriejew, Aleksandra Majorowa i Tatiany Wiłkuł [w:] Pomniki Dziejowe Polski, Seria II - Tom XVI. Kraków-Warszawa, 2017.

Kronika halicko-wołyńska 2017 — Dariusz Dąbrowski, Adrian Jusupović Kronika halicko-wołyńska. Kroniką Romanowiczów. Avalon Kraków-Warszawa, 2017.

MGH. SS. 1866. T. 19 — Monumenta Germaniae Historica Scriptores in Folio(SS) Tomus 19: Annales aevi Suevici. 1866.

Perfecky 1973 — Perfecky, George A. The Galician-Volynian Chronicle. Munich: Wilhelm Fink Verlag, 1973.

イパーチイ年代記 (1) — 中沢敦夫「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (1) —『原初年代記』への追加記事（1110 ～ 1117 年）」『富山大学人文学部紀要』（61 号，2014 年 8 月）

イパーチイ年代記 (7) — 中沢敦夫，吉田俊則，藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (7)『キエフ年代記集成』（1172 ～ 1180 年）」『富山大学人文学部紀要』（67 号，2017 年 8 月）169 ～ 268 頁。

イパーチイ年代記 (8) — 中沢敦夫，吉田俊則，藤田英実香「『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (8)『キエフ年代記集成』（1181 ～ 1195 年）」『富山大学人文学部紀要』（68 号，2018 年 2 月）。

イパーチイ年代記 (10) — 中沢敦夫, 今村栄一『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (10) —『ガーリチ･ヴォルィニ年代記』（1201 ～ 1229 年）『富山大学人文学部紀要』（70 号，2019 年 2 月）。

イパーチイ年代記 (11) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (11) —『ガーリチ･ヴォルィニ年代記』（1230 ～ 1250 年）『富山大学人文学部紀要』（71 号，2019 年 8 月）。

イパーチイ年代記 (12) — 中沢敦夫, 宮野裕, 今村栄一『イパーチイ年代記』翻訳と注釈 (12) —『ガーリチ･ヴォルィニ年代記』（1251 ～ 1264 年）『富山大学人文学部紀要』（72 号，2020 年 2 月）。

杉山 1996 — 杉山正明『モンゴル帝国の興亡（上）－軍事拡大の時代』，講談社新書，1996 年。

七十人訳イザヤ書　—『七十人訳ギリシア語聖書　イザヤ書』秦剛平訳（青土社 2016 年）。

山内 1997 — 山内進『北の十字軍』講談社，1997 年。

〔後記〕

本稿は共同研究「初期ロシア年代記の史料学的研究」の成果である。共同執筆者の宮野裕は岐阜聖徳学園大学教育学部准教授であり，今村栄一は名古屋大学アジアサテライトキャンパス学院ウズベキスタンサテライトキャンパスのプロジェクト調整員である。

本稿は，2019 年度 JSPS 科研費，基盤研究 (C)「キエフ・ルーシ時代の諸年代記の比較対照法による編集過程の研究」（19K00469，研究代表者：中澤敦夫）の助成を受けて行われた研究に基づいている。